

(表紙)

自正徳四年十二月
至同 五年 三月

繼 豐 公

御 目 見 事 件

追 舊 記 雜 錄 卷 五 十

451 繼豊公御譜中

正徳四年甲午十二月十八日嚴父吉貴携_二嗣嫡又三郎忠
休_一、至_三執政松平紀伊守信庸_{番用}之第_一、觀面忠休始稟_レ欲_レ
奉_レ謁_二

大樹家繼公_一、乃信庸諾_レ之、故使_二留守居川上五後右衛
門親房_一前條之旨趣達_二各位之執政_上、且使_二家老島津帶刀
仲休_一候_レ信庸之第_上、從_二先躰_一家臣一員請_レ奉_レ拜_二謁
台顔_一、以呈_二例書_一見_二左方_一、

452 全御譜中

正文在家老座

(の1) 正徳四年午十二月十五日

又三郎忠休様 御目見御願可被遊旨被 仰出、左之通御
用係被 仰付_レ、

御家老 川上五後右衛門
鳴津帶刀 (仲休)
若御作寄 比志島隼人
又三郎繼御守役 (長一)
相良新右衛門 (親一)
御留寺居 川上五後右衛門

(の2)

御用番御老中 (信庸)
松平紀伊守様

右に御口上、私嫡子嶋津又三郎御序 御目見被 仰付_レ
様此節奉願度_レ、御隙次第又三郎召連掛御目度_レ、此段
以使者申達_レ、

十二月

御使者 川上五後右衛門

(の3)

一右御口上一通申達_レ後、五後右衛門御取次は相達_レ趣
考、又三郎 御目見之願疾申上筈_二外處、薩摩守事此
間中年二年在國被 仰付置候_レ、所存之外延引_二罷成
外、又三郎最早十四歳罷成_レ處、年比より_レ勢大_レ御

座外故、何とそ當年中御序表御座外ハ、御目見被
仰付外様奉願度存外、參府則奉願度存外得共、此節若
琉球人列參外付、其内取交奉願候儀及如何敷差扣、猶
延引罷成外間、何とそ近日中御隙之節又三郎召連參、
掛御目 御目見之儀及、薩摩守直願申度事御座外と申
達外、

一右之御口上書并川上五後右衛門相達外書付午十二月十
六日松平紀伊守様江五後右衛門致持參、御用人安達喜
兵衛ニ委細申上外處、紀伊守様被聞召、來ル十八日・
十九日之内御勝手次第又三郎様御同道ニ御出可被成
外、若公用ニ付る差障儀共有之外ハ、從是可得御意
旨喜兵衛ニ被仰聞外付、五後右衛門申上外者、十
九日若少々相障儀有之外間、來ル十八日又三郎致同道
伺公仕外可御座外、何時可罷出哉之旨相尋外處、
寒氣之節ニ及外間、五半時比御出可被成外、格別之儀
外間、登 城前ニ表可懸御目旨被仰外由喜兵衛申外、
何れ若薩摩守方何分と可申上旨相達置外、

松平紀伊守様

右江從 太守吉貴様川上五後右衛門ニ御口上、嫡
子又三郎 御目見願申度外付、御隙次第又三郎召連致

伺公度旨、今朝以使者申達外處、來ル十八日・十九日
之内五半時勝手次第御見舞可申由被仰聞存外、十八
日朝五半時又三郎召連伺公可仕外、右之御禮御案内旁
以使者申達外旨、同十六日御用人安達喜兵衛ニ申上
外處、紀伊守様被聞召、又三郎様御同道ニ御見舞之
儀、御使者入御念儀存外、十八日五半時御出可被成外、
其節掛御目可得御意由被仰聞外、

但喜兵衛迄五後右衛門申外ハ、又三郎幼少ニ及有之
外ニ付、守役之者壹人相付、御使者之間縁類之邊
相詰居度旨申外處、御勝手次第可被成由申外、

一十二月十八日朝五半時 太守吉貴様 又三郎忠休様御
同道被遊、松平紀伊守様江御見舞 御目見御願御直被
仰込外、太守様騎馬之御供相良源太夫・河野八郎左
衛門、御留守居川上五後右衛門、御駕籠廻・中通御目
付・御馬廻以上拾人、御先御供拾五人・其外末々之者
常式之通、又三郎忠休様騎馬之御供御守役相良新右
衛門、御近習役福山平太夫、御駕籠廻・御馬廻拾人、御
先御供拾三人、末々御供常式之通ニ御父子様御行
列引續御出被遊外、

但御兩殿様御支度不洗物、

一御持參物者何方様迄無之付、此御方様御持參物無之、

一紀伊守様御宅より御歸館之節、從御中途御逢被成、御禮、川上五後右衛門ニ被仰遣、入御念儀存、御返答、

一從 又三郎様及御禮右同人ニ被仰遣、御返答同斷、

一右之通 御目見御願松平紀伊守様ニ被仰込、土屋相摸守様・井上河内守様・阿部豊後守様・久世大和守様・戸田山城守様・間部越前守様・本多中務大輔様、

五後右衛門ニ、太守吉貴様御口上、私嫡子嶋津又三郎御序 御目見被仰付度旨、今朝松平紀伊守様ニ又三郎召連奉願置、宜御沙汰頼存、此段以使者申達、由御返答御相應又ハ御登 城之御方者、御歸之節可申上旨御取次申、

一十二月十九日松平紀伊守様ニ、御留守居森川^(武)右衛門

別御用ニ付、罷出、昨朝御同氏又三郎殿御同道

御目見願之儀被仰聞、各申談何れ被致承知、

此段乍序申進、由御書付御渡被成、年内 御目見可

被仰付、内、其用意可仕旨、御用人小嶋新次郎ニ

被仰聞、右之通被仰渡ニ付、翌廿日御馬廻宛

(04)

使者ニ御承知被成、由、紀伊守様ニ被仰遣、

覺

薩摩守初、御目見仕、節獻上物、

公方様ニ

一 御太刀・金馬代

一 御時服二十

御臺様ニ

一 銀子二十枚

右之通獻上仕、此節薩摩守嫡子又三郎、御目見被

仰付、節獻上物奉得御差圖、一位様 月光院様ニ又

三郎より獻上物奉得御差圖、以上、

十二月

松平薩摩守使者 川上五後右衛門

覺

薩摩守貞享二年五月十四日初、御目見仕、節、曾祖

父大隅守 故薩摩守より獻上物、

公方様ニ

一 干鯛一箱宛

一 昆布一箱宛

一 御樽一荷宛

右之通獻上仕り、此節薩摩守嫡子又三郎 御目見被

仰付り節、薩摩守獻上物奉得御差圖り、

御臺様に進上物先例無御座り、此節

一位様 月光院様に薩摩守進上物奉得御差圖り、以上、

十二月

松平薩摩守使者
川上五後右衛門

覺

薩摩守屹御禮申上候節者、

御城御老女衆に薩摩守贈物仕來り、此節嫡子又三郎よ

り贈物仕度り、以上、

十二月

松平薩摩守使者
川上五後右衛門

元久大隅守嫡子薩摩守寛永十八年正月十一日初め 御目見

仕り節獻上物、

一 狸々緋二十間

一 銀子三百枚

以上

十二月

一右之伺書十二月廿三日御用番松平紀伊守様に御留守居
川上五後右衛門致持參、御用人安達喜兵衛より差上り
處、追り御挨拶可被成旨被仰聞り、

(の5)

松平薩摩守口上覺

一薩摩守曾祖父大隅守事、寛永二年四月廿三日初め 御

目見仕り節、家來壹人 御目見被 仰付り、大隅守子

薩摩守元久寛永十八年正月十一日初め 御目見仕り節家

來壹人 御目見被仰付り、薩摩守亡父萬治二年七月十

一日 御目見仕り節家來壹人 御目見被仰付り處、

言貴薩摩守初め 御目見仕り節、如何相願不申り哉、家來

御目見不被 仰付り、然共亡父迄三代右之通爲被 仰

付先例及御座り間、此節嫡子又三郎 御目見被 仰付

候節、家來壹人 御目見被 仰付り様奉願度り、此段

得御内意申り、以上、

但御用番紀伊守様に差上り、此段得御内意外と申

所相除、 御目見被仰付り様奉願度り、以上、と

相記り、相摸守様・河内守様・豊後守様に差上り

者、此段得御内意申り、以上、と相記り、

十二月

使者
嶋津帶刀

覺

一薩摩守曾祖父大隅守寛永二年四月廿三日初め 御目見

仕外節家來

伊勢兵部(貞昌)

右之者 御目見被仰付外、

一大隅守子薩摩守寛永十八年正月十一日 御目見仕外節家來

家來

右兵部子
伊勢兵部(貞昭)

右之者 御目見被仰付外、

一故薩摩守萬治二年七月十一日 御目見仕外節家來

右同人
伊勢兵部

右之者 御目見被仰付外、

以上

十二月

一右御口上書并 光久様 綱久様 綱貴様 御目見年月

書付、先間部越前守様(益男)に被得御内意、御差圖次第可被

成旨被仰出、嶋津帶刀十二月廿三日越前守様(致持)に致持參、

御家老奥村治右衛門(段)に段々申達相渡外處、御城に差

上越前守様(相伺)に相伺得者、御用番様(可差)出旨被仰外

由治右衛門申遣外に付、則晚阿部豊後守様(右御口)上

書并 御目見年月書付、帶刀致持參御用人山本勝右衛

門(具相達)渡置、翌廿四日之朝帶刀罷出、勝右衛門取

合承外處、豊後守様被聞召、薩摩守家格(者)為相替事外

間、可被仰付事(二)外、御用番様(可)申出旨被仰聞外、

一十二月廿四日之朝御用番松平紀伊守様(御留守)居川上

五後右衛門案内(二)、帶刀右之御口上書并 光久様

綱久様 綱貴様 御目見年月書付致持參、御用人安達

喜兵衛(二)申上外處、委細被聞召達外、近例相欠外間

如何可有之哉、追(御)挨拶可被仰聞旨被 仰渡外、

一右之通御用番紀伊守様(御頭)被成置外段、土屋相摸守

様・井上河内守様(帶刀)罷出申上、右御口上書并 御

目見年月書付寫差上外處、被聞召置外由被仰聞外、

繼豊御譜中

一未正月十三日御用番井上河内守様より御留守居被召呼

外に付、森川理右衛門(武)罷出外處、左之通以御書付被仰

渡外、

初め 御目見被仰付外節献上物覺

公方様に

御太刀・金馬代

時服二十

一位様に

白銀三十拾枚

月光院様に

白銀貳拾枚

白銀五枚

同 三枚宛

嶋津又三郎

豊原

常盤井

三室

高瀬

川嶋

丹後

御乳人

倉橋

岩倉

かよ

青井

岩城

音羽

同貳枚宛

菊川

六條

かい津

福井

その田

三坂

(の2)

嶋津又三郎初の 御目見被仰付り節に献上物を覺

松平薩摩守

公方様に

綿三百把

以上

(の3)

嶋津又三郎
家來一人

右又三郎初の 御目見被仰付り節に召連可被罷出り、

一右御書付三通備 御覽り處 御部屋栖様御方に別立り

御家老不被付置り、又三郎様御家來一人被召連り様に

と被仰渡り間、御守役 御目見被仰付り得ず、御家之

御格式宜り間申談其筋相同可申り、御守役 御目見被

仰付^レ筋被^レ仰渡^レハ、相良新右衛門可^レ被^レ差出^レ、獻上物之儀及相伺可^レ申旨、比志嶋隼人ニ^レ被^レ仰出^レ付^レ、左之通御伺書相調、獻上物之儀老、河内守様仰渡之趣次第可^レ仕旨被^レ仰出^レ、御家老又ハ新右衛門獻上之伺目錄兩通ニ相調持參仕^レ、

松平薩摩守口上

此節嫡子又三郎 御目見被^レ仰付^レ節、先例之通家來壹人 御目見被^レ 仰付度旨奉願^レ處、 御目見被^レ 仰付^レ節、又三郎家來召連可^レ罷出旨被^レ 仰渡^レ、又三郎ハ老未家老之者附置不^レ申^レ、家老外之者ニ^レ亦不^レ苦^レハ、守役之者召連可^レ申哉、家老之内召連可^レ然^レハ、私家老之内召連可^レ申哉、何分ニ^レ御差圖奉願^レ、以上、

朱カキ
御張紙いつれニ而茂勝手次第可^レ被^レ致候

正月

一右御伺書正月十三日之晚、井上河内守様ニ森川理右衛門致持參、御用人音羽庄兵衛ニ申達相渡^レ處、御守役老御家老衆同席ニ^レ罷出人ニ^レ亦^レ哉之旨相尋^レ付^レ、守役相良新右衛門と申者老、番頭用人同前相勤者

ニ^レ、又三郎幼少より相付置、方々致^レ節老騎馬ニ^レ致供、側を放不^レ申相附居者ニ^レ由相達^レ處、河内守様被^レ聞召、新右衛門 御目見被^レ仰付^レ度趣承^レ届^レ間、何レニ^レ亦御勝手次第可^レ被^レ成旨、御張紙を以^レ被^レ仰渡^レ、依之新右衛門獻上之伺目錄庄兵衛ニ差出^レ處、最早委細申聞^レ間見^レ申^レ及^レ不^レ及^レ、其通獻上可^レ被^レ仰付^レ旨申^レ、右之通ニ^レ得^レ老、何分ニ^レ亦申上間敷旨申達^レ、右御獻上物之儀、又老御家來不^レ召連^レ様ニ^レ被^レ仰渡^レ、御請老右之節理右衛門ニ^レ被^レ仰遣^レ、

松平紀伊守様

右ニ 吉貴様御口上、嫡子又三郎 御目見被^レ仰付^レ節、家來 御目見被^レ仰付^レ度旨先月御用番之節相願^レ處、又三郎 御目見被^レ仰付^レ節、家來壹人召連可^レ罷出旨、昨晚井上河内守様より被^レ仰渡難有次第奉^レ存^レ、御禮以使者申達^レ通、正月十四日川上五後右衛門ニ^レ被^レ仰遣^レ處、御口上之趣致承^レ知^レ被^レ入御念儀存^レ、何レ及^レ從是可得^レ御意旨、御取次伊丹孫兵衛ニ^レ被^レ仰聞^レ、一相良新右衛門事、 御目見ニ^レ被^レ差出^レ付^レ、御番頭格被^レ仰付^レ、

一 正月十四日之晩、御用番井上河内守様より御連名之御奉書、芝御屋敷に御持せ被遣り付る、則達 貴聞御請被仰遣り、

同氏又三郎儀 御目見被 仰付り間、明十五日五時同道可有登 城候、其方及御禮可被申上り、以上、

正月十四日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平薩摩守殿

(06) 家來一人 御目見被 仰付り間、召連可被罷出り、以上、

正月十四日

(07) 同氏又三郎儀 御目見被 仰付り間、明十五日五時召連

登 城仕、私儀及御禮可申上旨被仰下、委細畏奉存り、恐惶、

正月十四日

松平薩摩守

吉貴判

井上河内守様
阿部豊後守様
久世大和守様
松平紀伊守様
戸田山城守様

(08) 家來壹人 御目見被 仰付り間、召連可罷出旨被仰下、
奉畏り、恐惶、

正月十四日

松平薩摩守

吉貴判

井上河内守様
阿部豊後守様
久世大和守様
松平紀伊守様
戸田山城守様

一 右兩通之御請、御馬廻御使者より河内守様被差出り、
一 正月十五日 太守吉貴様 又三郎忠休様被遊御同道、
明ヶ六時芝御屋敷御出被遊り、 太守様騎馬之御供、
三原佐々右衛門・岩山半兵衛・樺山權左衛門・相良源
太夫、御駕籠廻、中通御目付以上十人、御先御供十五

人、末々之御供常式之通、又三郎様騎馬之御供、相
良仁右衛門・小林仲太兵衛・福山平大夫・二階堂十郎
兵衛、御駕籠廻、中通御目付、御馬廻十人、御先御供
十三人、末々之御供常式之通の御登、城被遊り處、
公方様御風氣被成御座、爲御保養出御不被爲成、御目
見無之外、又三郎様御支度熨斗目御長袴、太守様御
支度熨斗目半御袴被爲召り、
一又三郎様 太守様御献上物御留守居付入江市左衛門・
柳元嘉右衛門・山元仁右衛門・今井平左衛門、御先
御城に附參、於御玄關御城坊主山田清葛・中村道務に
相渡、御納戸に相納り處、出御無之、御目見御延引に
付る、御太刀・白銀・御時服、太守様より御献上之綿
御納戸より請取持歸り、
一位様は 又三郎様御献上物并豊原様御年寄九人、表
御使衆五人に之進覽物及、右御留守居附致持參、御輿
火之番與頭出口與市左衛門殿・杉山吉右衛門殿に相渡
り處、出御無之御延引故、御廣敷御番頭本田權左衛門
殿御預置被成、追ひ 御目見之節御披露可被成旨被仰
聞り、

一月光院様に御進上物并御年寄衆四人は 又三郎様より
進覽物及、右之與市左衛門殿・吉右衛門殿に相渡り處、
御廣敷御番頭安藤又十郎殿に御預置、右同斷被仰聞り、
一正月廿五日、鳥居伊賀守様芝御屋敷に御見舞被成り節
被仰り、又三郎様 御目見に付、御献上物之儀御
沙汰之上爲被仰付る可有之外、問はる御吟味之届さ
る儀表有之事に、綱久様御事御嫡子に 御目見
之節御献上之品表有之事に、帶刀罷出御内意申上りハ
、可然哉之由被仰り付る、翌廿六日之朝井上河内
守様に罷出、御用人音羽庄兵衛に申達り、又三郎
御目見仕り節献上物之儀、先日被仰渡置り、大隅守嫡
子薩摩守 御目見被仰付り節献上仕り先例有之儀に
得、如何可仕哉、先日松平紀伊守様に奉伺書付
寫、爲御内談持參仕り旨申達り處、則河内守様に申上
被聞召置り、右之儀表得と爲承達事之由庄兵衛申り、
一正月廿七日之晩、井上河内守様より御留守居御用之由
申來り付る、森川理右衛門罷出り處、御用人松倉文右
衛門に御渡被成、則達 貴聞御承知被成り由、御請
則晩御馬廻御使者に御被仰遣り、

(の9)

初ゝ 御目見被 仰付節献上物

嶋津又三郎

公方様は

御太刀

白銀百枚

時服二十

最前金馬代被獻り様こと相達り得共、右之通可被差上り、

(の10)

嶋津又三郎儀 御目見被 仰付り間、明十五日五時可有
登 城り、其方儀表御禮可被申上り、以上、

三月十四日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平薩摩守殿

(の11)

御切紙

嶋津又三郎家來一人 御目見被仰付り間、召連可被罷出
り、以上、

(の12)

右御奉書三月十四日芝御屋敷に御用番阿部豊後守様より
御持せ被遣り付る、左之通御請之御書、御馬廻松崎藏右
衛門を以豊後守様に被差出り、

御奉書致拜見り、嫡子又三郎儀 御目見被仰付り間、明
十五日五時召連登 城仕、私儀表御禮可申上旨被仰下委
細長奉存り、恐惶、

三月十四日

松平薩摩守

吉貴判

井上河内守様

阿部豊後守様

久世大和守様

松平紀伊守様

戸田山城守様

(の13)

家來一人 御目見被 仰付り間、召連可罷出旨被仰下、
奉畏り、恐惶、

三月十四日

松平薩摩守

吉貴判

井上河内守様

阿部豊後守様

久世大和守様

松平紀伊守様

戸田山城守様

一御献上物之儀屹被仰渡、爲相究事_レ得共、御用番_々阿部豊後守様ニ相替_レ付_ル、豊後守様に御留守居川上五後右衛門罷出、伺目錄差出_レ處、御伺之通御献上可被成旨、御取次中村佐左衛門ニ被仰聞_レ、且又薩摩守支度之儀脇々承合_レ處、熨斗目半袴着爲被仕由_レ、其通可仕哉之旨奉伺_レ處、熨斗目半袴御着可被成由、右同人ニ被仰聞_レ、

一三月十五日 太守様又三郎様御同道被遊、朝六時半御登城、太守様騎馬之御供、三原佐々右衛門・岩山半兵衛・樺山權左衛門、又三郎様騎馬之御供、相良仁右衛門・福山平太夫・三原善兵衛・野村源左衛門、御駕籠廻、御先御供末々迄正月十五日御登城之節之通、又三郎様御支度熨斗目御長袴、太守様御支度熨斗目半御袴、

一公方様御白書院 出御、又三郎様 御目見、御奏者(家總)番松平備前守様御披露被成_レ、戸田山城守様より 御

目見被仰付難有奉存_レとの御取成有之退出、引續_ル

太守様 御目見、御奏者番松平對馬守様御披露、山城(五地)

守様又三郎 御目見被 仰付難有奉存_レとの御取成有

之_レ、相良新右衛門御白書院御廊下ニ被 御目見、御

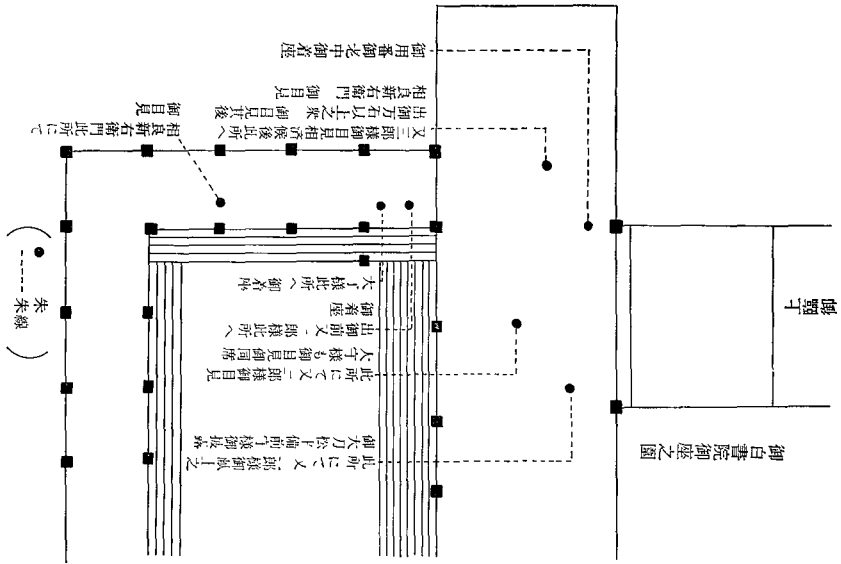
奏者番松平宮内少輔様御披露被成_レ、右相濟直 御退

出、鳥居伊賀守様に御立寄、太守様・又三郎様御支

度替被遊、御老中様間部越前守様・本多中務大輔様に

御見舞、芝御屋敷に御歸館被遊_レ、若御年寄様に老物

頭御使者ニ被御祝儀物被遣候、



(の14)

公方様江 又三郎様御献上

御太刀 一腰

白銀 百枚

時服 二十

公方様江 太守様御献上

綿 三百把

一位様江 又三郎様より

白銀 三十枚

月光院様江 又三郎様より

白銀 二十枚

公方様江

御太刀 一腰

御小袖 三

御馬 一疋

鳴津又三郎家來

相良新右衛門

長賢

白銀五枚

同 三枚宛

豊原様

常盤井様

三室様

高瀬様

川嶋様

丹後様

御乳人様

倉橋様

岩倉様

おおよ様

同 貳枚宛

青井様

岩城様

音羽様

三坂様

菊川様

居附致持参り得共、出御無之御延引に付、御廣敷

御番頭本多權左衛門殿被預置、書付御留守居附に被渡

置り處、三月十五日 御目見被仰付り付、右書付致返

納御献上物御進覽物相納り、月光院様御方表御廣敷

御番頭安藤又十郎殿被預置りに付、御目見相濟り段

申達相納り、

御太刀 一腰宛

御馬代金 一枚宛

御時服 十宛

御老中 但銘に御紋附

土屋相摸守様 井上河内守様

阿部豊後守様 久世大和守様

松平紀伊守様 戸田山城守様

間部越前守様 本田中務大輔様

御太刀 一腰

御馬代金 一枚

御時服 六

京都所司代(忠之) 但和泉守様御紋附

水野和泉守様

御太刀 一腰宛

一又三郎様御献上之御太刀・白銀百枚・時服二十、從

太守様御献上之綿三百把、御留守居附入江市左衛門・

今井平左衛門・柳元嘉右衛門・山元仁右衛門御先

御城に致持参、於御玄關 御城坊主衆に相渡り、

一位様 月光院様に御献上物并豊原様御老女衆九人、

御表使衆五人、 月光院様御方御年寄衆四人に之御進

覽物者、正月十五日 御目見被 仰付善に、御留守

御馬代金 一枚宛

御時服 五宛

但銘々御紋附

鳥居伊賀守様

大久保長門守様

御太刀 一腰宛

御馬代金 一枚宛

昆布 一箱宛

干鯛 一箱宛

御樽代 千疋宛

北條對馬守様

阿部志摩守様

久目因幡守様

御太刀 一腰宛

御馬代金 一枚宛

干鯛 一箱宛

昆布 一箱宛

安藤右京亮様

松平對馬守様

石川近江守様

松平備前守様

牧野因幡守様

松平伊豆守様

朽木民部少輔様

御太刀 一腰宛

御馬代金 一枚宛

松平主計頭様

松前伊豆守様

仙石丹波守様

横田備中守様

松野壹岐守様

中山出雲守様

水野因幡守様

伊勢伊勢守様

柳澤備後守様

駒木根肥後守様

嶋田佐渡守様

朽木丹後守様

御太刀

御馬代金

松平兵庫頭様

松平宮内少輔様

井上遠江守様

寺社御奉行正忠

御太刀

御馬代金

大久保淡路守様

大嶋肥前守様

中川淡路守様

松平石見守様

坪内能登守様

水野伯耆守様

大久保大隅守様

曲淵信濃守様

大久保下野守様

御馬代金

御太刀

御馬代金

長崎御奉行(定規)

久松備後守様

京都市御奉行(直重)

山口安房守様

大坂町御奉行(兵秀)

北條安房守様

御目付(忠)

大嶋因幡守様

稻生次郎左衛門様

村瀬伊左衛門様

佐々木五郎右衛門様

木下清兵衛様

稻葉多宮様

天野彌五右衛門様

山岡助右衛門様

三嶋清左衛門様

上田新四郎様

丸毛五郎兵衛様

昆布

干鯛

御樽代

安藤彦四郎様

神保主膳様

御太刀

一腰宛

一箱宛

一箱宛

千疋宛

百人與頭(直利)

御樽代

安藤彦四郎様

神保主膳様

御太刀

一腰宛

一箱宛

千疋宛

大岡備前守様

諏方肥後守様

鈴木飛騨守様

仙波七郎左衛門様

加藤右近様

間宮鞆負様

中根半十郎様

戸田庄右衛門様

堀八郎右衛門様

永井三郎右衛門様

三宅大學様

平岡市右衛門様

渡邊外記様

齊藤帶力様

堀田孫太郎様

御馬代

原田順阿彌様

山本傳阿彌様

池田新阿彌様

大嶋永阿彌様

河野宗阿彌様

山本甚阿彌様

銀五枚宛

村田惠齋様

横山宗智様

上田五兵衛殿

野田源兵衛殿

銀三枚宛

鈴木宗齋

江馬永味

佐々木文齋

小坂長春

中根道球

梶田市左衛門

中村道務

五枚宛

原田順阿彌様

山本傳阿彌様

池田新阿彌様

大嶋永阿彌様

河野宗阿彌様

山本甚阿彌様

銀五枚宛

村田惠齋様

横山宗智様

上田五兵衛殿

野田源兵衛殿

銀三枚宛

鈴木宗齋

江馬永味

佐々木文齋

小坂長春

中根道球

梶田市左衛門

中村道務

奥山三阿彌様

板倉久阿彌様

石川金阿彌様

原田良阿彌様

奥山吟阿彌様

小河林智様

依田十郎兵衛殿

中島養意

星野道喜

岡部雲佐

幸田三喜

成瀬又八郎

山田清葛

同

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

御用御願

銀貳枚宛

坊主

池田慶儀

内田玄徳

佐藤雲彌

中村道有

加藤春悦

湯川一雲

村山清林

鈴木一齋

村山長元

小谷最順

寺町三智

高島道伴

森谷休齋

吉田長傳

長谷川露三

川野邊宗雲

松元正貞

岩原道益

吉田恕閑

小谷最林

高橋休閑

土田文賀

藏田三碩

田中永作

萩原宗壽

高島道作

津川宗巴

松井道悦

吉田長學

長野宗久

三谷久甫

奥村喜三

藤後順喜

高橋休齋

中村良味

川村圓貞

關口林琢

廣瀬吟節

遠山清意

御徒自附

神谷傳五左衛門

高橋治助

都筑又佐衛門

藤田彌平次

各務三右衛門(元感)

矢部六郎左衛門

川元十右衛門

向山長左衛門

内藤宇兵衛

野田甚五兵衛

淺野小七郎

小澤太左衛門

山崎武左衛門

伊東左左衛門

片岡政右衛門

山尾半平

三宅權七郎

磯田武太夫

新 甚左衛門

永田藤七郎

山田佐左衛門

田澤藤九郎

湊五右衛門

荒川權六郎

林小右衛門

小高作左衛門

杉浦安兵衛(久孝)

野呂六右衛門

水谷又助

横澤庄太夫

宮川源助

高倉仁右衛門

石川淺右衛門

小山與右衛門

中山藤太夫

湯原勘助

伊東新六郎

原田與市左衛門

本間八九郎
若林勘兵衛
塚野庄左衛門
岡田源七郎
安藤藤兵衛
馬場與左衛門
花井新右衛門
飯田庄左衛門
竹嶋與五左衛門
樋口彌右衛門
植木藤助
兒玉喜兵衛
相澤傳三郎
馬場藤左衛門
伴 彌市左衛門
藤田作太夫
高倉孫三郎
長谷藤右衛門
神谷忠右衛門
芝山忠兵衛

白戸治兵衛
進藤十郎右衛門
小堀源藏
進藤八郎右衛門
北爪又兵衛
石丸貞右衛門
權太又四郎
松井權左衛門
恩田九左衛門
米野彌兵衛
蘭部善左衛門
淺野利左衛門
星野甚右衛門
近藤郷左衛門
渡邊惣四郎
海野新五左衛門
大綱幸助
工藤半兵衛
藤本權兵衛
久保田十左衛門

柴山七左衛門
渡邊源左衛門
久米新助
宮寺藤十郎
吉岡權右衛門
銀貳枚宛
百人組與力同心
金子貳百疋宛
御玄關番四十人
中之口番三十四人
縮緬 三十卷
千鯛 一箱
一位様に 太守様より
縮緬 二十卷
干鯛 一箱
月光院様に 太守様より
干鯛 一箱宛
昆布 一箱宛
鯛 一箱宛
御樽 二荷宛

神谷平左衛門
杉山助九郎
杉浦金兵衛
上村仁左衛門

公方様

一位様に 御前様より

干鯛 一箱

昆布 一箱

御樽 一荷

月光院様に 御前様より

干鯛 一箱

昆布 一箱

銀子 三枚

太守様より 豊原様に

銀子 三枚宛

常盤井様

高瀬様

丹後様

倉橋様

おかよ様

銀子 二枚宛

浦尾様

小野山様

美坂様

菊川様

六條様月光院様御年寄

福井様

右 太守様より

干鯛 一箱

金子 五百疋

御前様より 豊原様に

金子 五百疋宛

常盤井様

高瀬様

丹後様

倉橋様

おかよ様

金子 三百疋宛

浦尾様

小野山様

岩城様

三坂様

六條様月光院様御年寄

福井様

岩城様

海津様

蘭田様

音羽様

青井様

菊川様

海津様

蘭田様

三室様

川嶋様

御乳人様

岩倉様

おさゑ様

瀧津様

浦尾様

音羽様

青井様

菊川様

海津様

蘭田様

御前様より

鮮鯛 一折宛

公方様

一位様

月光院様（島津綱貫御書）
信證院様より

右之通 御目見首尾能相濟外付、女中使を以三月十六日御内所より御献上又老御老女衆は右之通銘、被遣外處、一位様 月光院様は被遂御披露御満足被思召外旨、右御兩所様御老女衆より 又三郎様御宛書の御文被遣り、此御方より老女中御使の御文老無之、但大守様 御前様より右之通御献上物有之外得共、
從 又三郎様老御献上物無之、

一 三月十七日上野は 又三郎様御參詣、騎馬之御供相良
新右衛門・相良仁右衛門・三原佐々右衛門・樺山權左
衛門、御駕籠廻り去ル十五日御登 城之節之通、御馬
廻、中通御目附以上十人、御先御供并末々迄十五日同
斷、

一 御宮は直御參詣、二天門邊迄御宿坊明王院出迎御案内
被申外、御奉納物老、御留守居森川理右衛門 御宮は

持參外處、出家出迎請取之、神前は被備、其後御拜
禮、

一大猷院様 嚴有院様 常憲院様 御佛殿は御參、御奉
納物御拜禮之次第右同斷、

一 御太刀 一腰
一 御馬代金 一枚

右 御宮は

一 白銀 十枚宛

大猷院様

御佛殿

嚴有院様

御佛殿

常憲院様

御佛殿

一 白銀

三枚宛

御宮御別当

寒松院

大猷院様御別当

東漸院

嚴有院様御別当

津梁院

常憲院様御別当

大慈院

一 紗綾

五卷

御宿

明王院

一 御太刀

一腰宛

一 御馬代金

一枚宛

一縮緬 十巻宛
上野 准后様

新宮様

一三月廿四日増上寺 御佛殿に 又三郎様御佛詣、騎馬之御供相良新右衛門・相良仁右衛門・河野八郎左衛門・岩山半兵衛、御駕籠廻、中通御目附、御馬廻以上十人、御先御供末々之御供上野御參詣同斷、

一合徳院様御佛殿に御參詣、御宿坊源壽院御案内相勤外、
(家直) 文昭院様 (徳川綱重) 清揚院様御佛殿に御參詣、夫より増上寺方

丈に御見廻、直御歸館被遊外、

一右御獻納物去、御銘々御留守居川上五後右衛門 (親房) 御佛殿に持参仕外處に、出家出迎請取之、御佛殿に相備御拜禮被遊外、

一銀子 十枚宛

合徳院様 御佛殿
文昭院様 御佛殿
清揚院様 御佛殿

一紗綾 十巻
一昆布 一折

増上寺方丈

一銀子 三枚宛

合徳院様御別当 惠眼院
寶松院
文昭院様御別当 眞乘院
清揚院様御別当 通玄院

一銀子 二枚

増上寺 御宿坊 源壽院

一又三郎様初め 御目見首尾好相濟外付、三月廿七日從

一位様本間豊前守様御使に左之通御拜領、
(秀孝)

一銀五拾枚

一千鯛一箱

一御樽一荷

一位様より 太守様に

一銀三拾枚

一千鯛一箱

一御樽一荷

一位様より 御前様に

一綿 百把

一千鯛一箱

一御樽一荷

一位様より 又三郎様

一千鯛 一箱

一 豊前守様御出前、右御拜領物幸領人相附、芝御屋敷に持参仕付、常々御拜領物之通表御門開、御玄關ニ
西大番之面々請取、

一時服 五 右 大守様より
一千鯛 一箱

一 豊前守様御出被成り節、 太守様 又三郎様御玄關く
り石迄御出迎御式對有之、 太守様豊前守様を御案内被成、表御書院に御着座被遊、 又三郎様御同席に御着座被遊、豊前守様御口上被仰達、御拜領之御目錄
太守様又三郎様に御渡御頂戴、則 太守様又三郎様御入被遊、

一紗綾 五卷 右 又三郎様より
一時服 一箱
右 御前様より

一 三汁七菜之御料理、御銚子三篇、御菓子并御後段出御料理相濟、追附 太守様又三郎様御出被遊、豊前守様
と御盃御取替シ有之、

一 右相濟 太守様又三郎様御請被仰上、追付豊前守様御立被成り付 太守様又三郎様最前之通御玄關くり石迄御送被成、御式對有之、
一 右之通御拜領物之御禮御文を以被仰上、御前様より
も女中使ニ御禮被仰上、

一 豊前守様は 太守様・又三郎様・御前様より左之通被遣、

(表紙)

吉 貴 公

正 德 五 年

繼 豐 公

追 舊 記 雜 錄 卷 五 十 一

454 吉貴公御譜中

正文在文庫

改年之御慶玆重なり、仍昨日老御出欣然之至存り、猶期後喜之節り、恐々謹言、

朱力平 正德五年 正月十日

繼友判

在口裏 薩摩中將殿 御宿所 尾張中納言 繼友

卷51 正文在文庫

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

正德五年正月十一日 吉貴御判

456 吉貴公御譜中

正文在文庫

明十五日五時登

城、年始之御禮可被申上り、以上、

朱力平 正德五年 正月十四日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平薩摩守殿

457 全上

同氏又三郎儀 (繼豊)

御目見被 仰付外間、明十五日五時同道可有登 城候、
其方及御禮可被申上外、以上、

朱カキ
正徳五年
正月十四日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平薩摩守殿

全上

正文在文庫

家來一人

御目見被 仰付外間、召連可被罷出外、以上、

朱カキ
正徳五年
正月十四日

全上

松平薩摩守口上

此節嫡子又三郎

御目見被 仰付外節、先例之通家來一人 御目見被仰付

度旨奉願外處、

御目見被 仰付外節、又三郎家來召列可罷出旨被仰渡外、
又三郎に老未家老之者附置不申外、家老外之者に及不
苦外ハ、守役之者召列可申哉、家老之内召列可然外ハ、
私家老之内召列可申哉、何分ニ及御差圖奉願外、以上、

朱
「正徳五年」 正月

朱
「張紙」

「井上河内守様より御渡被成外」

朱
「井上河内守様より御渡被成外」

460 吉貴公御譜中

正徳五年乙未正月十五日、吉貴咳嗽平腹、受執政之奉
書、登レ營賀ニ歳首、且依ニ奉書、嗣適忠休始爲レ奉レ

謁ニ

大樹家繼公ニ同攜、然

大樹家遠有ニ不豫、無ニ出席、乃止ニ其事、

461 吉貴公御譜中

正文在文庫

舊臘廿六日之貴翰拜見仕候、

公方様益御機嫌能被成御座奉恐悦外、然老御加階之儀被

仰出、難有被思召_レ由、位記等之儀付_ル、以御使者奉書
被遣之旨承知仕_レ、將又右爲御祝儀、御太刀・馬代黄金
十兩・時服十被懸御意忝奉存_レ、恐惶謹言、

朱カキ
正徳五年
正月廿一日
水野和泉守
忠之判

松平薩摩守様
貴報

462
全上

なをく表へも御禮仰入られ_レ得共、またこなたへ
も御ふみのやう御念入らせられ_レ御事、何もよろし
く御さ_レたいし_レへく_レ、めてたくかしく、

御ふミ下され_レ、まつく

公方様御機嫌よくならせられ_レ御事、御めて度覺しめし
被成_レ由、しかれば、ふゆとしは歳暮之御祝義、上使野
澤源左衛門(前男)にておくさまへ御もく録の通被遣_レ得者、難
有覺しめし被成_レ由にて、御禮仰入られ御ふみのやう御
念入_レ御事ニ存まいらせ_レ、めてたくかしく、

宛カキナン本ノマ、

此よしよく申せとて_レ、なをく幾久しく相替_レらす

御拜領の御事と祝入まいらせ_レ、かしく、

文くたされ_レ、まつく

一位様御機けんよく御座被遊、めてたく思しめし被成_レ
(天英院・家宣夫人)
よし、さては去冬

公方様より歳暮之御祝儀として、上使にて御奥方へ御目
録御拜領被成_レ御事、御てまへさまかたしけなく思しめ
し被成_レよし、御禮御ふいてう仰あけられ、文のやう披
露いたしまいらせ_レへハ、御念いらせられ_レ御事ニ思し
めし_レ、かしく、

朱カキ
正徳五年

松平さつま守さま
人、御中
返事
梅その
いわた

464
吉貴公御譜中

扣正文在文庫

覺

一今度中山王差上_レ兩使者より相尋_レ者、此節御老中よ
り被下_レ御返翰内々拜見仕_レ處、御文章之様子先格ニ
相替、大命・有降・上眷・優渥杯と有之、御書留_レ相
替、宛書も中山王と計御座_レ、然者前々より中山王書

來候文章之内 大君・貴國・鈞命・台聽杯と奉敬書來

465 正文在文庫

り得共、此節之御返翰ニ奉對りゝハ、不相應ニ可有御

座哉と存り、來年若御老中迄今度之御禮、以書翰申上

ル筈ニ御座り、右躰之文字何様ニ相調可申哉と申り、

一 一位様 (家継生母) 月光院様御名及何様書調可申哉、且又 御二

方様御儀、御同様之敬ニ書調可申哉と相尋申候、

一 先頃御内意致承知り三通之文字之儀、何となしに用様

之心を相尋り處、大君若大なる君と申りゝ 帝王之

事を表申り、其國土之主君之事ニ用申文字ニ御座り、

台聽若三公之耳ニ達シり事を申り、三台星に表して三

公御座り、其三公外之人ニ此字を用申り時若、非禮ニ

罷成候、且又貴國若貴人・高人杯と申り様ニ、向之國

を尊敬して用申文字ニ御座り由申り、右之分先承置

り、

右通此節之使者共私迄相尋、中山王江可申聞由申り付

り、後日返答可申聞と申りゝ發足仕せ申り、早竟御返

翰ニ奉對りゝハ、帝王ニ奉用文字ニ可仕哉と尋申躰ニ

り、此段何様ニ可申聞哉、得御内意申り、以上、

朱力キ 正徳五年 正月 御名

右切紙封目封之字書調、上包ニ計宛所阿部豊後守様と書調

一 一位様 月光院様御稱號之事、彼使者相尋り由に、
 天英・月光の御號を用ひり事可然り、次に又書式同異
 之事相尋り由に、是又當時御相當之通にて可然り、
 今度我國王へ被下物等少しく御差別有之り上は、此等
 の例を以てよろしく相心得へく外事、
 一 今度返書之式先例に違ひり由、彼國使者申り由、此義
 におゐてハ難心得り、彼國國^(王)よりの書式、尚貞王代迄
 は、代々の書法大かたハ我國往來の書之古式にて、御
 の字・候の字・誠恐謹言等の字を用ひ、禮紙等之式を
 用ひ來りり、依之返書之式も來意に答へりて、其式に
 准し候、尚益王時に至り、差遣り使者歸國之後、謝恩
 書來りり時よりして、其書法專に漢語を用ひ、函封等
 之式を用ひり、此義恭敬之禮意と見えりによりて、返
 書之式も又其來意に答へりて大躰其式に准しり、但し、
 披露狀に答へり式と、自分へ來りり狀に答へり式とは
 不相同り、此度ハ披露狀ハかりの儀に候を以て、尚益
 王代披露狀に答へり例に准しり書法にり、然者今度始
 て改りり儀にハ無之り外事、
 一 彼使者相尋り事共は、我國の故實、當時の事宜等不相
 心得り故と相見えり、右書付之趣を以、薩州より宜有

466

指南り、但し、近例のことく專漢語を用ひりてハ、御
 相當の文字を難得事もりハ、尚貞王以前の例のこと
 く大躰我國通用の文字を用ひりとも、恭敬の禮意に相
 妨くへき事にも無之り、但し、此等之義は彼國にての
 議定に任せらるへく外事、

右五條宜被相心得り、以上、

朱力キ

正徳五年 正月

全上

正文在文庫

覺

從中山王之書式此方之通ニ可仕りハ、

上々様方之御事ハ、

公方様

天英院様

月光院様

右之通ニ相認可然事ニり、以上、

朱力キ

正徳五年 正月

467 全上

正文在文庫

今度就中山王兩使相尋外事、被得内意外趣及返答外、五條委曲被承知、依之自今以後從中山王之書狀目錄等、准先例可用此國之書法外由可被申付、存寄之次第得其意外、以上、

朱力キ
正徳五年 正月

468 全上

先頃琉球之儀相達外之趣御承知、御聞合之書付被差越之、何及一覽之事外、依之別紙以書付相達外間、猶又御申聞外品及外者、重可被仰越外、以上、

朱力キ
正徳五年 正月廿六日
阿部豊後守
松平薩摩守様

469 全上

扣正文在文庫

中山王兩使者相尋外儀付奉得御内意外處、五ヶ條之以御書付被仰下趣、委細得其意御尤奉存外、右書付之趣を

以可申付外得共、惣の琉球人之儀、言葉十分難通外付る、

子細有之儀者猶以難通外間、第一御相當之文字用外儀付外ハ、心得違之文法及可有之哉と心遣ニ存外條、此以後者漢語を用不申、前より琉球江一通り致來外小豎文之躰ニ、和之文章ニ相調、勿論目錄等迄一向和國通用之書式ニ仕外様可申付と存外、此段申上外、以上、

朱力キ
正徳五年 正月廿七日 御名

上封有之ためニハ封之字を書阿部豊後守様と宛書

470 吉貴公御譜中

正文在文庫

先頃琉球國より書翰之儀付の被 御申聞外趣各申談、以別紙相達外條、此御心得可被成外、以上、

二月二日
阿部豊後守
松平薩摩守様

471 全上

扣正文在文庫

先頃琉球國より之書翰付の申上儀御座外處、被仰談委細御別紙を以被仰下趣畏存外、弥以和國之書法ニ仕、取仕

立之儀、此程掛御目、通可申付、以上、

朱力年
正德五年 二月三日 御名

472 吉貴公御譜中

同年二月二十一日、琉使與那城王子・金武王子到、著于薩府、家老肝屬兼柄等護送之、

473 全上

正文在文庫

一筆致啓上候、

公方樣益御機嫌克被成御座旨承之、奉恐悅、然者仙石(久地)丹波守殿・石河三右衛門殿去十七日當地着船付、拙者儀旅宿に罷出、遂對話之、土屋相摸守殿始御老中御連名之御奉書持參被相渡、今度就長崎表御用之事、爲上使仙石丹波守殿、御目付石河三右衛門殿被差遣之、右兩人并長崎奉行中被相達候儀於有之者、宜申合之旨被仰下、右之趣爲可得貴意若是御座候、恐惶謹言、

朱力年
正德五年 二月廿三日

松平薩摩守樣

人、御中

(小倉城主)
小笠原右近將監
忠雄判

474 吉貴公御譜中

同年三月五日、吉貴奉賀將軍

宣下、招執政土屋相摸守政直・久世大和守重之・戸田山城守忠眞、副執事鳥居伊賀守忠救・大久保長門守教重於芝第一、供盛膳、奏噺、戲下執役之士十數輩來、爲伴食、親戚松平隱岐守定直・同飛彈守定英・鳥居丹波守忠利・酒井飛彈守忠菊・水野壹岐守忠定及戲下之士數十輩、豫來被待之、同日獻檜重一組・鮮鯛一折於家繼公、進同二組・同二折於天英院殿、月光院殿、吉貴夫人亦獻鮮鯛三折於家繼公、天英院殿、月光院殿、吉貴又贈檜重七組・茶七箱・鮮鯛七折於執政井上河内守正岑・阿部豐後守正喬・松平紀伊守信庸及大久保佐渡守常春・森川出羽守重興・間部越前守註房、本多中務太輔忠良、是賀今日之饗宴也、

475 吉貴公御譜中

正文在文庫

改年之吉兆雖事舊、呈一緘、滋可爲勇健、此邊無恙、仍如目錄贈之、猶屬口上不能多毫、謹言、

朱力キ
正徳五年
季春十一鳥
(近衛家久)
(花押) No.4

薩摩中將殿

全上

肇年之賀儀珍重外、如例 營中へ以使者申入外序、啓一簡外、愈可爲平安外、此表無恙外、仍如目錄且調合之保之贈之候、餘屬口上外、謹言、

朱力キ
正徳五年
春末十一
(近衛家熙)
(花押) No.3

薩摩中將殿

全上

城中へ年始賀儀令申入外序、呈一簡外、弥可爲平安外、此邊無異外、仍如目錄贈之外、猶屬口上外、謹言、

朱力キ
正徳五年
暮春十一鳥
基熙

松平薩摩守殿

全上

嶋津又三郎儀

御目見被 仰付外間、明十五日五時同道可有登 城外、

其方儀表御禮可被申上外、以上、

朱力キ
正徳五年
三月十四日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平薩摩守殿

全上

嶋津又三郎家來壹人

御目見被 仰付外間、召連可被罷出候、以上、

朱力キ
正徳五年

吉貴公御譜中

同年三月十五日、受_二執政之奉書_一、攜_二忠休_一登_レ營、

忠休始奉_レ謁_二

家繼公_一、獻_二御太刀一腰・御馬代白銀百枚・時服二十_一、

進_二白銀三十枚于 天英院殿、同二十枚于 月光院殿_一、

吉貴亦奉_レ謁_二

家繼公_一、獻_二綿三百把_一、忠休始謝_二奉謁_一、忠休守役相

良新右衛門長賢奉_レ拜_二謁 御前_一、獻_二上御太刀一腰・御馬代銀壹枚・時服三領_一、

愚按 忠休公十五歳ノ御時ニ當_レリ

481 全御譜中

正文在文庫

さつまの中將より今度加階の御禮として、黄金百兩・御絹三十疋しん上おハしまし、披露申て_レ外へハ、おもしろく覺しめし_レ外と申せとて_レ外、御心得_レ外で、よくよくころえ_レ外てつたへられへ_レ外、かしく、

誰_二てももの

御局へ參
まごらせ_レ外

朱ニテ

在口裏

仰 正徳 三十五
三十五 十六

482 繼豊公御譜中

正徳五年乙未三月十五日、應_二執政之奉書_一 在吉貴、之辭中

吉貴携_二忠休_一登_レ營、忠休始奉_レ謁_二

大樹家繼公_一、獻_二御太刀一腰・馬代白銀百枚・時服二十一_一、

家臣相良新右衛門長賢_{守役且}奉_レ拜_二謁

台顔_一、奉_レ獻_二御太刀一腰・馬代白銀一枚・時服三_一、

吉貴亦獻_二綿三百把_一、奉_レ謁_二

公_一、而忠休始拜_二謝奉謁_一矣、且進_下呈白銀三十枚于_二

天英院殿_一 前大樹家賢、公之御齋君、同二十枚于_中 月光院殿_上、

483 吉貴公御譜中

同年三月十七日、天英院殿賀_二忠休始謁_一

將軍家_一、以_二本間豐前守_一、賜_二白銀五十枚・一種一荷于

吉貴、同三十枚・一種一荷于吉貴夫人、綿百把・一種一

荷于忠休_一、

484 繼豊公御譜中

同月十七日、天英院殿見_レ賀_二忠休始謁_一

將軍家_一、以_二貴价本間豐前守_一、白銀五十枚・一種一荷

賜_二吉貴_一、同三十枚・一種一荷賜_二吉貴之夫人_一、綿百把・

一種一荷賜_二忠休_一、此外總詳_二于後_一、

485 吉貴公御譜中

正文在文庫

明廿八日

敕使 法皇使爲 御馳走御能就被 仰付_レ、例月之御禮
無之_レ條不及登 城_レ、以上、

朱力キ
正德五年 三月廿七日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平薩摩守殿

486 吉貴公御譜中

正文在文庫

謹奉啓上候、去夏江戸_レ指上申_レ兩使、以 御威光首尾
能相仕舞、當春歸帆仕難有次第奉存_レ、依之從 公方様
天英院様 月光院様拜領之内、金欄一卷・綸子染物一端・
縮緬染物一端進上之仕候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ
正德五年 卯月二日

中山王

尚敬判

進上中將様

487 吉貴公御譜中

正文在文庫

嶋津又三郎儀元服被 仰付_レ間、明五日五半時 御城_レ
可被差出_レ、且又其方儀及御禮可被申上_レ、以上、

朱力キ
正德五年 四月四日

松平紀伊守

久世大和守

阿部豊後守

松平薩摩守殿

488 全御譜中

同年四月五日受_レ執政之奉書_一攜_レ忠休_一登_レ營、忠休元服
家繼公手自加冠、賜_レ御諱字及稱號_一、號_レ松平大隅守繼
豐_一、被_レ紋_一任從四位下侍從_一、而賜_レ御盃_一、御肴_一、賜_レ
雄刀一腰_一備前國即宗
代七百貫、繼豐獻_レ眞御太刀一腰_一備前國重寶
代金十枚、御馬
代白銀三百枚・時服二十于 將軍家_一、進_レ白銀三十枚于
天英院殿、同二十枚于 月光院殿_一、吉貴亦奉_レ謁_一
將軍家_一、獻_レ御太刀一腰_一、御馬代黃金十兩・綿二百把于
將軍家_一、進_レ縮緬十卷_一・二種雙樽于 天英院殿、紗綾十
卷_一・一種雙樽于 月光院殿、吉貴夫人亦獻_レ上三種二荷于
將軍家_一、二種一荷于 天英院殿、一種一荷于 月光院殿_一、

奉_レ謝ニ繼豐元服之事、同六日 天英院殿以_ニ堀丹波_一 (正勝)
守、賀_ニ賜色羽二重十疋・干鯛一箱・樽酒一荷于繼豐、
三種二荷于吉貴、三種一荷于吉貴夫人、

扣正文在文庫

隅州様就 御元服御献上物

公方様_に

眞御太刀 備前國重寶
代金十枚

白銀三百枚

時服二十

一位様_に

白銀三十枚

月光院様_に

白銀二枚 (十兩九)

隅州様より

公方様_に

御太刀・金馬代

綿二百把

太守様より

白銀五枚

同 三枚宛

同 貳枚宛

月光院様御方
銀貳枚宛

豊原様

隅州様より

常盤井様

三室様

高瀬様

川嶋様

丹後様

御乳人様

倉橋様

岩倉様

おかよ様

青井様

岩城様

音羽様

三坂様

菊川様

六條様

かいつ様

福井様

園田様

御内所御献上物

一位様に

縮緬十卷

内五卷紅

壹荷二種

月光院様に

紗綾十卷

内五卷紅

壹荷一種

太守様より

公方様に

二荷三種

一位様に

壹荷二種

月光院様に

壹荷一種

御前様より

朱力キ
正徳五年

全上

扣正文在文庫

一又三郎様初（季孝）御目見被遊り付、三月廿七日從一位

様本間豊前守様

上使二ゐ、

太守様に銀子五拾枚・一種壹荷、御前様に銀子三拾枚

一種壹荷、又三郎様に綿百把・一種壹荷御拜領被遊り、

又三郎様に及不相替 上使を以御祝儀御拜領被遊り

儀、一段之御仕合御座り、

右之旨御國元に可申遣旨被仰出り、

一御祝儀事付其御地より御祝儀申上り次第、此節被仰

出り付、仰出別紙に書寫差越り、向後間違無之様可

被申渡り、

一此節之御祝儀者、御城代・御家老・若御年寄・大目附、

又（島津久徳）兵庫殿・周防殿・小源大殿、又（久徳）嶋津左衛門・嶋

津筑後（忠徳）右面より書狀を以、此方御家老迄御祝儀被申

上答り、其外者其御地於御城、別紙

仰出之通御祝儀申上答り、

但嶋津左衛門事ハ當時勝手不自由付、自分使差上り付

儀御免被遊置り得共、格式表爲替人二ゐり故、右

之通爲被仰出御事り間、書狀を以御祝儀申上り儀

老筑後同前相勤答ニ、

一 御當地に御祝儀事申上り段々の次第、去ル卯年於御當地被 仰出、將監方其御地に申遣置り趣有之り處、舊冬御參府御祝儀申上様、右之趣ニ老相替り、如何様間違と相見得り間、向後老此節被仰出り趣を尤可被相守り、先年申越り趣寫別紙差越り、右間違ニ付、御斷ニ老不及り、以上、

朱力キ

正徳五年

四月六日

嶋津帶刀(仲休)

嶋津將監(久当)

嶋津大藏殿(久明)

嶋津内記殿(久實)

種子嶋彈正殿(久基)

肝付主殿殿(兼柄)

全上

扣正文在文庫

一 又三郎様御事明五日 御元服被仰付り間、五半時御登城可被成り、且又

太守様表御禮可被仰上旨、去四日御老中様御連名御奉書御到來候故、五日御登 城被遊り處、黒御書院於御

縁類、先 御目見 上意有之付り、御脇指を被置、御下段之内ニ被爲進り處、御下段於中央 御一字御稱號之御折紙御拜領、御月番久世大和守様御渡御頂戴、御次ニ

御退座被遊り時、御老中様御列座ニ、從四位下侍從

ニ被仰付旨被仰渡、則御獻上之眞御太刀御奏者番被持

出り時、御下段に大隅守様此節 御名被改候 御出御禮、又御次

ニ御退、御脇指を被置、最前之所に御出席、御引渡御

給、御土器御頂戴、御手自御看表御頂戴、御道具佛前圖 則宗代

七百 御拜領御退座、又最前之席ニ 御出席、御銚子御引

渡下りり後、御老中様御挨拶之上御禮被仰上 御退座、

一 右之後 太守様御出席

御目見御禮被仰上、直ニ 御父子様御同道御老中様方

に御禮ニ御廻、晝九時過 御歸館被遊り、

一 右之通 御名老 大隅守様と被改、 御實名ハ 繼豊

公と被改候、

一 御禮相濟り後 太守様に御老中何れ表様御逢被成、大

隅守様今日之御仕廻殊之外結構り由、呉々御褒美被成

り、其後御仕廻結構之段、重石御通達可被成旨、京極

大膳大夫様に御老中様被仰、早速於 殿中大膳大夫様(爲 申)

より御傳被成り、

一 御献上物之品ハ別紙差越り、

御官位之儀、御内々之御願及無之ハ處、早々先御例ニ

聊不相替被 仰付、殊當日天氣及能、彼是御首尾無殘

所、千秋萬歲恐悅至極御事共ニハ、此旨何れも目出度

被奉承知、勿論お須磨様ハ早々可被申上ハ、

一 御稱號御拜領之上者、勿論松平大隅守様と、奉申答ハ

處、萬一無調法之者不奉得其意儀も可有之哉と、御當

地之儀ハ、支配頭より末々迄不殘申聞ハ様ニと申渡ハ、

其御地之儀及其心得可有之儀ハ、

一 太守様と唱申程之節者 隅州様と可申上ハ、勿論書付

等ニ表右之通、

一 琉球書翰并嶋津兵庫殿・嶋津小源太殿・嶋津周防殿何

そ付書狀ニハ被申上ハ節、又者惣ハ 御位を唱、或書

記置程之節者、侍從様と認可申ハ、

一 拾遺様と書申問敷ハ、

右三行之趣ハ被 仰出ハ間、爰許之儀、通達ニハ申渡

ハ間、於其許も不洩様可被致通達ハ、以上、

但 隅州様と奉唱ハ者、御領國ニハ之事ニハ、勿論他

所之者ニ對ハル者 大隅守と唱申答ハ、

朱カキ 正徳五年 四月六日

嶋津帶刀 嶋津將監

嶋津備前殿

嶋津大藏殿

嶋津内記殿

種子嶋彈正殿

肝付主殿殿

繼豊公御譜中

同年四月五日、吉貴應ニ執政之奉書、搦ニ忠休ニ登レ

營、

家繼公出ニ御于白書院、御手自加ニ首服、賜下御諱繼一

字與ニ稱號ニ折紙上、執政久世大和守重之執ニ達之、於レ

是號ニ松平大隅守繼豊ニ退座、執政列居不詳降ニ

台命一、紱ニ從四位下、任ニ侍從一、重奉レ謁レ

公、頂ニ戴御盃及御手自御挾看一、且賜ニ御刀一腰 備前國 則宗代

七言、時繼豊獻ニ御太刀一腰 備前國重興 時服二十・馬代白

銀三百枚一、以奉レ申ニ謝之、奏者番 姓名 奏ニ達之、吉

貴亦奉レ謁レ

公、獻ニ御太刀・馬代黄金十兩・綿二百把一、奉レ申ニ謝

正文在文庫

正文在文庫

可爲 松平

正德五未

四月五日



(印文「家繼」)

正德五未

四月五日



松平大隅守とのへ

繼

前ニ全シ

正文在文庫

嶋津大隅守

正文在文庫

上卿 六條中納言(有藤)

正德五年四月五日宣旨

源繼豐

宜敍從五位下

藏人左中辨藤原益光奉

在口裏

宣案

源朝臣繼豐

右可從五位下

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宜授
榮爵、用旌寵章、可依前件、主者施行、

正德五年四月五日

朱印

二品行中務卿 邦永親 王宣

正四位下行中務大輔臣藤原朝臣德光奉

從五位下守中務少輔臣中原朝臣行

正二位行權大納言臣 豐忠(広藤)

正二位行權大納言兼右近衛大將臣

正二位行權大納言臣 致季(西園寺)

正二位行權大納言臣 昭尹(醍醐)

從二位行權大納言兼左近衛大將臣 (三條) 吉忠

從二位行權大納言臣 (正三條) 公統

從二位行權大納言臣 (坊城) 俊清

從二位行權大納言臣 (一) 兼香

從二位行權大納言臣 (鷲尾) 隆長

從二位行權中納言兼民部卿臣 (下冷泉) 爲經

從二位行權中納言臣 (日野) 輝光

從二位行權中納言臣 (岩倉) 具偏

從二位行權中納言臣 (滋野井) 公澄

從二位行權中納言臣 (六條) 有藤

從二位行權中納言臣 (中山) 兼親

正三位行權中納言臣

正三位行權中納言臣

權中納言從三位臣尚房等言

制書如右、請奉

制、附外施行、謹言、

正德五年 四月五日

制可

朱イン

月日辰時從四位上行大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣

右 中 辨 光 榮

攝政從一位朝臣

太政大臣闕 (三條素治)

從一位行左大臣朝臣 (二條實光)

右大臣正二位朝臣 (近衛家入)

內大臣正二位朝臣

兵部卿闕

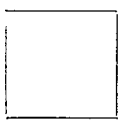
從五位上守兵部大輔積房

正四位上行右大辨治房

告從五位下源朝臣繼豐奉

制書如右符到奉行

從四位下行兵部少輔泰連



(天皇御璽)

大錄

少錄

少錄

正德五年 四月五日

497 正文在文庫

上卿 中山中納言 (兼親)

正德五年四月五日 宣旨

從五位下源繼豐

宣任大隅守

在口裏 藏人右中辨藤原光榮奉

口 宣案

正文在文庫

從五位下源朝臣繼豐

正三位行權中納言藤原朝臣兼親宣、奉

敕、件人宜令任大隅守者、

正德五年四月五日少外記兼宮内少輔少内記中原

朝臣友昌奉

499 正文在文庫

上卿 万里小路中納言(前)

正德五年四月五日 宣旨

從五位下源繼豐

宣敍從四位下

在口裏 藏人頭左近衛權中將藤原基香奉

口 宣案

500 正文在文庫

從五位下源朝臣繼豐

右可從四位下

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宣申
榮級、用旌寵章、可依前件、主者施行

正德五年四月五日

朱イ

二品行中務卿邦永親王宣

正四位下行中務大輔臣藤原朝臣德光奉

從五位下守中務少輔臣中原朝臣行

正二位行權大納言臣 豐忠

正二位行權大納言兼右近衛大將臣

正二位行權大納言臣 致季

正二位行權大納言臣 昭尹

從二位行權大納言兼左近衛大將臣 吉忠

從二位行權大納言臣 公統

從二位行權大納言臣 俊清

從二位行權大納言臣 兼香

從二位行權大納言臣 隆長

從二位行權中納言兼民部卿臣 爲經

從二位行權中納言臣

兵部卿闕

從二位行權中納言臣 輝光

從五位上守兵部大輔植房

從二位行權中納言臣 具偁

正四位上行右大辨治房

從二位行權中納言臣 公澄

告從四位下源朝臣繼豐奉、

從二位行權中納言臣

制書如右符到奉行、

從二位行權中納言臣 有藤

從四位下行兵部少輔泰連

正三位行權中納言臣 兼親

大錄

正三位行權中納言臣

少錄

權中納言從三位臣尚房等言



(天皇御璽)

制書如右、請奉

正德五年四月五日

制、附外施行、謹言、

正德五年四月五日

正文在文庫

制可 朱イ

上卿 廣幡大納言 (殿忠)

月日辰時從四位上行大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣

正德五年四月五日 宣旨

右中辨光榮

從四位下源繼豐朝臣

攝政從一位朝臣

宜任侍從

太政大臣闕

藏人頭右大辨藤原朝臣治房奉

從一位行左大臣朝臣

在口裏 宣案

右大臣正二位朝臣

內大臣正二位朝臣

正文在文庫

從四位下源朝臣繼豐

正二位行權大納言源朝臣豐忠宣、奉

敕、件人宜令任侍從者、

正德五年四月五日少外記兼宮内少輔少内記中原

朝臣友昌奉

504 正文在文庫

蹴鞠爲門弟紫組冠懸之事、窺 叡慮所免之如件、

正德五年

四月五日

薩摩侍從殿

(飛鳥井) 雅香

503 正文在文庫

從五位下

上卿 六條中納言

職事 裏松辨

大隅守

上卿 中山中納言

職事 烏丸辨

從四位下

上卿 万里小路中納言

職事 園頭中將

侍從

上卿 廣幡大納言

職事 清閑寺頭辨

505 吉貴公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之外之條、不及登 城外、以上、

朱力キ 正德五年 四月十四日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豊後守

506 吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

松平薩摩守口上

私嫡子大隅守先頃官位被 仰付外付、月次出仕爲仕度相

願申外、以上、

〔朱〕正德五年〕四月十六日

〔右之通御願可然旨、鳥居伊賀守様より森川理右衛門被召呼

被仰聞付而、十六日御用番久世大和守様江右口上書付致

持參、御用人大久保沢右衛門ニ差出外、且又、十八日惣

出仕ニ付而登、城可仕哉之由申上外処、先御延引可被成

外、御出仕御願之儀者追而御挨拶可被仰聞旨被仰渡外、

一同日之晚大和守様江理右衛門被召呼、御願之通御出仕可被

成旨、右之御口上書張紙を以被仰渡、

507 全御譜中

同年四月十七日、相當

東照宮百年忌景、有法會於野州日光山、豫依二台

命、吉貴之使者島津帶刀仲休、繼豐之使者相良新右衛

門長賢登山、各獻二納御太刀・御馬代金、

508 吉貴公御譜中

正文在華林寺

被奉寄進

西霧島權現

一幡三十二流芭蕉布

内十六流者掛于社壇

十六流者植于社庭

竿上有龍頭

一大幡二流唐織

但掛于社壇日之本之柱

右三十四流之幡、先是薩隅日三州之 太守義久公 義

弘公兩御代有御寄進之處、先年神殿罹火災皆以燒失、

依之 太守吉貴公此節被爲寄附早者、於神前 御武運

長久之御祈、兆民快樂之禱、益無緩疎可抽精誠者也、

仍副狀如件、

正德五年四月廿三日

肝 主殿

兼柄判

種 彈正

久基判

鳴 内記

久貫判

鳴 大藏

久明判

在廿字通
〔霧島神高別當寺〕
華林寺

509

吉貴公御譜中

正文在文庫

今度就

東照宮百回御忌之御法會相濟_レ、爲御祝儀以使者御樽着被獻_レ之_レ、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

朱カキ
正徳五年 四月廿五日

重之判

松平薩摩守殿

在口裏
久世大和守
重之

510 継豊公御譜中

同年四月十七日、值_二

東照宮百年之忌辰_一、於_二野州日光山_一見_レ修_二法會_一、豫因_二台命令_一使者相良新右衛門長賢_一、副_中于吉貴之使節島津帶刀仲休_上、登_レ山而共勤_レ事、獻_二納御太刀・馬代黄金十兩_一、

511 正文在文庫

今度就

東照宮百回御忌之御法會相濟_レ、爲御祝儀以使者御樽着被獻_レ之_レ、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

朱カキ
正徳五年 四月廿五日

重之判

在口裏

松平大隅守殿

在右裏
久世大和守
重之

512 吉貴公御譜中

正文在文庫

今朝御香具品々并丸熨斗一箱被獻_レ之_レ、遂披露_レ處一段御仕合_レ、恐_レ謹言、

朱カキ
正徳五年 四月廿五日

重之判

松平薩摩守殿

在口裏
久世大和守
重之

513 吉貴公御譜中

先_レ是隅州贈啖郡西霧島神社罹_レ災、今茲四月二十七日再興造畢、行_二遷宮之禮_一、

514 吉貴公御譜中

正文在文庫

明朝日公家衆爲御馳走、御能就被仰付_レ、例月之御禮無_レ之_レ條、不及登_レ城_レ、以上、

朱力キ
正徳五年
四月晦日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平薩摩守殿

515
吉貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之賀儀、帷子單物十到來祝着、委曲松平紀伊守

可迹之外也、

朱力キ

正徳五年

五月二日



薩摩中將殿

516
全上

口上覺

（稱賀御送）

私繼母信證院事痛所委御座、脱躰國元出生之者、故、

國元、罷越保養仕度到私願、國元遣度相願申候、

以上、

朱力キ
正徳五年
五月三日

松平薩摩守

朱力キ
張紙

勝手次第可被差越、

朱力キ
松平紀伊守様より 御渡被成

517
吉貴公御譜中

正文在文庫

敬白 天爵靈社起請文之事

一先國王跡職我等に被 仰付候、誠以筋目不相替此邦相

續候儀難有仕合忝奉存候、此御厚恩生涯忘却仕間敷事、

一琉球安泰之儀 貴國之惠不淺故と誠以難致報謝奉存

外、縱親子兄弟、而委、妄此御高恩企逆意儀雖有之、

於我等者堅相守 貴國之御下知、毛頭別心御座有間敷

事、

一此靈社神文之表、子々孫々讓與之、到後々末代迄相守

此旨之様可申傳之候、縱雖爲嫡々之子孫惡意之者有之、

國法之妨於罷成者、則遂披露可加刑罰候、聊緩疎御座

有間敷事、

右之旨若於僞申上者、

在生主 裏
敬白天爵靈社上卷起請文之事

謹請散供再拜々々、夫惟當來年號正德五年太歲乙未五月三日並者以下神文畧ス

末文

仍靈社上卷起請文狀如件

正德五年乙未五月三日

中山王

進上中將様

血判ナリ
尚敬判

518 全御譜中

先_レ是吉貴加階、繼豐元服、以故今茲五月六日、獻_二納_一白

銀二十兩于薩府大雄山

東照宮、同五十兩于

台德院殿

大猷院殿

嚴有院殿

常憲院殿

文照院殿

殿・大玄院殿

、島津左衛門久健代_二吉貴_一而勤_レ事、繼豐

亦奉納等_レ之、入來院主馬重矩代而勤_レ焉、同日進_二納_一白銀

十兩于花尾權現社、島津周防久儔代而勤_レ之、繼豐亦等_レ

之、禰寝仙十郎清純代而勤_レ焉、進_二納_一同十兩于福箇_{（鹿兒島）}迫詼

方神社、郷原金太夫久兵代_二吉貴_一而勤_レ焉、

519 繼豐公御譜中

嚮_レ是繼豐首服、是故今年五月六日、獻_下納_一白銀二十兩于_二

薩府大雄山

東照宮_二同五十兩于南泉院御佛殿

台德院殿

大猷院殿

嚴有院殿

常憲院殿

文昭院殿_上、進_下納_一同三十兩于_二福昌寺內牌殿慈眼院殿_一・寬

陽院殿・大玄院殿_上、入來院主馬重規代_二繼豐_一而勤_レ事、

同日進_下納_一白銀十兩于_二花尾權現社_上、禰寝仙十郎清純代而

勤_レ之事、委詳_二于吉貴之譜中_一、

520 吉貴公御譜中

扣寫在江戶家老座

伴天連并切支丹宗門之御高札建替之儀、且又新規相建宜

場所_上者建置、其段可申上旨舊臘被仰渡、御案文又_二去年

號御書付御渡被成_レ付、薩摩守領內地續之分御案文之通

年號迄書改、御高札建替申_レ、新規相建_レ場所吟味仕_レ

得共、前_レ方御高札建置_レ外、建添可申場所無御座_レ、

遠嶋之儀者、以時節通船仕儀外故、急ニ建替外儀難成外間、此段者追テ首尾可申上旨此節國元方申遣外、以上、

朱力年
正德五年
五月

松平薩摩守内

伊佐岡伊右衛門

〔朱〕右書付五月六日大久保大隅守様江、伊佐岡伊右衛門致持參、御取次關口藤右衛門ニ而差出外處、御他出被成外間、御帰外節可申上外間、請取置外由、伊右衛門申出外」

521 継豊公御譜中

正文在文庫

今般初任敘之事珍重々々、因茲表賀儀如目錄贈與之、尚期後慶外也、

朱力年
正德五年
仲夏六日

(花押 No.4)

薩摩侍從殿

522 全上

今度初官位任敘之事珍重思給外、依之目錄之通贈與外、聊表嘉儀計外、餘期後信外也、

朱力年
正德五年
仲夏初六

(花押 No.3)

薩摩侍從殿

523 全上

今度官位任敘之事目出度思給外、因茲目錄之通贈之候、聊表賀儀計外、猶期後音外也、

仲夏七鳥

基熙

薩摩侍從殿

524 全上

御札令拜見外、弥御堅固珍重存外、然者去月五日御元服從四位下侍從被 仰出外旨珍重存外、依之就

口 宣等之儀、被差上御使者候由預御音問、每度御念入外儀、殊爲御祝儀、如御目錄被贈下忝存外、幾久祝着仕外、猶期後喜外、恐惶謹言、

朱力年
正德五年
五月九日

平松少納言
時春

松平大隅守様

貴報

525 吉貴公御譜中

正文在文庫

猶以同氏大隅守同道可有之外、以上、

今度於日光山御法會相濟_レ付_レ、明後十一日御能被_レ仰付_レ間、可致見物旨 上意_レ、被_レ存其趣五時過可有登城_レ、以上、

朱力キ 正徳五年 五月九日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平薩摩守殿

全上

御札令拜見_レ、弥御堅固珍重存_レ、然者御同姓大隅守殿去月五日御元服、從四位下侍從被_レ仰出_レ旨珍重存_レ、依之就

口 宣等之儀、被_レ差上御使者候由預御音問、每度御念入_レ儀、殊爲御祝儀如御目錄被_レ贈下辱存_レ、幾久祝着仕_レ、猶期後喜_レ、恐惶謹言、

朱力キ 正徳五年 五月九日

平松少納言

時春

松平薩摩守様

貴報

全上
芳簡披閱、今度就官位 敕許、爲賀義目錄之通被_レ贈之祝思給_レ、弥清健之由珍重、_レ、此邊無吳_レ也、

朱力キ 正徳五年 仲夏十三

基熙

薩摩侍從殿

貴翰拜見仕_レ、
公方様益御機嫌能被_レ成御座、奉恐悅候、然者御同姓大隅守殿去月五日御元服被_レ仰出、從四位下侍從被_レ仰付、難有被_レ思召_レ由、且又

口 宣等之儀付_レ被_レ差上御使者_レ旨、御紙上之趣承知仕_レ、恐惶謹言、

朱力キ 正徳五年 五月十三日

(余部所司代)
水野和泉守 忠之判

松平薩摩守様

貴報

繼豊公御譜中

正文在文庫

一筆致啓_レ、然者去月五日侍從就被_レ仰付_レ、從水野和泉守殿懸緒之儀被_レ不聞、則獻鞠爲門弟免狀相調、和泉守

殿迄差遣り、可被相達り、尤珍重之儀存り、隨ち紫組懸

緒一箱二致進覽之り、右御祝詞爲可申入如此御座り、猶

期後喜之時り、恐く謹言、

朱力キ

正徳五年 五月十三日

(飛鳥井)
雅香

松平大隅守殿

530

全上

今般任敘之事、依鴻命以使者被請

口 宣之序被仲賀儀、目錄之通被贈與目出令祝着り、尚

期後慶り也、

朱力キ

正徳五年 仲夏十三日

(花押)
No.4

薩摩侍從殿

531

全上

今度官位任敘之事、被蒙殿命、爲被請口 宣使者被差登、

目錄之通賜之目出令悦納り、尚期後慶り也、

朱力キ

正徳五年 仲夏十三日

(花押)
No.3

薩摩侍從殿

532

繼豊公御譜中

同年五月十八日、吉貴稟^三執政^用松平紀伊守信庸、同二

十一日有^二允容^一、繼豊短^三衣之長袖^{世白之}、因吉貴及夫人

於^三繼豊之部屋^一、慶^三賀^之、

533

繼豊公御譜中

さつまの侍従より今度昇しんの御禮として、黄金百兩・

御絹二十疋しん上おはしまし、披露申てりへハ、おもし

ろく覺しめしりよし、よくこゝろえりて申せとてり、御

心得りてつたへられりへくり、かしく、

誰^こても

御局へまいらせり

在口裏
仰^{正徳五}
六^三

534

吉貴公御譜中

同年六月朔日、吉貴妹於菟女子^キ歸^ク于松平飛驒守定英^{岐隱}

^{守定前}、定英行^二婚禮於東武三田第一^一、

535

正文在文庫

○先是西霧島山別當華林寺罹_レ災故、今茲六月一日再興造
畢、有_二本堂入佛供養之儀式_一、

將軍家、

奉_レ拜_二謁_一

將軍家依_レ嗣_レ位也、今日芝第爲_二居守_一之家老島津久當

家繼公、賜_二雄刀一腰_一、駿馬一匹_一、是

三日登_レ營_レ謝_レ之、奉_レ謁_二

告於吉貴、依_二先彌_一賜_二時服百領・白銀千枚_一、翌十

同年六月十二日 上使阿部豊後守正喬來_二稷田第一_一、賜_二

全御譜中

松平薩摩守殿

井上河内守

阿部豊後守

久世大和守

松平紀伊守

戸田山城守

明十一日五半時登_二城、妹婚姻之御禮可被申上_レ、以上、

朱力キ
正徳五年
六月十日

吉貴公御譜中

正文在文庫

今朝琉球布十卷并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉
球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露_レ處一段之御仕合候、恐

々謹言、

全御譜中

御返事

嶋津又三郎殿
(繼豊)

朱力キ
正徳五年
六月廿二日

薩摩守
吉貴御判

正文在文庫
芳翰令披見_レ、先頃

東照宮百年御回御法會執行、首尾能相濟_レ付_レ、示給被
入念儀欣然之至存_レ、恐々謹言、

去五月十五日、吉貴上書而、稟_下抗_二儻周防・長門兩國主

松平民部大輔吉元之令媛於_二嗣嫡繼豊_一、等_二吉元_一幕府上、

六月二十六日吉貴受_二執政之奉書_一、與_二吉元_一同登_レ營、

於_二白書院_一共進席、執政列居_{用番}戸田山城守忠真傳_二台

命_一、許_二婚嫁_一、

朱力^{ナカ}
正徳五年
六月廿五日

忠眞判

松平薩摩守殿

在口敷
戸田山城守
忠眞

540
全上

御用之儀^ハ間、明廿六日四時可有登城^ハ、以上、

朱力^{ナカ}
正徳五年
六月廿五日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平薩摩守殿

541
全御譜中

稟^ル位^ニ儼松平民部太輔吉元令媛^ヲ於^テ嗣適繼豊^ニ、等^ニ吉元^一

幕府^上、今茲六月二十六日受^テ執政之奉書^ニ登^レ營[、]吉

元亦同登被^レ允^ニ容^之、戸田山城守忠眞傳^ニ台命^一、

○同年七月九日、吉貴發^ニ東武芝第一[、]取^ニ驛於東海^一赴^ニ

薩國^一、家老島津帶刀仲休、若年寄比志島隼人範房表

542

正文在文庫

用人市來次郎左衛門政芳^{兼善頭}、側用人平岡八郎太夫之品等從焉、同月二十四日着^ニ伏見^一、同二十六日到^ニ大坂^一、同二十八日發^ニ大坂^一取^レ陸、八月二日到^ニ播州奈波津^一、直駕^レ船、同十三日着^ニ豐州大里^一、同十四日發^ニ大里^一、經^ニ九州陸^一、同晦日還^ニ薩城^一、乃遣^ニ謝使川上久馬久東於東武^一、

此よし何もよく申せとの御事ニ御さ^レ、かしく、
文くたされ^レ、ことの外あつさ^ニ御座^レへとも、

一位様御機嫌よく成らせられ、御めてたさきのふ大隅守殿へ土用御ミまいとして、御目錄の通参らせられ^レへハ御懇の御事^ニ、御てまへさまにおゐて、かたしけなく思しめしなされ^レよし、御禮おほせあけられ、文のやうひろういたしまいらせ^レへハ、御念いらせられ^レ御事と御満足^ニ思しめし^レ、めてかしく、

正徳五年

方

松平さつま守さま
御返事
人、御中

いは倉
梅その

返く右之趣よろしく申あげまいらせり、めてたく
かしく、

文下されり、まつく殊外あつさに御座りへ共、
公方様ますく御機嫌よく御座被成、めてたく思しめし
りよし、扱は御手まへさま今日爰御ほと御發駕被成りよ
し、それこ付御機嫌御うかゝひと御座りて、文のやうよ
ろしくひろういたしまいらせり、めてたくかしく、

朱カキ
正徳四年

お

みむろ

たかせ

松平さつまの守様

御返事人、御中

外山

た澤

返くいよく御きけんよくならせられりまゝ、め
て度思しめし被成まいらせり、かしく、

御ふみ下されり、まつくことの外御暑さに御さりへと
も、

一位様御機嫌よくならせられ、めてたくおほしめし被成

りよし、御手まへ様こもこん日御當地御立被成りこ付、

御き嫌御窺被成りとの御事、まことに御念入まいらせり
御事こ存まいらせり、則御ふみのやうひろういたしま
らせりへハ、御満そくに思しめし、よく申せとてり、め
てかしく、

朱カキ
正徳五年

お

いわ倉

まつ平薩摩守様

人、御中

梅園

御返事

正文在文庫

一筆啓上仕候、

公方様少く御不例被成御座り間、爲御機嫌窺、今日四時
可致出仕旨、昨夜井上河内守殿被仰渡、今朝登 城仕り
處、御老中列座こゐ、今朝若御快被成御座り、明日及今
日之通登 城可仕之旨、是又從河内守殿被仰渡、惣出仕
之筈御座り、此段爲可申上如斯御座り、恐惶謹言、

朱カキ

正徳五年

七月十四日

松平大隅守

繼豊御判

進上中將様

一筆啓上仕候、

公方様御不例付今朝登 城仕り處、明日老不及出仕り、御用番之御老中以使者可相伺御機嫌旨、従大目附衆致承知、其以後御老中列座ニ有、井上河内守殿より今朝老御機嫌能

御目見表被成り由御挨拶ニ有退出仕り、右通追日御快然恐悦奉存り、將又殘暑強御座り得共、

貴公様弥御勇健被遊御旅行り由、玆重之御儀奉存り、旁爲可申上如斯御座り、猶奉期後喜之時り、恐惶謹言、

宋力キ 正徳五年

七月十五日

松平大隅守

繼豊(花押 No.5)

進上中將様

547 繼豊公御譜中

正文在文庫

今度所被仰下之、女房奉書如例贈之、爲謝義芳札丁寧之至、愈平安之由玆重、此方無恙り、餘期後音り也、

宋力キ 正徳五年

新秋十六

(花押 No.3)

薩摩侍從殿

御札令披見り、

公方様少く御不例被成御座り間、爲窺御機嫌、去十四日可有出仕之旨、従井上河内守殿被仰渡登 城之處、御快被成御座り旨奉恐悦り、翌十五日表登

城可有之旨、是又從河内守殿被仰渡、惣出仕筈り由委曲御申越得其意存り、恐々謹言、

宋力キ 正徳五年

七月十六日

薩摩守

吉貴御判

松平大隅守殿

御報

549 繼豊公御譜中

正文在文庫

御狀令披見り、

公方様御不例付、去十五日登 城有之り處、十六日不及出仕り間、御用番之御老中迄以使者可被伺 御機嫌之旨、従大目附衆被承之、其以後御老中列座ニ有、井上河内守殿より、今朝老御機嫌能 御目見表有之り之旨御挨拶ニ有、退出被致り之段委曲被申越趣令承知、玆重之御儀奉存り、次貴殿弥無吳之旨目出度存り、我等表無恙令旅行り、

猶重可申達外、恐々謹言、

七月十八日

薩摩守

吉貴判

間部越前守
詮房判

松平薩摩守殿

松平大隅守殿

御報

552 吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、

貴公様益御勇健可被遊御通路、珍重之御儀奉存外、將亦

信證院様(稱貴御等)弥御機嫌能、今日御發興目出度奉存外、御祝儀

爲可申上如斯御座外、御當地別條無御座、何れ亦安全之

事御座外、尊意安可被思召外、猶奉期後喜之時候、恐惶

謹言、

朱力年 正徳五年 七月廿七日

松平大隅守
糺豐御判

進上中將様

550 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御不豫之御様躰以使者被相伺之外、弥御快被成御

座外之間可御心安外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々

謹言、

朱力年 正徳五年 七月十九日 井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

551 全上

御札令披見外、

公方様御不豫之御様躰被相伺之外、弥御快被成御座外之

間可御心安外、紙面趣承届候、恐々謹言、

朱力年 正徳五年 七月廿三日 本多中務大輔

忠良判

553 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年 正徳五年 八月三日 戸田山城守

忠眞判

松平紀伊守
信庸判

久世大和守
重之判

阿部豊後守
正喬判

井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

554 全上

御札令披見_レ、就殘暑

公方様御不豫之御様躰被相伺之_レ、弥御快被成御座_レ間
可御心安_レ、紙面之趣各申談及 上聞候、恐_レ謹言、

朱力キ
正徳五年
八月三日

阿部豊後守
正喬判

松平薩摩守殿

555 全上

御札令披見_レ、就殘暑

公方様御不豫之御様躰被相伺之_レ、弥御快被成御座_レ之
間可御心安_レ、紙面之趣得其意_レ、恐_レ謹言、

朱力キ
正徳五年
八月七日

本多中務大輔
忠良判

間部越前守
詮房判

松平薩摩守殿

556 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様御不豫段_レ被遊御快然、恐悦旨尤_レ、隨_レ申蛇一
箱被獻之_レ、各申談遂披露_レ處、一段之御仕合_レ、恐_レ
謹言、

朱力キ
正徳五年
八月十一日

阿部豊後守
正喬判

松平薩摩守殿

557 全上

御札令披見_レ、就 御代替從琉球國中山王御祝儀申上_レ
使者、且又中山王自分繼目爲御禮差上_レ使者、其地來着
_レ、使者差上_レ段、中山王難有之由、其方迄御禮申達_レ
旨得其意_レ、依之被差越使者_レ紙面趣各申談及言上_レ、
恐_レ謹言、

御札令披見外、就
御代替、從琉球中山王御祝儀申上外使者、且又中山王自
分繼目爲御禮差上外使者、其地來着外、使者差上外段中
山王難有由、其方迄御禮申達外之旨得其意外、紙面之趣
承届外、恐、謹言、

559

吉貴公御譜中

正文在文庫

558

吉貴公御譜中

正文在文庫

朱力キ
正徳五年
八月十三日

久世大和守
重之判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様御不豫段、被遊御快然、恐悦旨尤外、隨五串鮑一
箱被獻之外、紙面之趣令承知外、恐、謹言、

朱力キ
正徳五年
八月十五日

本多中務大輔
忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

朱力キ
正徳五年
八月十八日

本多中務大輔
忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

560

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、

貴公様益御勇健御旅行、追付可被成御着城奉恐察外、將
又今度近衛内府殿、右大臣御轉任之旨承知仕、目出度御
儀奉存外、御祝儀爲可申上如斯御座候、恐惶謹言、

朱力キ
正徳五年
八月廿二日

松平大隅守
繼豊判

進上中將様

561

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲重陽之賀儀、小袖五到來祝着外、委曲戸田山城守可述
之外也、

朱力キ
正徳五年
九月七日



薩摩中將殿

562 全上

一筆啓上仕候、

公方様御不豫御快然被遊、去六日御表出御、御目見之面々有之付、同七日爲御祝儀惣出仕外處、御老中被爲逢退出仕外、今日及如例登城仕外處、大廣間被遊出(脱字)御御迄首尾好相濟、恐悦奉存外、右之趣爲可申上如斯御座外、恐惶謹言、

朱カキ

正徳五年 九月九日

進上中將様

松平大隅守

繼豊御判

564 吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、貴公様益御機嫌能海陸御安全、去月晦日首尾好被遊

御着城旨承知仕、目出度御儀奉存外、御祝儀爲可申上如斯御座外、隨目録之通進上之仕候、於爰許別條無御座外、尊意安可被思召外、猶奉期後喜之時候、恐惶謹言、

九月廿一日

松平大隅守

繼豊御判

進上中將様

565 全上

正文在文庫

なをく御機嫌伺被成り文のやう、宜しく御沙汰申上まいらせり、めてたくかしく、

御文下されり、

公方様 御機嫌能御座被成、今日ハ増上寺御佛殿御參詣被遊、御機嫌よく還御あそハし外ま、御めてたく思召外へく外、めてたくかしく、

朱カキ

正徳五年

お

563

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆令啓達外、弥御無爲外哉、承度存外、隨領所之鮭二尺令進覽外、猶期後音外、恐々謹言、

朱カキ

正徳五年 九月十二日

水戸中納言

綱條判

松平薩摩守殿

人々御中

吉貴公御譜中

正文在文庫

めて度思しめし被成まいらせり文のやう御満そくに
をほしめしり、よろしく申せとの御事御さり、めて
たくかしく、

御ふミ被下り、まつく

一位様御きけんよくならせられ、御めてたくおほしめし
被成りよし、被仰上りことく、

公方様こん日増上寺へ御佛詣被遊、御機嫌よく還御成ら
れり、御満足におほしめしり、いよくなにの御さゝわ
りもあらせられりハすりまゝ、めてかしく、

朱カキ
正徳五年

まつ平

まつまの守様

人々御中

いは倉

あ

御返事

梅その

吉貴公御譜中

先是稟^一吉貴繼母信證院還^二薩國於幕府^一、蒙^二允容^一
故、今歲七月二十七日發^二東武^一、十月六日到^二著薩府
西田之第^一、

○同年十月十五日、吉貴歸國之謝使川上久東登^二柳營^一、

捧^二吉貴獻物^一勤^二使職^一奉^レ拜^二謁^一

家繼公^一、久東亦獻^二上御太刀一腰・御馬代銀壹枚・時
服三領^一、再奉^レ拜^二

御前^一、而後賜^二時服三領於久東^一、

全上

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能可被成御座と恐悦旨尤り、將又今度被
下御暇、其上御腰物・御馬并白銀・時服拜領之、難有之
由得其意り、就國許到着、爲御禮以川上久馬^{久馬}、芭蕉布百
端・三種二荷被獻之り、右之趣遂披露候之處、御前^に
被召出之、入念之段御喜色御事り、恐く謹言、

朱カキ

正徳五年

十月十八日

戸田山城守

忠貞判

久世大和守

重之判

阿部豐後守
正審判

正審判

井上河内守
正岑判

正岑判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能可被成御座と恐悦旨尤外、將又今度被下御暇、其上御腰物・御馬并白銀・時服拜領、難有由得其意外、就國許到着、爲御禮以川上久馬、如目錄被獻之外、紙面之趣承届外、恐々謹言、

朱力キ

正徳五年

十月十八日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

570

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

芳翰令披見外、

公方様御代替且又其方繼目付外、被差上外兩使者、江府首尾好相仕舞令歸國大慶之段尤外、依之佐久眞親方被差越、殊別幅之通被相贈之、入念儀令怡悦外、恐惶不宣、

朱力キ
正徳五年

十月十八日 中將吉貴御判

謹上 中山王

571

全上

芳翰令披見外、去夏江府に被差上外兩使、首尾克相仕舞大慶之段尤之事外、然未從

公方様 一位様 月光院様拜領内、金襴一卷・綸子染物一端・縮緬染物一端被相饋之、入念儀過當之至存外、恐惶不宣、

朱力キ

正徳五年

十月十八日

中將

吉貴御判

中山王

回章

572

繼豊公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様御不豫御快然、去月六日御表 出御、翌日爲御祝儀惣出仕有之由致承知、奉恐悦外、依之示給之趣被入念儀存外、恐々謹言、

薩摩守

吉貴御判

十月十八日

松平大隅守殿
御報

573 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座と恐悦旨尤外、將又今度被下御暇、其上御腰物・御馬并白銀・時服拜領之、難有由得其意外、國元に到着付る、爲御禮以川上久馬、芭蕉布百端・三種二荷被獻之外、紙面之趣令承知り、恐々謹言、

^{朱力キ} 正徳五年
十月十九日

本多中務大輔

忠良判

問部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

574 吉貴公御譜中

正文在文庫

芳翰令披見外、今般首尾好御暇、海陸御無吳其表到着之由弥重外、因茲入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

^{朱力キ} 正徳五年
十月廿六日

紀伊中納言

吉宗判

松平薩摩守殿
御返報

575 全上

尊書拜見仕候、先以海陸御機嫌能八月晦日被遊 御着城目出度御儀奉存外、爲御禮使川上久馬被差上外付、被仰下之段忝次第奉存外、久馬事 御目見相濟、被成御奉書外付、今日御當地爲立申外、猶奉期後喜之時候、恐惶謹言、

^{朱力キ} 正徳五年
十月廿八日

松平大隅守

繼豐御判

進上中將様

576 吉貴公御譜中

去歲琉球中山王奉慶賀謝恩兩使於東武、兩使畢事、今春還琉國故、今年七月中山王遣屋部親方於薩府、傳捧幕府書翰及獻物上、及使前田與市左衛門利尚獻之東武之柳營上、

577 扣正文在家老

一筆致啓上外、琉球國江差渡外銀子之儀付る、去年以御

書付被仰渡り趣、琉球國に申遣致沙汰、此節御請申上り、

委細之儀者其御地に差置り家來之者可申上り、右之段爲

可申上如此御座り、恐惶、

朱カキ 正徳五年

十月廿八日

御名

井上河内守様

人々

全上 正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能可被成御座と恐悦旨尤り、然者去年琉

球中山王兩使差渡り處、首尾好御禮申上、從

公方様 一位様 月光院様品々被下之、其上兩使并從者

迄拜領物被仰付之、重疊難有之由得其意り、依之其國迄

以屋部親方目錄之通獻上之、

一位様 月光院様江差上物以使者被越之、遂披露り、

返翰遣り條可被相達り、恐々謹言、

朱カキ

正徳五年 十月廿九日

戸田山城守

忠眞判

久世大和守

重之判

阿部豊後守

正喬判

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

579 全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能可被成御座と恐悦旨尤り、然者去年琉

球中山王兩使差渡り處、首尾好御禮申上、從

公方様 一位様 月光院様品々被下之、其上兩使并從者

迄拜領物被 仰付之、重疊難有由得其意候、依之其國迄

以屋部親方目錄之通獻上付り、使者被差越之、紙面之趣

令承知り、返翰遣り條可被達り、恐々謹言、

朱カキ 正徳五年

十月廿九日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

580 全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能可被成御座と恐悦旨尤り、然者去年琉

球中山王兩使差渡り處、首尾好御禮申上、從

公方様 一位様 月光院様品々被下之、其上兩使并從者

迄拜領物被 仰付之、重疊難有由得其意外、依之其國迄
以屋部親方目錄之通獻上付の、使者被差越之、紙面之趣
令承知外、返翰遣外條可被達候、恐々謹言、

朱力

正徳五年

十月廿九日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

581

吉貴公御譜中

正文在樺山左京

加冠

(釋)
柗山松壽

助四郎

宜爲

正徳五未

十一月朔日



582

吉貴公御譜中

正文在島津内記

加冠

島津鶴壽

宜爲

助太夫

正徳五未

十一月朔日

吉貴公御判

583

吉貴公御譜中

同年十一月三日、近衛家久公簾中吉貴令、嬖瀧君、座三女子稱延於京

師之第一、

584

繼豊公御譜中

正文在文庫

一筆令啓達外、嚴寒之節御堅固御事外哉、承度存外、然

老滿君御方姫君御誕生、御兩所共御機嫌好千萬珍重存外、

爲御悦以愚札申入外、猶期後喜外、恐惶謹言、

平松少納言

時春

十一月九日

松平大隅守様

585

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御機嫌被相同外、益御安泰之御儀外間可御心易外、

隨而煮海鼠一箱被獻之外、各申談遂披露外處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
正德五年 十一月十一日

松平薩摩守殿

阿部豐後守
正喬判

586

全御譜中

正文在志布志永泰寺

大中様御位牌永泰寺に御安置被成置、三箇國御守護之御寺外、然處貧地ニ有寺家相續難成、御佛餉々難調ニ付、殿々申出趣

吉貴公達 貴聞、爲御佛餉料、八木四斛年々御寄附外條、無怠慢奉備御佛餉、可有勤行外、仍如件、

正德五年未十一月十一日

肝付主殿
兼柄判

種子嶋彈正
久基判

鳴津内記
久貫判

鳴津大藏
久明判

永泰寺

587

全上

正文在文庫

一筆啓上仕候、其御地御靜謐

信證院様海陸御機嫌能、去月六日御國元御到着被成之旨

承知仕、目出度御儀奉存外、御祝詞爲可申上如斯御座外、

恐惶謹言、

朱力キ
正德五年 十一月十五日

松平大隅守

繼豐御判

進上中將様

588

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御機嫌被相伺外、益御勇健御儀外間可御心安外、隨而御着一种被獻之外、紙面趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ
正德五年 十一月十五日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

589

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御不豫被遊御快然外、以後九月六日初の御表 出御 御目見之面々有之段被承、目出度被存之由尤外、依之被差越使者外紙面之趣各申談及言上外、恐々謹言、

朱カキ

正徳五年

十一月廿六日

阿部豊後守

正喬判

松平薩摩守殿

590

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又參勤時分之儀以使者被相伺之外、及 上聞外處、來年九月中可致參府由被 仰出外條、可被存其趣外、恐々謹言、

朱カキ

正徳五年

十一月廿七日

戸田山城守

忠眞判

久世大和守

重之判

阿部豊後守

正喬判

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

591

全上

口上之覺

參勤時分之儀被相伺外、定式之通來年六月中可爲參府事ニ外得共、琉球人、間々無之度々召連參府之段大儀ニ被思召外付の、來年參府之時節九月中と被 仰出外、以上、

朱カキ

正徳五年

592

継豊公御譜中

正文在文庫

一筆令啓外、去ル三日

滿君方安産、姫君御誕生、御母子共御安全旨同然目出度御儀存外、此等之段爲可申達如斯外、恐々謹言、

薩摩守

御判

十一月廿六日

松平大隅守殿

御宿所

593

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、寒氣強御座外得共、 貴公様益御機嫌能

松平薩摩守殿

御札令披見^レ、
 公方様御不豫被遊御快然^レ、以後九月六日初^レ御表 出
 御、御目見之面^レ有之段被承之、目出度被存由尤^レ、
 紙面趣令承知^レ、恐^レ謹言、
 朱力^キ 本多中務大輔
 正徳五年 十一月晦日 忠良判
 間部越前守
 詮房判

正文在文庫

御札令披見^レ、

進上中將様

朱力^キ
 正徳五年 十一月廿八日

松平大隅守

繼豊御判

被成御座、玆重之御儀奉存^レ、然者來年御參勤時分之儀
 被相伺^レ處、九月中 御參府^レ様被 仰出之旨御奉書被
 遣之、且又從阿部豊後守殿被 仰渡御口上之趣承知仕、
 目出度御儀奉存^レ、右之御祝儀爲可申上如斯御座^レ、猶
 奉期後喜之時^レ、恐惶謹言、

扣寫在江戸家老座

領知之内海陸共番所等建置、往來之男女を相改^レ儀者不
 及申、其外何^レの表改^レ場所有之^レハ、改様之致方尤
 右之所^レ高札無之^レ共、定書等有之歟、左^レハ、其寫共
 委細書付可被差出^レ、口留等之輕^レ番所^レの表、不殘
 様其様子書付、當年中横田備中守・大久保大隅守方^レ可
 被差出^レ、以上、

十一月

横田備中守
(由松)

大久保大隅守
(忠番)

杉岡彌太郎
(能連)

- | | | | |
|----|----|----|----|
| 河内 | 攝津 | 和泉 | 大和 |
| 紀伊 | 伊勢 | 志摩 | 伊賀 |
| 若狹 | 丹後 | 但馬 | 播磨 |
| 因幡 | 備前 | 備中 | 備後 |
| 伯耆 | 出雲 | 石見 | 安藝 |
| 周防 | 長門 | 美作 | 隱岐 |
| 日向 | 大隅 | 薩摩 | 肥後 |
| 豊後 | 豊前 | 筑前 | 筑後 |
| 肥前 | 壹岐 | 對馬 | 阿波 |
| 淡路 | 伊豫 | 土佐 | 讚岐 |

右國之内、領知有之ハ分書付可被差出外、此外之國
者書付被差出ニ不及外、以上、

十一月

御領分之内寺社領ニ番所等有之所及外ハ、最前高札
之通書付差出外様可被相通外、以上、

朱力キ

正徳五年

十一月

(本)
一、大久保大隅守様御用之由申来外付、川上五後右衛門罷出外
処、右両通之御書付御渡被成外、右御書付ニ當年中被差出外
様ニと有之ハ得共、遠国之御方_庚有之ハ間、来正月中御書出
可被成由被仰外、私より申上外者、薩州ハ遠国ニ而外間、正
月中書出申儀可難相調外、右之御断ハ追而可申上由申上外処、
尤ニ被思召外、二月中ニ_庚相調次第可被差出外、夫共延引無
之様ニ可致由被仰外」

吉貴公御譜中

同年十一月晦日、近衛家久公簾中權_ニ痘疹_ニ、逝_ニ于京
師之第一、享_レ年十七、號_ニ光相院殿_ニ、葬_ニ于京師大徳
寺_ニ、築_レ墓被_レ安_レ牌、薩府惠燈院亦置_レ牌、
○松屋善右衛門勢州田尻之者而、耽_ニ博奕_ニ、繫_ニ線綫_ニ、
先_レ是流_ニ領土之邊島_ニ、然當_レ今年

吉貴公御譜中

扣正文在家老座

東照宮百回忌景_ニ、得_ニ其免_ニ、還_ニ故土_ニ也、

慶長年中御定之如法、金銀可被改旨、去年五月被仰渡外
付、薩摩守領知琉球國より大清_ニ進貢_ニ・接貢之銀料於薩
州沙汰仕、其數を減上可仕旨、委細之御書付奉承知、
去年秋右之件を以急度琉球_ニ申渡外處、貞享年中_ニ銀高
被相減外以後、進貢・接貢之使者難儀仕、其上元禄年中
ニ金銀之品相替、又正銀減外故猶_ニ迷惑仕外間、貞享御
定數之通_ニ而_レ被差置被下度、幾重_ニ奉訴外通段_ニ申越
趣御座外、雖然此節之儀、金銀之品慶長御定之通被仰付
事_レ得者、元銀_(緑力)と同前之量數_ニ而_レ者、正銀者相増積_ニ
外、殊和朝金銀通用妨之筋を以被仰渡、不大形御儀奉存
外故、進貢之料銀八百四貫目_(目)之内_ニ百貫目、接貢料銀四
百貳貫目之内_ニ百貫目、押_レ減少仕外筋_ニ申付外、此段申
上外、以上、

朱力キ

正徳五年末

十二月三日

松平薩摩守内

鳴津將監

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、領内江流罪ハ松屋善右衛門事、今度

東照宮百回御忌御法會付、御赦免之段其方家來江以書

付申渡、趣被承之、被申越紙面之通得其意、恐、謹言、

朱力キ

正徳五年 十二月六日

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

599

吉貴公御譜中

正文在家老座

覺

松平薩摩守家來江

琉球國へ差渡、銀數之事に付て、被國より訴、子細共有

之、得共、元禄銀と其數同しく、正銀ハ相倍し、

積に付、押、減少之數被申付、由、口上書之趣承知、

此等之儀一旦には難被申付事、此度之沙汰之次

第七、雖然惣して外國へ差渡、銀數之事に付て、

他方へ相障り、事、此上ともに時節を以て減少之

沙汰、様に常、被心懸、可然、此旨を以て可相達、

以上、

朱力キ

正徳五年 十二月十一日

朱力キ 右河内守様より十二月十二日御
渡被成、

600

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、琉球國へ差渡、銀子之儀付、去年以書

付相達候之趣、彼國へ被申越、由、且又家來委細之書付

差出之令承知、恐、謹言、

朱力キ

正徳五年 十二月十一日

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

601

全上

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、隨、蜜柑二箱、

炙鮎一箱被獻、各申談、遂披露、一段之御仕合、

恐、謹言、

朱力キ

正徳五年 十二月十二日

戸田山城守

忠真判

松平薩摩守殿

602

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤之事外、隨而密柑(密)

二箱・御看一種被獻之外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱カキ 正徳五年

十二月十五日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

603

全上

尊書拜見仕候、

貴公様益御勇健被成御座、珍重之御儀奉存外、然者先頃

於京都姫君御誕生被成、目出度奉存外、右付る被仰下之

段忝次第奉存外、恐惶謹言、

朱カキ

正徳五年

十二月十八日

松平大隅守

繼豊判

進上中將様

604

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様御機嫌以使者被相伺之外、益御勇健之御儀外間可

御心安外、隨而御羽織五并鑿節一箱被獻之外、各申談遂

披露外處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱カキ

正徳五年

十二月廿二日

戸田山城守

忠眞判

松平薩摩守殿

605

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

(靈元法皇皇女吉子)

八十宮様 御入輿之儀被 仰出之段被承之、目出度被存

由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱カキ

正徳五年

十二月廿七日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守(ママ)

詮房

松平薩摩守殿

606

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之賀儀、小袖五重到來祝着外、委曲井上河内守可

述之_レ也、

朱力キ
正徳五年
十二月廿七日



薩摩中將殿

607

吉貴公御譜中

正文在島津大藏

加冠

島津權太郎

主鈴

宜爲

正徳五未

十二月廿八日 吉貴公
御判

608

継豊公御譜中

正文在文庫

御狀令披見_レ、弥御無_レ吳之旨玆重存_レ、我等亦無_レ恙_レ、然者來年參勤時分之儀相伺_レ之處、九月中參府_レ様被仰出、且亦從阿部豊後守殿被仰渡_レ御口上之趣致承知、難有仕合奉存_レ、依之爲祝儀示給之段欣然之至存_レ、恐_レ、謹言、

十二月廿八日

薩摩守

吉貴御判

松平大隅守殿

御報

609

吉貴公御譜中

正文在文庫

尊書拜見仕_レ、御不快之儀

一位様無御心元被思召、帶刀方私宅_ニ招、御様躰之儀委

細可相尋之旨、依 仰承_レ處、段々御快然之旨承知仕、

則致言上_レ處、重疊之儀御安堵被遊_レ、且又帶刀方拜領

物被 仰付_レ義被入御念、御禮之趣則御紙上を以申上、

被入御念_レ儀被 思召候、右之爲御請如此御座_レ、宜御

沙汰被成可被下_レ、恐惶謹言、

朱力キ

正徳五年

十二月廿九日

(広敷用人)
堀丹波守

正勝判

松 薩摩守様

御家老中御披露

(表紙)

追 録	吉 貴 公	自享保元年 <small>即正徳六年</small>
舊 記	繼 豐 公	至享保二年三月
雜 録		
卷五十二		

610

吉貴公御譜中

正文在文庫

改年之御慶賀猶更不可有盡期御座外、

公方樣益御機嫌能被遊御座奉恐悅外、

貴公樣弥御勇健可被成御超歲、目出度御儀奉存外、然者

私今日登 城仕、御禮首尾能相濟、御流頂戴、時服拜領

仕、重疊難有仕合奉存外、爰元別條無御座外間尊意安可

被思食外、御祝儀爲可申上、差上使目錄通進上之仕外、

猶奉期永日候、恐惶謹言、

朱力平

正徳六年 正月二日

松平大隅守

繼豐御判

進上中將樣

611

吉貴公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三ヶ條旨、可有沙汰之狀如件、

正徳六年正月十一日 吉貴御判

612

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力平

正徳六年 正月十一日

戸田山城守

忠眞判

久世大和守

重之判

阿部豊後守

正喬判

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

抄正文在家老座

一筆致啓上外、琉球國に差渡り銀子之儀付、被仰渡趣琉球國に申越、去歲御請申上外處、以御奉書并御書付被仰渡趣、委細致承知外、此段爲可申上如斯御座外、恐惶、

朱力平
正徳六年 正月十八日 (島津吉貴) 御名

井上河内守様

人、

吉貴公御譜中

正文在文庫

尊書拜見仕候、

貴公様益御勇健被成御座、珍重御儀奉存外、然老爲歳暮御祝儀御目錄之通拜受之仕、辱次第奉存外、恐惶謹言、

朱力平
正徳六年 正月廿一日 松平大隅守 繼豐御判

進上中將様

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲改年之賀儀、芳簡并目錄之通被贈之祝着之至外、其邊弥勇健珍重、此方無吳外、猶期後喜外、謹言、

朱力平
正徳六年 孟春廿八 薩摩中將殿

基熙

吉貴公御譜中

正文在華林寺

畫像曼荼羅 長七尺八寸 横五尺 二幅

右旨趣者先是薩隅日三州之

大守義弘公以畫像曼荼羅、雖被寄附于西霧嶋山多寶塔、先年神殿罹火災之時燒失、依之

太守吉貴公新製作之、如以前被寄進訖、全御武運長久兆民快樂之御祈禱可抽丹精者也、仍副狀如件、

正徳六年二月五日

肝主殿 (肝付) 兼柄判
比集人 (比志島) 範房判
種子鳥 (種子鳥) 種彈正 久基判
鳴内記 (島津) 久貫判

在月之字通

(霧島神宮別當寺)
華林寺

鳴建大藏

久明判

617 吉貴公御譜中

正文在琉球國司

就先年兩使歸國

公方様 天英院様 月光院様は御禮爲可申上、以屋部親

方如目錄被差上付、以使者致獻上付處被逐御披露御奉

書相渡り間差越り、難有可被奉承知り、恐惶不宣、

朱力キ

正徳六年

二月十一日 中將吉貴御判

謹上 中山王

618 全上

正文在文庫

御札令披見り、如承新春之慶賀珍重り、

公方様益御勇健被成御座、年始之御規式可相濟と目出度

旨尤り、猶以御機嫌被相伺り、弥御安全之御儀り間可

御心安り、隨ち御樽肴被獻之候、各申談遂披露り處一段

之御仕合り、恐々謹言、

朱力キ 正徳六年

二月十二日

久世大和守

重之判

松平薩摩守殿

619 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲改年之御慶賀、尊書拜見仕候、

貴公様益御勇健被遊御超歳、目出度御儀奉存り、御祝詞

被仰下、御目錄之通拜受任、辱次第奉存り、猶奉期後喜

之時候、恐惶謹言、

朱力キ

正徳六年

二月十六日

松平大隅守

繼豊御判

進上 中將様

620 全上

如芳翰青陽之嘉儀不可有盡期り、其許御無吳超歳之由珍

重り、我等堅固令越年り、入御念り段欣然之至存り、恐

々謹言、

朱力キ

正徳六年

二月十六日

紀伊中納言

吉宗判

松平薩摩守殿

御返報

御札令披見_レ、如承新春之慶賀珍重_レ、
公方様益御勇健被成御座、年始之御規式可相濟と目出度
旨尤_レ、猶以御機嫌被相同之_レ、弥御安全之御儀_レ間可
御心安_レ、隨_レ御樽肴被獻之候、紙面趣承届_レ、恐_レ謹
言、

朱力年
正徳六年
二月十六日

本多中務大輔
忠良判
間部越前守
詮房判
松平薩摩守殿

正徳六年丙申二月二十一日、欲剃_レ除繼豊前額之髮_レ、
使_レ留守居者_一到_中執政_用番久世大和守重之_之第_上、捧_レ願書_一
乃得_レ允容_一、翌二十二日剃_レ前髮_一俗曰取、前髮

623 吉貴公御譜中
正文在島津備中

加冠

島津小源太

正徳六年
二月廿二日
吉貴公
御判

624 吉貴公御譜中
正文在文庫

如御札陽春之御慶不可有休期_レ、其元御無爲珍重_レ、我
等無恙越年之事_レ、仍入御念_レ段欣然之至存_レ、恐_レ謹
言、

朱力年
正徳六年
二月廿五日

尾張中納言
繼友判
薩摩中將殿
御報

貴翰致拜見候、
公方様益御機嫌能被成御座、恐悦被思召旨尤之御事御座
_レ、將亦御參勤時分之儀御伺之處、當九月中被成御參府
_レ之様就被_レ仰出_レ、御紙面之趣承知仕_レ、恐惶謹言、
(若年卷)
大久保佐渡守
常春判

朱力年
正徳六年
二月廿五日
松平薩摩守様
貴報

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく宜申上りへくり、以上、

御文下されり、

公方様御機嫌能御座被成、御めてたさ、さてハ御手前様御參勤の御時分御窺被成り處に、當九月中ニ御參府被成り様こと 仰出させられ、有かたく思召りよし、右之御禮仰上られ度よしにて、御文の通よろしく申上まいらせりへくり、めてたくかしく、

朱カキ

正徳六年

6

みむろ

たか瀬

外やま

たさは

松平薩摩守様

御返事

吉貴公御譜中

扣正文在家老座

琉球に被相渡り進貢・接貢料銀之儀、去々年御老中井上河内守様より、金銀慶長年中被定り法之通被改り間、琉球より大清に差渡り銀料、其數を被減り様と御書付を以

被 仰渡趣有之、不被減りぬ不叶譯付銀高被減り、一通

者此節攝政・三司官に申越事り得共、委者不申遣り、然者此度慶長御定之通吹替被仰付、慶長之正銀八分差、元禄之正銀六分差にり得ハ、慶長銀者元禄銀とハ歴然正銀之増有之り故、元禄銀進貢料八百四貫目之内貳百貫目、接貢料四百貳貫目之内百貫目被減りぬ者、永禄之正銀トハ量數相並積り付、未十二月三日河内守様は被仰上趣有之り處、被仰出り通同十二日減方之儀被仰渡り、依之進貢料新銀六百四貫目、接貢料三百貳貫目之員數被相定り、此旨在番人に申聞、攝政・三司官に相達り様可被申渡り、以上、

正徳六年申閏二月五日

継豊公御譜中

正文在文庫

爲曆甫之慶賀、御狀令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、奉恐悦り、次貴殿弥御無異超年、正月二日登 城之處、首尾好御禮相濟着座、其上御酒頂戴時服拜領難有被存之段尤存り、於我等無異事令加年り、爲祝詞以使札目録通饋給之、被入念り趣欣然之

至存^レ、猶期後喜之時^レ、恐^レ謹言、

朱力キ

正徳六年 閏二月五日

薩摩守

吉貴御判

松平大隅守殿

御報

629

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又同氏大隅

守儀、年始着座可仕由舊臘被 仰出之、難有旨得其意^レ、

紙面之趣各一覽之事^レ、恐^レ謹言、

朱力キ

正徳六年 閏二月七日

戸田山城守

忠眞判

松平薩摩守殿

630

全上

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又舊臘妻女

歳暮之御祝儀拜領之、難有由得其意^レ、依之被差越使者

^レ紙面之趣各一覽之事^レ、恐^レ謹言、

朱力キ

正徳六年 閏二月九日

戸田山城守

忠眞判

631

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又同氏大隅

守儀、年始着座可仕由、舊臘被 仰出之、難有旨得其意

^レ、紙面之趣令承知候、恐^レ謹言、

朱力キ

正徳六年 閏二月十一日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

632

全上

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、然者同氏大隅^(難)

守儀、初^(難)年始之御禮申上、着座且又時服拜領重疊難有

由得其意^レ、紙面之趣各一覽之事^レ、恐^レ謹言、

朱力キ

正徳六年 閏二月十二日

戸田山城守

忠眞判

松平薩摩守殿

(吉貴)

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦之旨尤外、將又舊臘妻女歳暮之御祝儀拜領、難有之由得其意外、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

朱力キ
正徳六年 閏二月十二日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦之旨尤外、然者同氏大隅守儀、年始之御禮初申上、着座且又時服拜領之、重疊難有由得其意候、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ
正徳六年 閏二月十六日

本多中務大輔

忠良判

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

扣正文在家老座

一筆令啓達外、然者琉球に被相渡り進貢・接貢料銀之儀付、去々年御老中井上河内守様より、金銀慶長年中被定外通被改り付、琉球より大清に差渡り銀高被減り様と御書付を以被仰渡り、此節之儀不被減り而不可譯付、段々被仰上、進貢料八百四貫目之内貳百貫目、接貢料四百貳貫目之内百貫目減少之筋、舊臘十二日河内守様より被仰渡、右之通被相定外條、此段致承知、國王に可被申上外、恐々、

朱力キ
正徳六年 閏二月十六日

肝付

兼柄

(比志也)

範房

(種子也)

久基

(嗣)

久貫

(嗣)

久明

豐見城王子

三司官

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御念入らせられ御事、何もよろしく申あ
けまいらせりよし、なをめてかしく、

正月廿三日の文被下り、まつく

(家樞)
公方様

(天英院、家宣室)

一位様御機嫌よく御座あそはされ、御めてたくおほしめ
しなされりよし、さてハ

一位様より寒氣の御たつねまし、御おوکかた大隅守殿へ
御もくろくの通參らせられ御事、御ふいてう仰參らせら
れ、御てまへさまにおゐて、かすく忝なくおほしめし
なされりよし、御念入られ御禮文のやう、よろしく御
さた申りへくり、めてかしく、

朱カキ
正徳六年

松平さつま守さま
御返事
人々御中

豊原
常盤井
ミむろ
たか瀬
川しま
たんこ
御ち
くらはし

ひやうこ

637 吉貴公御譜中

正文礼文庫

御満そくこ思しめしり、此よし何もよく心得申せと
てり、なをかしく、

正月廿八日の御日付にてふミ被下り、まつく

公方様御機嫌よく成らせられ御目出たさ

一位様御機嫌よくならせられ御事、めてたく思召被成
りよし、楮は舊臘廿一日

公方様より歳暮の御しう義、野澤源左衛門を以、御目録

の通奥方へ拜領おふせ付られりよしりて、忝なく思召、

右之御禮仰上られり、文のやう披露申まいらせりへハ、

めてかしく、

朱カキ
正徳六年

松平 薩摩守さま
岩倉
人々御中
御返事
梅園

638 全上

返くお手まへ様こも御かわりもおはしましりハ

て、一たんの御事ニ思しめしり、めてかしく、御ふミ下されり、まつく

公方様

一位様御機けんよくならせられ、めて度おほしめし被成りよし、さては、かんき御たつねとして、冬年御もくろくのとをり、大すミの守様奥さまへまいらせられりへハ、御手まへ様かたしけなきしたひニ思しめし被成りとの御事にて、御禮被仰上、則御ふミのやうひろういたしまいらせりへハ、御満そくニおほしめしり、よろしく心得りて申せとの御事り、いたくめてたくかしく、

朱カキ
正徳六年

まつ平

さつまの守様

人、御中

いわ倉

御返事

梅その

お

全上

返く御ふミのやうかすく御満足ニおほしめし

り、めてたくかしく、

御ふミ下されり、まつく

一位様御機けんよくならせられ、めて度おほしめし被成りよし、さては冬年この御所様へ御わたまし被遊り御し

うきとして、御手まへ様并大すミの守様奥さまへも、御もくろくのとをりまいらせられりへハ、いちく御禮被仰上、まことに御念入らせられり御事と存まいらせり、

文の様則ひろういたしまいらせりへハ、御まん足さよくく申せとの御事御さり、めてたくかしく、

朱カキ
正徳六年

まつ平

さつまの守様

人、御中

いわ倉

御返事

梅園

お

全上

おほしめしり、此よし何もよく心得申せとの御事ニ

御座り、めてかしく、

御ふミ下されり、いまた餘寒甚しく御座りへ共

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、めてたく思しめしりよし、

京都にて

(家久女、母満君)

延君様ニも御機嫌よくたんく御成長被遊り御事、めて

たく思しめしりとの御事にて、御念入まいらせり御ふミ

のやう、御目錄之通御あけ被成、則披露いたしまいらせりへハ、かすく御満足ニ、めてたくかしく、

朱カキ
正徳六年

松平

薩摩守さまにて

御返事
人、申給へ

岩倉

梅園

b

641

全上

猶く、いまた餘寒ニ御座りへとも、御手前様御さわりも御座被成りハす御事、めて度思しめしり、此よし何もくよく申入まいらせりやうことの御事ニ御さり、めてたくかしく、

御ふミ下され、則申入まいらせり、まつく

公方様御機嫌よくならせられ

(家養生可) 月光院様にも御機けんの御事ニ入せられり、さては

月光院様より寒氣御見まひのため、奥さまへ御目録のとをりまいらせられりへは、御禮の御事誠に御ねん入せられり御事御悦事思給り、めてたくかしく、

朱カキ
正徳六年

b

六條

海津

福井

園田

松平

さつまの守様にて

御返事
誰にて

御中

642

吉貴公御譜中
正文在文庫

城中に年始之賀儀申入り序、呈一簡り、弥可爲平安り、此邊無吳り、折節調合之薰物二種可被試り、猶屬口上り、謹言、

朱カキ

正徳六年 閏二月廿一日

基熙

薩摩中將殿

643

吉貴公御譜中

扣寫在家老座

口上覺

私領從琉球國大清差渡り進・接之料銀、元禄銀之位吹替被仰付度旨先年相願、去未年迄ハ其通被仰渡り、從當年者以新銀、御定之量數差渡り様ニ可申付り、此段申上り、以上、

朱カキ

正徳六年 閏二月廿二日

(吉貴) 御名

644

吉貴公御譜中

正徳六年丙申春

(重元上皇) (吉) 壬子

仙洞之内親王八十宮君、以レ譜ニ

家繼公之好逮、故執政阿部豐後守正喬詣洛納聘、吉貴在國聞之、遣賀使大山後角右衛門貞長於東武、貞長乃到于東武、登營捧吉貴之獻物、勤使職、

645 正文在文庫

今度京都に御祝儀之御使相濟付、以使者目録之通被獻之、遂披露處一段之御仕合、恐々謹言、

朱力年
正徳六年 閏二月廿三日

戸田山城守

忠眞判

久世大和守

重之判

阿部豊後守

正喬判

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

646 繼豊公御譜中

正文在文庫

今度京都に御祝儀之御使相濟付、以使者目録之通被獻之、遂披露處一段之御仕合、恐々謹言、

朱力年
正徳六年 閏二月廿三日

忠眞判

在口裏

松平大隅守殿

在右裏

戸田山城守

647 全上

猶前髮取之爲祝詞、御狀殊目録之通被相饋之、是一筆令啓、弥御無吳珍重存、於我等亦無相替儀、又入念儀欣然之至、以上、

然者貴殿前髮被取儀相伺、可致勝手次第旨被仰渡、去月廿二日前髮被取、由一段之事、依之祝、而目録之通令進入、猶期後喜之時、恐々謹言、

朱力年
正徳六年 閏二月廿六日

薩摩守

吉貴御判

松平大隅守殿

御宿所

648 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御念入られ、事、何もくよろしく、ろへ、申せとの御事御さ、かしく、二月十五日の文被下、まつく

公方様

一位様御機嫌よく御座あそハされ、御めて度覺しめしなされりよし、さてハ御年頭の御祝義として

一位様より御使堀丹波守御もくろくの通、御てまへさま御おوکかた 大隅守殿へ參らせられりへハ、かすくか

たしけなく思しめし被成りよし、御禮仰上られ御念いらせられり文のやう、則披露いたしまいらせりへハ數く御満足ニ思しめしり、めてかしく、

朱カキ
正徳六年

右

松平 岩倉
返事 梅その
さつま守さま 人々御中

649
全上

なをく何もく御念入參らせられり御事ニ存まいらせり、なをくめてかしく、

二月十五日の御ふミ下され、まつく

公方様御機嫌よく御座あそハされ、御めてたく思しめしなされり由、さてハ御年頭の御祝義として御使堀丹波守にて

一位様より御てまく様さまおوکかた・御同性大隅守殿へ

御もくろくの通參らせられり御事、數く有かたく思しめしなされりよし、御禮おほせあけられ御念いらせられり文のやう、何もよろしく御きた申あけまいらせり、めてかしく、

朱カ
正徳六年

右

豊原 常盤井 ミむろ たか瀬 川しま たんこ 御ち
松平 返事
さつま守さま 人々御中

650
吉貴公御譜中

正文在文庫

尊書忝奉拜見り、先以薩摩守様御勇健之旨玆重奉存候、然者去ル比、品川邊出火之節、芝御屋敷邊之由達御聞、早速相尋り様被仰出り付、右之段御屋敷方被仰進、爲御

禮尊書之趣奉承知_レ、被爲入御念_レ儀、則老女衆迄申達_レ、此等宜預御披露_レ、恐惶謹言、

在上包

玄昶西堂_レ

朱力_ナ
正德六年

三月八日

堀丹波守

正勝判

653
全上

正文在山川正龍寺

松 薩摩守様
近習御披露

廣濟寺住持職事、任先例、可令執務之狀如件、

正德六年三月十三日 中將吉貴御判

651
吉貴公御譜中

正文在伊集院善福寺

廣濟寺住持職事、任先例、可令執務之狀如件、

正德六年三月十三日 中將吉貴御判

永典西堂

654
吉貴公御譜中

正文在川上勘解由

朱力_ナ
包紙 永典西堂_レ

加冠

川上長千代

全上

正文在阿久根蓮花寺

廣濟寺住持職事、任先例、可令執務之狀如件、

正德六年三月十三日 中將吉貴御判

玄昶西堂

宜爲

正德六甲

三月十五日

吉貴公御墨印

源十郎

655
吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、

貴公様益御勇健被成御座、珍重御儀奉存外、然者爲上巳之御祝儀、御目録之通拜受仕、辱次第奉存外、御禮爲可申上如斯御座候、恐惶謹言、

朱カキ

正徳六年 三月十八日

松平大隅守

繼豊御判

進上 中將様

656

吉貴公御譜中

正文在文庫

御き嫌ともよくならせられ、幾久しくまいらせられ

外ハんと、めてたさよく申せとの御事ニ御さ外、返

くめてかしく、

三月七日之御日付にて御ふミ下され、則ひろういたしま
いらせ外、まつく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、めてたくおほしめし被成

外よし、扱は御同姓大隅守殿先比御元ふくなざれ外節

一位様より御しうき御もく録之通まいらせられ外ハ、

御禮仰上られ、御満足ニ思しめし外、誠に萬々年も、め

てたくかしく、

朱カキ
正徳六年

お

まつ平

まつまの守様

御返事人ニ御中

梅その

いは倉

657

全上

返くまことに幾ひさしく御いたゞき被成外ハんと、めてたく存まいらせ外、めてたくかしく、

三月七日之御ふミ被下外、まつく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、めてたくおほしめし被成

外よし、扱は御同姓大隅守殿先比御元ふく被成外節

一位様より御目録之通まいらせられ外ハ、御禮おほせ
上られ御ねん入まいらせ外御事に存まいらせ外、めてた
くかしく、

朱カキ

正徳六年

お

豊原

ときわる

みむろ

たかせ

まじ平
さつまの守様
御返事
人々御中
かわしま
たんこ
御乳
くらはし
ひやうこ

658 継豊公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之ハ條不及登 城ハ、以上、

朱カキ
正徳六年 四月十四日

戸田山城守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平大隅守殿

659 吉貴公御譜中

正文在志布志大慈寺

大慈寺住持職事、任先例、可令執務之狀如件、

正徳六年四月十五日 中將吉貴御判

方山西堂

在包紙
方山西堂ハ

660

全上

正文在文庫

尊書拜見仕候、弥御勇健被成御座、珍重御儀奉存ハ、然
者先頃私前髪執ハ御祝儀と被成、以御使御目錄之通被下
之、忝拜受仕ハ、猶奉期後喜之時ハ、恐惶謹言、

朱カキ
正徳六年

四月十六日

進上中將様

松平大隅守

継豊御判

661

吉貴公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守

妻

一位様ハ只今迄差上物向後無用ニハ、尤被下物有之間敷
ハ、右之段

一位様 思召ニハ、

朱カキ
正徳六年

四月

全上

一位様江御祝儀物、御禮事ニ付献上物、其外不時ニ進上物等向後無用ニハ、右之趣

一位様 思召ニハ、次岩倉・梅園江贈物ニ不及ハ、此段可被相達ハ、

朱力キ

正徳六年

四月

繼豊公御譜中

正文在琉球國國司

抑

(吉貴女・瀧)
光相院様去十一月晦日被成御逝去候之由、寔以不慮之御事奉絶言語ハ、此等之御悔爲可申上、字榮原親方差上申候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ

正徳六年

四月廿一日

中山王

尚敬判

進上 侍従様

繼豊公御譜中

正文在文庫

猶々今朝老、爲御見立御出御暇乞申、別而致大慶

ハ、被入御念是迄預示御音物忝存ハ、猶致歸國委細
可得御意ハ、以上、

御札致拜見ハ、如仰今朝其御地發足、今晚至神奈川之驛
致止宿ハ、爲御見舞示預、殊粕漬炮一器被懸御意、被入
御念忝存ハ、猶歸國之上可申達ハ、恐惶謹言、

朱力キ

正徳六年

四月廿八日

(毛利)
松平民部大輔

吉元判

松平大隅守様

御報

吉貴公御譜中

同年四月晦日

家繼公不豫大漸

前大樹家宣公以遺言ハ、紀伊中納言吉宗卿爲後見ハ、
此夕徙ニ移 武城ニ之御丸ハ、吉貴乃馳ニ頼娃長左衛門
久近於東武ニ奉レ賀レ之、

○同日

家繼公薨ニ于 武城ハ、享年八、奉レ葬ニ東武増上寺ハ、
奉レ稱ニ

有章院殿ハ、吉貴乃馳ニ伊勢兵部貞榮於東武ニ奉レ弔レ之、

繼豊公御譜中

同年五月朔日應_レ徵繼豊與_二在府之侯伯_一同登_レ營、於_二大廊下一間部趣前守詮房・本多中務大輔忠良列位、昨晚日因_二

家繼公薨御_一以_二

前大樹家宣公之遺言_一 紀伊中納言吉宗卿爲_二後見_一、徙_二移于 武城_二之城_一、執政井上河内守正岑傳_レ事_{今茲吉、貴在國、}

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、

公方様少、御機嫌御勝不被遊_レ間、爲伺御機嫌今日可致登 城旨、昨日從阿部豐後守殿被仰渡、今朝登 城仕_レ處、御老中并間部越前守殿・本多中務大輔殿列座_二の御機嫌御勝不被遊_レ付_レ而

文照院様以御遺言、紀伊中納言殿御後見被仰付、昨晚

二之丸被成御移_レ、紀州家之儀_{（伊予西条領主・頼政）}、松平左京大夫殿相續

被 仰付_レ間、此旨可致承知_レ、左_レの御用之儀_レ條可相扣旨、井上河内守殿被仰聞、重_レ御老中列座之上

公方様御養生不被爲_レ叶昨晚薨御被遊_レ、明日_レ 二之丸

爲伺御機嫌可致出仕旨、久世大和守殿被仰渡、御笑止之

御事絶言語奉存_レ、此旨爲可申上如斯御座_レ、恐惶謹言、

朱力キ 正徳六年 五月朔日 松平大隅守 繼豊御判

進上 中將様

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、益御勇健被成御座、珍重御儀奉存_レ、然_レ者爲端午之御祝儀、御目錄之通拜受仕、忝次第奉存_レ、御禮爲可申上如斯御座候、恐惶謹言、

朱力キ 正徳六年 五月六日 松平大隅守 繼豊判

進上 中將様

繼豊公御譜中

正文在文庫

今朝御干菓子一箱被獻_レ之、遂披露候、恐_レ謹言、

朱力キ 正徳六年 五月十三日 忠真判

在口裏

松平大隅守殿

忠真

670 繼豐公御譜中

家繼公享_レ年八、同月十五日酉刻奉_レ葬_二送

増上寺、奉_レ稱_二

有章院殿_一、

671 正文在文庫

御狀令披見_レ、

公方様御不例御養生不被爲叶、去月晦日被遊 薨御_レ旨、

奉絶言語_レ、

文昭院様依 御遺言

紀伊中納言様 御後見被 仰付、二丸_レ被爲 入、去二

日爲伺御機嫌被致出仕筈之由、且又紀州家之儀者松平左

京大夫殿相續爲被 仰付之旨、御老中列座ニ_レ被仰渡、

委細紙面之趣令承達_レ、恐_レ謹言、

朱力_レキ

正徳六年

五月十八日

薩摩守

吉貴御判

松平大隅守殿

672 全御譜中

同月廿二日

吉宗卿徙_二移于 武城_一、

673 吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、

貴公様益御勇健被成御座、珍重御儀奉存_レ、土用中爲可

奉伺御機嫌差上使、目錄之通進上之仕_レ、爰許別條無御

座_レ、尊意安可被思召_レ、猶奉期後喜之時_レ、恐惶謹言、

朱力_レキ

正徳六年

五月十五日

松平大隅守

繼豐御判

進上中將様

674 全御譜中

同年五月廿二日 吉宗卿徙_二移于 武城本丸_一、

675 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴簡拜見仕候、去十八日御領内_レ歸帆之唐船漂着仕_レ付、

御紙上之趣承知仕候、御家來中_レ返書ニ委曲申達候、恐

惶謹言、

全御譜中

朱カキ
正徳六年 五月廿八日
石河土佐守 政郷判
(長崎奉行)

松 薩摩守様
貴報

全上

返く此よしよく申入まいらせり様ことの御事

ニ御座り、

御ふミ下され、則申入まいらせり、如仰

公方様御不例御すくれ不被遊りニ付、去月晦日記伊中納言様御後見ニ仰出され、二之丸へ入らせられり、夫ニ付御機けん御窺被成たく、使者御あけあそハしりニ付、御ふミの様御悦にをほしめしり、なにもよろしく申入まいらせりやうにとの御事ニ御座り、かしく、

朱カキ
正徳六年

お

六 條

松平

さつまの守様ニテ

御返事

人々御中

海 津
福 井
そ の た

正文在文庫

貴簡拜見仕候、先達被仰下り薩摩國之内、久目崎漂着仕り南京出歸唐船、去月廿三日出帆仕り之旨、依之御紙表之趣承知仕候、恐惶謹言、
(見也)

朱カキ
正徳六年 六月二日

石河土佐守 政郷判
(長崎奉行)

松 薩摩守様
貴報

全上

貴簡拜見仕候、寧波出歸唐船壹艘人數三拾七人乗組、去月廿二日御領内薩摩國之内、脇元湊(前久徳)に漂着御碇り付、番船等堅固被附置、日和次第出帆可被仰付之旨、御紙上之趣承知仕り、猶御家來中に委曲及返報候、恐惶謹言、

朱カキ
正徳六年 六月二日

石河土佐守 政郷判

松 薩摩守様
貴報

全上

貴簡拜見仕候、先達被仰下り御領内脇元湊に漂着仕り寧波出歸唐船壹艘、去月廿六日出帆仕り旨、依之御紙上

之趣承知仕候、恐惶謹言、

朱力キ

正徳六年
六月五日

石河土佐守

松 薩摩守様

貴報

680

繼豊公御證中

今般因

吉宗公 御代替、繼豊豫詣_リ執政用_番 戸田忠真之第一、請_テ 獻_ニ起請文_ニ顯_ル誠實_上、故六月六日執政用_番井上正岑教諭曰、 明七日所_レ獻之誓詞宜_テ從_ニ先躰_ニ而誌_レ之來_ニ私亭_ニ加_中花 押_上、因繼豊詣_ニ正岑之第一、親_ニ展誓文_ニ刺_レ指染_ニ血於花 押_ニ、正岑及大御目附松平石見守乘宗在_レ席而檢_ニ見_之、 乘宗乃取_ニ誓文_ニ而捧_ニ正岑_一、所_レ獻之誓文見_ニ于後_一、

681

正文在文庫

明晩八時過私宅_江被相越可有誓詞外、

一 爵文迄調可有持參事、

一 充所老中五人座並之通可被相調事、

一 判形老手前_ニ被致、血判老此方_ニ被致事、

以上

682

朱力キ
正徳六年
六月六日

扣正文在文庫

起請文前書

一 奉對

上様忠勤之志專一奉存知、不可有表裡事、

一 御一門方公家衆并親類縁者其外挾野心族於有之者、早速可致言上候、勿論一味同心仕間敷事、

一 就于

御代替、弥重 公義、御仕置等疎略不奉存可相守候事、

右條々於致違背者、

梵天帝釋四大天王惣而日本國中六十餘州大小神祇、殊伊豆箱根兩所權現三島大明神八幡大菩薩天滿自在天神部類眷屬神爵冥爵各可罷蒙者也、仍起請文如件、

正徳六年申六月七日

松平大隅守判

土屋相摸守殿

井上河内守殿

阿部豊後守殿

久世大和守殿

戸田山城守殿

白木御文書五番箱中_二八_一

隅州様御誓詞一卷帳

右フタ紙ニアリ

今度 公方吉宗公御代替付、御家督・御部屋栖之御方表

何れ表御誓詞御願有之事_レ付故

隅州様_(總書)表御誓詞御願

太守様御誓詞被成_レり節之格_ニ御願可被成_レとの儀_ニ有、書

留等見合_レり得共、不相知_レり付、脇方承合_レり處、松平陸奥

守様御自身御用番様_(伊達吉)に御出、御願被成_レり、且又松平若

狭守様_(吉徳)表御自身御勤被仰込事候由、然_レ表御使者等を以

御願被成筋_ニ有如何敷事_レ付故、隅州様_(前田)表御自身御勤被

成_レり筋申上、申五月十六日御願書、御用番戸田山城守様

に御勤御願之段被仰入、御願書御用人小林又兵衛に御渡

被成_レり處、則可申聞_レり、懸御目申_レり有御座_レり、乍然御

用取込罷在_レり、御待遠可有御座と申_レり付、御供仕_レり森川

理右衛門_(武)より相應_(意)ニ挨拶仕_レり迄_ニ有御立被成_レり、左_レり有

理右衛門に又兵衛より委細山城守に可申聞_レり、右御願之

御方何れ表被仰置、御立被成_レり事之由_レり、右御願_ニ付_レり

表、誰そ御同道被成_レり様_ニ表可有御座哉と爲申談事_レ付へ

とも、子細表無之御事_ニ有御同道無_レり、右御願之御書
付左之通、

(の1)

口上覺 大奉書切紙

今度就 御代替誓詞仕差上度_レり、御差圖奉頼_レり、以上、

申五月十六日

松平大隅守

右之通御願書被差出置_レり處、六月六日井上河内守様より
御留守居御用之由申來_レり付、森川理右衛門罷出_レり處、左
之通御書付御渡被成_レり、

(の2)

明晩八時過私宅に被相越可有誓詞_レり、切紙

一 罰文迄調可有持參事、

一 宛所老中五人座並之通可被相調事、

一 判形表手前_ニ有被致、血判表此方_ニ有可被致事、

以上

六月六日

一 右御誓詞付_レり表、御前書等御國許より被差越_レり様申越

置_レり付、御記録奉行に被仰付御案紙被差越_レり故、御右

筆南雲順右衛門に調被仰付、右御誓詞御文章之内

上様と被書出_レり儀、又表御實名被書出_レり儀不相知_レり付

嶋津淡路守殿前以御誓詞有_レり、其上飯高市郎兵衛様脇

くは承合ひ處、

上様と御書出御名迄この、御實名無之由り付、其通被相調、爵文者熊野牛王被相調御前書左之通、

起請文前書

別寫載有之、畧ス

全文ノ跡ニ左ノ通り

右之通御調、御判形者御手前この被成、六月七日八ツ前より河内守様御宅に御出被成、直御書院次之間御通被成、左りの理右衛門箱より御誓詞取出 御前に差上り、其時御用人音羽庄兵衛 御前に罷出り付、御誓詞御直御渡、追り河内守退出可仕り間、可申聞通庄兵衛御挨拶申上り引入り、

一隅州様御はやく御出被成、夫より段々御出有之、御同座こそ松平安藝守様・松平長門守様など纏之御人數この外、左りの河内守様御退出、直御書院に御出席、大御目付松平石見守様御詰被成、御誓詞者御用人松倉文右衛門讀、則 隅州様御前に御誓詞文右衛門差上り付、御血判被成り處、石見守様御取りの河内守様は被差上

御覽被届り、則御禮被成、御立被成り、大勢この諸事急成事この、御挨拶など被成間及無之程この、御挨拶及不被成り、一番安藝守様、二番 隅州様、夫より段々御誓詞爲被成事り、

一御誓詞相濟り付る者、最前御願被置り故、戸田山城守様 隅州様御出、今日河内守様この御誓詞相濟り段御届御取次迄被仰置、左りの河内守様は又々御出、御願之通御誓詞相濟、難有之旨口上この御禮被仰置、御歸被成り、右通御勤り儀者若狹守様・安藝守様其外何れ様御見廻被成等り故、

隅州様こそ御勤被成り、河内守様御玄關込合候故、最前山城守様は御勤爲被成事候、何れ様右之次第この御勤被成り、外之御老中様は御勤無之り、

一當日御詰被成り大御目附様は御勤無之り、先年 太守様御誓詞被成り節、御使者爲被遣由相見得りへとも、先年別立り御一人様被成り故、御苦勞被成りとの御届爲被成りこの外半、此節者御付届被成り方無之り故、尤石見守様は、隅州様御勤無之り、

一右之通御誓詞首尾能御仕廻相濟り、段々之儀ハ御國元は時々申上り、

以上

右 隅州様御誓詞一卷帳、御家老座より申下ケ、御用
之分於其元御吟味可有之と存シ、不殘書寫差越申外、
以上、

六月

市來瀬兵衛

吉田用右衛門殿

右一冊トナレリ

684

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、今度 (徳川吉忠) 中納言様御後見被 仰出之、二丸

に被爲 入外段被承之、被差越使者候紙面之趣、各一覽

之事外、恐々謹言、

朱カキ

正徳六年

六月八日

松平薩摩守殿

井上河内守

正岑判

685

全上

御札令披見外、

公方様御不例御養生不被爲叶、被遊

薨御、被絶言語由令承知外、

上様御機嫌以使者被相伺之外、被爲替御儀無之の間、可

御心易外、紙面之趣各申談可及言上外、恐々謹言、

朱カキ

正徳六年

六月八日

松平薩摩守殿

井上河内守

正岑判

686

全上

御悔として御ふミ下され外、

公方様御養生御叶ひ不被遊 薨御あそハされ 月光院様

御愁傷のほど、御さつしあそハし外へくり、文の様申入

まいらせ外、態御返事ハあそハし外ハす外、かしく、

朱カキ

正徳六年

六條

海津

松たいら

さつまの守様にて

人々御中

福井

687

吉貴公御譜中

正文在文庫

御檜重一組被獻之候、遂披露外、恐々謹言、

朱カキ

正徳六年

六月九日

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

688 全上

(家) 有章院様御法事御執行付ゐ、以使者御香爨被獻之候、於

増上寺奉納之事り、右之趣可及言上候、恐々謹言、

朱力キ 正徳六年

六月九日

久世大和守

重之判

松平薩摩守殿

689 全上

御札令披見り、

公方様御不例御養生不被爲叶、被遊 蕪御、被絶言語由

令承知り、

上様御機嫌以使者被相伺之り、被爲替御儀無之り間、可

御心安候、紙面之趣承届り、恐々謹言、

正徳六年

六月九日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

690 全御譜中

同年六月九日松平飛驒守定英夫人細貴令嬖生三男子號百於東武

芝第一、

691 正文在文庫

一筆啓上仕候、甚暑節御座り得共、益御勇健被成御座、

玆重御儀奉存り、然者松平飛驒守殿奥方今月九日晚御平

産御男子出生、御母子共弥別條無御座、目出度御事り、

此等之段爲可申上如斯御座り、恐惶謹言、

朱力キ 正徳六年

六月十三日

松平大隅守

繼豊御判

進上中將様

692 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴簡拜見仕り、御領内薩摩國之内、(向久徳) 脇元湊江南京出歸唐

船人數四拾人乗壹艘、今月六日漂着卸碇り付、番船等堅

固被附置候由、日和次第出帆可仕旨申り由御紙上之趣承

知仕り、委曲御家來中江及返答り、恐惶謹言、

朱力キ 正徳六年

六月十四日

石河土佐守

政郷判

松 薩摩守様

貴報

全上

貴翰拜見仕候、御領内薩摩國之内、脇元湊に去七日寧波出歸唐船壹艘漂着仕付、番船等堅固被附置付旨、御紙上之趣承知仕候、委細御家來中より申來則及返答候、恐惶謹言、

朱力キ
正徳六年 六月十五日

石河土佐守
政郷判

松 薩摩守様
貴報

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見付、

上様御機嫌以使者被相伺之外、益御安泰之御儀外間、可御心易付、紙面之趣各申談及 上聞付、恐々謹言、

朱力キ
正徳六年 六月十六日

井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見付、就酷暑之節

上様御機嫌以使者被相伺之外、益御安泰之御儀外間可御

心安付、隨ち琉球布十卷并砂糖漬天門冬一器・琉球泡盛

酒二壺被獻之外、各申談遂披露候、恐々謹言、

朱力キ
正徳六年 六月十六日

井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

鯛一折被獻之外、遂披露候處一段之御仕合付、恐々謹言、

朱力キ
正徳六年 六月廿一日

井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

全上

今度爲御本丸御移徙之御祝儀、以使者御樽着被獻之外、遂披露外處一段之御仕合付、恐々謹言、

朱力キ
正徳六年 六月廿二日

戸田山城守
忠眞判

久世大和守
重之判

阿部豊後守
正喬判

松平薩摩守殿

井上河内守
正岑判

繼豐公御譜中

正文在文庫

今度爲御本丸御移徙之御祝儀、以使者御樽肴被獻之外、
遂披露^ハ處一段之御仕合候、恐々謹言、

朱力キ

正徳六年

六月廿二日

正岑判

在口裏

松平大隅守殿

在右裏
井上河内守
正岑

吉貴公御譜中

正文在文庫

赤貝塩辛一器被獻之外、遂披露候之處一段之御仕合外、
恐々謹言、

朱力キ

正徳六年

六月廿五日

井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

全上
御札令披見外、

上様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度就御
代替誓詞之儀、以家來被申聞之趣令承知外、紙面之趣各
一覽事外、參府之節可被致誓詞外、恐々謹言、

朱力キ

正徳六年

六月廿六日

井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

全御譜中

同年六月廿七日

吉宗公行^ニ 嗣位規式於柳營^一、吉貴在^レ國故今日登^ニ賀使
島津將監久當於 營^一、獻^ニ上御太刀一腰^一、來國光長二尺二寸四部御馬
代金十兩^一、久當乃附^レ之於執奏牧野因幡守英成^一、同日
遣^ニ使者於執政土屋相摸守政直・井上河内守正岑・阿部豐
後守正喬・久世大和守重之・戸田山城守忠真、副執事大
久保長門守教重・同佐渡守常春・森川出羽守重令^一、各
呈^ニ太刀一腰・馬代金十兩^一奉^レ賀^ニ嗣位^一、

全上

正文在文庫

御代替爲御禮、以使者御太刀來國俊一腰・御馬代黃金十

兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ

正徳六年

六月廿七日

戸田山城守

忠眞判

久世大和守

重之判

阿部豊後守

正喬判

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

703 繼豊公御譜中

六月二十七日

吉宗公 御代替之後、繼豊登レ營始奉ニ 拜謁一時蒙ニ

尊言一、

704 繼豊公御譜中

七月朔日繼豊登レ營、於大廊下ニ執政列位番用阿部豊後

守正喬傳レ命曰、就ニ 御兩代文昭院殿有章院殿凶事葬打續一、見レ

改三元於享保一也於薩府同月、十八日傳令

705 吉貴公御譜中

同年七月朔日被改三元享保一、

706 正文在文庫

貴簡拜見仕外、先達前久松被仰下外御領内脇元湊江漂着仕外

南京出歸唐船壹艘、且又同所江出戻外寧波出歸唐船壹艘、

去月廿三日出帆仕外之旨、御紙上之趣承知仕外、御家來

中方も委曲被申越之、承達仕候、恐惶謹言、

朱力キ

享保元年

七月四日

石河土佐守

政郷判

松 薩摩守様

貴答

707 繼豊公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、殘暑甚外得共、弥御無吳珎重存外、於我

等表無相替儀外、然者松平飛騨守殿與、去月九日晚平産

男子出生ニる母子共無別條御一段存外、依之示給被入念

儀欣然之至外、恐々謹言、

朱力キ

享保元年

七月六日

薩摩守

吉貴御判

松平大隅守殿

御報

706 吉貴公御譜中

同年引_レ水壘_三培隅州國府宮内原_一、寄_二附水田二百石於正八幡宮_一、

享保元年丙申七月十三日、吉貴爲_三述職_二發_三府城_二東行、取_三陸九州_一、家老種子島彈正久基・比志島隼人範房、側用人平岡八郎太夫之品、表用人蒲生十郎兵衛清賢等從_レ焉、同月二十八日到_三豐州大里_二駕_レ船、

709 繼豊公御譜中

正文在文庫

御狀令披見_レ、

上様倍御機嫌能被成御座、御表

出御

御代替之御禮被爲請之、貴殿登

城御禮首尾好相濟、殊被蒙

上意、難有被存段尤之事_レ、依之示給被入念儀存_レ、恐

々謹言、

享保元年 七月廿五日

薩摩守

吉貴御判

松平大隅守殿

御報

710 吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕_レ、七夕且又爲八朔之御祝儀、御目錄之通拜受仕、忝次第奉存_レ、右御禮爲可申上如斯御座候、恐惶謹言、

享保元年 八月二日

松平大隅守

繼豊御判

進上中將様

711 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻_レ之_レ、遂披露候之處一段之御仕合_レ、恐々謹言、

享保元年 八月三日

戸田山城守

忠眞判

久世大和守

重之判

阿部豊後守

正喬判

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

712 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

上様益御安泰被成御座、今度於増上寺

有章院様御法事御執行相濟、五月廿七日 御廟所御參詣

之儀被承之、恐悅旨尤、依之被差越使者、紙面之趣各

申談及言上、恐、謹言、

享保元年

八月十一日

久世大和守

重之判

松平薩摩守殿

713 吉貴公御譜中

同年八月十三日於東武城中、

大樹吉宗公有將軍 宣下之議式、轉任正二位右大

臣、吉貴以、价奉賀之、獻御太刀一腰・御馬代黃

金十兩、

○同年八月十六日吉貴着攝州大坂、二十四日到伏見、

九月十一日着于東武芝第、翌十二日 上使井上正岑

來櫻田之第一勞之、

繼豊公御譜中

享保元年八月十三日

吉宗公有

將軍

宣下之規式、嗣任正二位右大臣、因行規式於 柳

營、繼豊束帶而乘、轉登、營、四品以上之諸侯伯、各

二行列居拜、調

公奉賀、嗣任、時蒙、尊言、退去、

715 繼豊公御譜中

正文在文庫

明十五日

敕使 院使爲御馳走、御能就被 仰付、例月之御禮無

之外條、不及登 城外、以上、

享保元年 八月十四日

戸田山城守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平大隅守殿

716 繼豊公御譜中

繼豊公御譜中

正文在琉球國國司

爲年首之嘉慶、被差渡使簡、殊別錄之表贈給之、入念外
段令怡悦外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

朱力キ
享保元年

八月十八日

侍從

繼豐 (花押 No.5)

謹上 中山王

717

全上

芳墨令披見外、如來意於菟御方婚禮首尾好相整外、爲祝
詞以久志親方太刀・馬代并目錄之通被相贈之、入念之段
令祝着外、恐惶不宣、

令祝着外、恐惶不宣、

朱力キ

享保元年

八月十八日

侍從

繼豐御判

謹上 中山王

718

全上

芳札令披見外、中將殿當年參勤之時節御延引被 仰出外
爲祝儀、當間親方被差渡、太刀・馬代并目錄之通贈給之、
入念儀大悦之至外、恐惶不宣、

(吉書)

朱力キ

享保元年

八月十八日

侍從

侍從

繼豐御判

謹上 中山王

719

芳札令披見外、我等前髮執之爲祝儀、被差渡使翰、殊太
刀・馬代并別錄之表贈給之、入念儀忻然之至外、恐惶不
宣、

朱力キ

享保元年

八月十八日

侍從

繼豐御判

謹上 中山王

720

全上

來札令披見外、如承意去夏我等緣組被 仰出外爲祝儀、
以仲田親方太刀・馬代并目錄之通贈給之過當之至外、恐
惶不宣、

朱力キ

享保元年

八月十八日

侍從

繼豐御判

謹上 中山王

721

全上

芳札令披見外、如承意信證院殿儀願之通薩州被引越外、
(續實御書)

爲悦以久志親方目錄之表饋給之、入念儀過量之至、恐
惶不宣、

朱力キ

享保元年

八月十八日

侍從

繼豐

謹上 中山王

722

全上

芳翰令披見、大清封王使之願有之、去年訴訟之趣
外處、首尾能相調、依之座喜味親方被差渡、目錄之通
被相贈之、入念儀令怡悦、恐惶不宣、

朱力キ

享保元年

八月十八日

侍從

繼豐

謹上 中山王

723

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、今度御移徙御祝儀相濟外段
被承之、目出度被存由得其意外、依之被差越使者候紙面
之趣各申談及 上聞、恐、謹言、

朱力キ
享保元年
八月廿一日
久世大和守
重之判

松平薩摩守殿

724

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、今度 御代替御禮相濟外段
被承之、目出度被存由得其意外、依之被差越使者外紙面之
趣各申談及 上聞、右之節同氏大隅守儀御禮申上之、
難有由別紙之通承届、恐、謹言、

朱力キ

享保元年

八月廿三日

久世大和守

重之判

松平薩摩守殿

725

吉貴公御譜中

正文在福昌寺

以道眼明則道德自崇矣隨道聲亦美也夫惟

覺照山妙谷寺慈門和尚爲其德僉言於緇衣群中實稀世之
一角麟也已聞其芳名故任以福昌之寺孫速出妙谷之幽邃
早植錫於玉阜之高明挑自開山石屋大禪師四十三代之燈

仰祈

聖皇寶祚伏禱

大君武運且光起叢林之禮樂匡正四來之禪徒是豈不國家之

洪福士民之大幸乎因以疏

享保元年丙申八月二十五日

中將吉貴

726 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見々、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤々、將又今度年號

改元之儀被承、玆重由得其意々、紙面之趣各申談及上

聞々、恐々謹言、

享保元年 八月廿六日

久世大和守

重之判

松平薩摩守殿

727 吉貴公御譜中

正文在文庫

如芳翰我等官位昇進、御字被下之忝儀々、依之爲祝詞目

錄之通贈給之、入御念段欣然之至存々、恐々謹言、

享保元年

八月廿六日

紀伊中將

宗直判

松平薩摩守殿

御返報

728 全上

御札令披見々、

公方様益御機嫌能被成御座、今度御代替御禮相濟々段被

承之、目出度被存由得其意々、依之被差越使者々紙面之

趣令承知々、恐々謹言、

享保元年 八月廿七日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

729 全上

今度

將軍 宣下相濟々爲御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代

黄金十兩被獻之々、遂披露々處一段之御仕合々、恐々謹

言、

享保元年

八月廿七日

戸田山城守

忠眞判

久世大和守

重之判

730

継豊公御譜中

正文在文庫

明朔日例月之御禮無之ハ條、不及登 城ハ、以上、

朱力平
享保元年
八月廿九日

戸田山城守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平大隅守殿

阿部豊後守

正喬判

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

732

全上

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下 御任槐相濟ハ段被承、目出度被存由得其意

候、依之被差使者ハ紙面之趣、令承知ハ、恐々謹言、

朱力平
享保元年
九月四日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

謹言、

朱力平

享保元年
九月二日

戸田山城守

忠眞判

松平薩摩守殿

731

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下御任槐相濟ハ段被承之、目出度被存由得其意

ハ、依之被差越使者ハ紙面之趣、各申談及言上候、恐々

733

全上

まことに萬々年もとめてたさよろしく申せとの御事

ニ御さハ、めてたくかしく、

四日之御ふミ下されハ、まつく

公方様

一位様御機けんよくならせられハ、さてハ

將軍 宣下之御きしき相すみまいらせハ御しうき

公方様よりおくさまへ御しうき御目錄の通、御はいれう被成、有かたく思しめし被成外よし外て、御禮被仰上、御ふみのやう則ひろういたしまいらせ外へハ、御まんそくに思しめし外、めてかしく、

朱カキ
享保元年

お

まつ平

いは倉

まつまの守様

梅その

御返事人々御中

734

継豊公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、今度

將軍 宣下之爲御祝儀、從

公方様去二日 上使を以妻方に御目錄之通致拜領り由、

難有仕合奉存外、爲悦示給被入念儀存外、恐々謹言、

朱カキ
享保元年

九月四日

薩摩守

吉貴御判

松平大隅守殿

御報

735

全上

正文在琉球國國司

滿君御方就逝去、爲悔被差渡宇榮原親方、示給紙面之趣入念儀存外、恐惶不宣、

朱カキ
享保元年

九月四日

侍從

繼豊御判

謹上 中山王

736

継豊公御譜中

正文在文庫

猶以鬩斗目長袴可有着用外、以上、

爲今度之御祝儀、來十一日御能被 仰付外間、可致見物

旨被 仰出外條、被存其趣五時可有登 城外、以上、

朱カキ
享保元年

九月七日

戸田山城守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平大隅守殿

737

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖五到來欣覺外、委曲久世大和守可述

外也、

739

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座

將軍 宣下爲御祝儀、其方妻御目錄之通拜領、難有由得

其意外、依之被差越使者候紙面之趣、各一覽之事外、恐

御札令披見外、
公方様益御機嫌能被成御座
將軍 宣下爲御祝儀、諸御禮相濟外段被承、目出度被存
之由尤外、依之被差越使者外紙面趣、各申談及言上外、
恐々謹言、
享保元年 九月九日 戸田山城守 忠眞判

松平薩摩守殿

738

吉貴公御譜中
正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座

將軍 宣下爲御祝儀、諸御禮相濟外段被承、目出度被存

之由尤外、依之被差越使者外紙面趣、各申談及言上外、

恐々謹言、

享保元年 九月七日

吉宗公 墨印

薩摩

中將殿

謹言、

享保元年 九月九日

戸田山城守 忠眞判

松平薩摩守殿

740

継豊公御譜中

同年九月十一日、受執政之奉書、繼豊登レ營、是

大樹吉宗公因今般

將軍

宣下之賀慶二拜二視舞樂、

741

継豊公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之外條不及登 城外、以上、

享保元年 九月十四日

戸田山城守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平大隅守殿

742

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

芳翰令披見外、大清封王使願之儀付_レ、去歲訴之趣有之、
任其意外處、爲謝禮被差渡座喜味親方、殊目錄之通贈給、
入念儀存外、恐惶不宣、

朱力キ
享保元年 九月十五日 中將吉貴御判

謹上 中山王

743 全上

明十六日五半時登

城參勤之御禮可被申上外、以上、

朱力キ
享保元年 九月十五日

戸田山城守
久世大和守
阿部豊後守
井上河内守

744 全上

家來二人

御目見被 仰付外間、召連可被罷出外、以上、

朱力キ
享保元年 九月十五日

745 吉貴公御譜中

同年九月十六日吉貴以_レ迹職之事登_レ營、奉_レ調_二
吉宗公_一獻_二御太刀一腰・白銀五百枚・時服二十領_一、家老
種子島久基・比志島範房奉_レ拜_二調_一、
御前_一各獻_二上御太刀一腰・御馬代銀一枚・時服三領_一、

746 全上

猶以敷斗目長袴可有着用外、以上、

爲今度之御祝儀、明後十八日御能被 仰付外間、可致見
物旨被 仰出外條、被存其趣五時可有登 城候、以上、

朱力キ
享保元年 九月十六日

戸田山城守
久世大和守
阿部豊後守
井上河内守

松平薩摩守殿

747 全上

此よし何もよく申せとの御事ニ御座外、かしく、
文くたされ外、まつく

公方様

748

繼豊公御譜中

正文在琉球國國司

從 國王様被成下尊札拜見仕外、

(總豐) 隅州様御前髮被爲執外爲御祝儀、(總豐生母、名越氏) お須磨様は目錄之通御

進上之段遂披露外、此旨可有洩達外、恐々謹言、

朱力キ 享保元年

九月十八日

肝付主殿

兼柄判

鳴津内記

久貫判

鳴島大藏

久明判

750

吉貴公御譜中

同年九月二十六日日州霧島山頭兩部池邊新火井沸騰、雨

火石劫灰一、火石所降東霧島神社狹野權現社神德院及院

中門前瀬戸尾權現社及別當寺、(小村) 高原・小林郷等之民屋、

山樹悉爲二灰燼一田畠灰埋矣、

高野山

蓮金院

鳴津内記

久貫判

鳴津大藏

享保元年九月廿一日

肝付主殿

兼柄判

鳴津内記

久貫判

749

吉貴公御譜中

扣正文在文庫

白銀六貫目

右薩摩中將吉貴爲先祖之牌前燈明料、此節貴寺に被寄進之訖、全被致受納晝夜之燈明不可有怠慢者也、仍狀如件、

三司官

豐見城(朝臣)王子

朱力キ 享保元年

右

松平

薩摩守さま
御返事
人々御中

梅その

岩倉

先是薩府松原山南林寺罹^(慶兒島)災、今年九月二十八日再興造畢、今曉行^ニ大中良等庵主遷座之禮、

751

全御譜中

正文在文庫

明朔日亥猪御祝付^テ、例月之御禮者無之^ハ間、不及登

城候、以上、

^{朱カキ}享保元年
九月晦日

戸田山城守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平薩摩守殿

752

吉貴公御譜中

正文在文庫

白銀六貫目

右 中將吉貴様爲 御先祖御牌前常燈明料、此節當寺

江 御寄附被爲遊候、則致受納^ハ條、永々無怠轉晝夜常

御燈明可奉備御牌前者也、仍後證如件、

享保元年十月十六日

高野山

蓮金院

哲眞^(書判)

753

吉貴公御譜中

先是

吉宗公嗣^レ位、故從^ニ先躰^一上^下言奉^ニ 琉球國之賀使於東

武^一幕府上、今茲十月十六日執政戸田山城守忠眞招^ニ留

主居者^一述^ニ 台命^一、來來成歲吉貴傳^テ攜^ニ琉使^一當^レ來^ニ東

武^一之事上、

754

正文在文庫

松平薩摩守

御代替之爲御禮、琉球中山王使者差渡^ハ儀被相伺^ハ、來

々戌年先例之通其方召連可有參府^ハ、

^{朱カキ}享保元年

755

吉貴公御譜中

陽和院者舊平松時庸卿女、而太守吉貴祖父光久夫人也、

其所^レ詠和歌拜^ニ受 御點於

法皇後水尾院、且拜戴百片ニ附文錄、目共七帖也、延寶中應

錄ニ于光久之譜ニ必也矣、然夫人卒江都于正徳元年辛卯

八月十二日、厥后出ニ于夫人之櫛、於是譜往已成、

編次亦備故不能換簡策、享保改元丙申十月二十五

日吉貴命藏ニ之於寶庫、往歲譜中姑雖似漏脱、此

顯事蹟、今記之於所命年譜下、事詳ニ于左、

正文在文庫

初春

くもりなき御代のめくすかたかに出る日も光さしやけきそふ千世の

はつ春

雨中花

へ春雨の降にぬるもあかもいとほす折そてにこほれて匂ふ花のした露

花爲春友

友とのミなれ行花の春過てちりなん後はいかくらさ

む

夜歸雁

夢をのミ歸る雲路にさきたてのこしをきてゆくかた見せぬ夜半の

雁かね

朝落花

きのふまでかくやハありしけさミれハこすゑの花の雪
とのミふる

卯花連垣

しろ妙に
をしなへて雪ふる里と見ゆるかな卯のはなさける垣根
つつきハ

郭公早過

へ待えても恨そつきぬほとたます。一聲をたに鳴すて、
ゆく

夏草深

へ里の名もいまあらハれて深草の夏野(ママ)道ハ跡たえにけ
り

七夕雲

まれにあふこよひはかりハたなハたのくもの衣もよたち
なへたてそ

草花露

へ野邊しんらハいまちくさの花の色くにむすひかへたる秋(ママ)キ
の夕露

海邊月

へとまり舟今宵ハ夢も波まくらうきねともなふ月のさや
けさ

月前思往事

みし人のかきりを月におもひ出てなれし雲井の秋そ戀しき

菊霜

百草の花はうつろふませの内に霜をかさねて匂ふ白きく

庭落葉

風ならてとはれぬやとの庭の面ハ降しくまゝにつもる紅葉(葉)

千鳥

浦かせに夕しほたかくみちくれハなみよりさきにたつ干鳥かなたつ也

歳暮

おをしめとも月日よとまぬ早瀬川なかれてくるゝ年波ハうし

依戀祈身

なからへてあれはそつらきひたすらに戀しなはやと身をらんいのる哉らん

寄浅茅戀

いつの間に人のちきりの浅茅生にはらこゝろの秋の色をみ

すらん

山家暮夕嵐

世のうさにおもひかへてハタくれのあらしもしのふ松のした庵くら

寄竹祝

くれ竹の幾よろつ代を契るらん一ふしにたに千世のもれは

墨點十二首之内長二

757

正文在文庫

自筆の一巻ハ此御所にとゝめをかれり、このよしこゝろえりて申へくり、めてたくかしく、

此一巻いつれのころか御めにかけられりつるを、何とそ御てんもあそはされりてつかはされり、たゝ御かたハラにおかせられ、御覽しそめしより、匂々言々御目をおとろかされりはかり、さて、うちすき行かへりりはる秋もいくたひにか成りやらん、御おほへもなきほと御事、うつゝなく覺えさせおハしましり、いまたにも御てんばかりよもあそはされりてつかはされりハ、ありかたよくよこひおもはれりハんとやうく申入りへハ、今程ハ

ことのほかの御よはひもつもり外て、よろつ御正躰なき御事に外まゝ、御しんさくに覺しめされりとの御事に外へとも、たつて申入りへは、御てんはかりハあそはされ外まゝ、その御心えこて、うとき人などにはみせられ外ハぬやうにと思ひまいらせり、御詞も少くはへられ外、すなはちかき付させられ外、そなた方御目につけられ外、かしく、

朱カキ
延寶七年

山の井

(鳥津光久)
松平大すみの守殿

御おく方へ

まいる

在包紙

勅点ノ御巻物にそい申初の文

吉貴公御譜中

正文在文庫

鳴津の中將光久朝臣にむかへられて、あつまにくたり、
(幾道)
こゝらの年をおくる、あしたにハ富士の根の雪をおもひ、
ゆふへにはむさし野々月をこひ、花ほとくすすにつけて
も、やまと歌にかゝりさふらふ、こたちなにも、すし
本マ、

なきゑ(夷)ひす歌よませ興をもよほし侍る事、つねのことく
さとす、ち(平松時晴)の卿ハとくうせさせたまひて、せうとの中納
(冠人)

言の諷諫にて、和歌の浦にひろふうつせ月にもまじれる

玉もやあらん、おさなくより此道にこゝろをよせ侍る、さ

るに時くよ欠字ナルヘンおきぬるくゑい廿首かきあつめ法皇の

ゑいらんにそなへん事をねかゐて、此院にさふらふ妹の

山井の局のもとへつかハし侍りしに、忝なくも御覽まし

く、いちはやく御點をくはへられ、あまたの

ゑい言をそへさせ給、みつからかきてたてまつりしハ

御所にとめさせたまひて、梅小路の民部の大夫に仰て、

かのおそのかきて奉りしに、御點ましくてくたさ

る、よしを、山井の局よりつたふ、此道のめうか住吉玉

津嶋の御まもり、氏の社の御めくみもあさからぬ事と、

かしこまりよろこぶつたなき詞言なれとも、

御點の一巻なれハ、鳴津の家跡として累代につたへまほ

しく、おもむきをかきそえて箱底にひめおき侍りぬ、

延寶七の年六月朔日

在包紙

勅点之

巻物ニ添申外書付

此所に延宝七年六月十日山の井ヨリ松平大守殿おく方宛の文アリ、次筆順序
分り兼候故に、写サス

吉貴公御譜中

正文在文庫

御色紙筆者目録

- あきことり 遠近の
- 山たかみ いその神
- わかやとの はるはなを
- ととまらぬ 年をへて
- ちるはなも しらくもと
- いっしかと よしの山
- 春のよはく かすみしく
- なにはかた ひめの花
- おもかたれ むかしたれ
- 久かたのハ わけゆけハ
- 音羽やま 五月雨の
- ときわかす こかくれて
- 花ちると わかやとの
- 有あけの ミわたせば
- 關白殿
- 左大臣殿
- 右大臣殿
- 照高院宮
- 大覺寺宮
- 妙法院宮
- 知恩院宮
- 聖護院宮
- 一乘院宮
- 青蓮院宮
- 梶井宮
- 曼珠院宮
- 徳大寺前左大臣
- 大炊御門前左大臣

- よろつ代に やとことに
- たなはたに 秋きぬと
- はつしけれ たれきけれ
- 秋はきぬ なつころも
- おのつから 風ふけは
- いなげやなけ いにしへの
- 水きよみ 秋の夜の
- あきはきぬ 松かけの
- 神なひの ちりかゝる
- 木からしの 秋はけふ
- はしたかの むかしたに
- 夕されは 花のいろは
- かきくらし ふるさとの
- かきくらし しくれゆへ
- なかつた川 なかれくる
- もみち散 時雨つゝ
- かめのおも つかめのおも
- うちよする おほはらや
- よろつ代も さもこそは
- いくとせも 山ふきも

- 轉法輪前右大臣
- 内大臣殿
- 徳大寺前内大臣
- 万里小路大納言
- 大炊御門大納言
- 花山院大納言
- 今出川大納言
- 東坊城大納言
- 轉法輪大納言
- 飛鳥井前大納言
- 日野前大納言
- 葉室前大納言
- 柳原前大納言
- 園前大納言
- 油小路前大納言
- 坊城前大納言
- 藪前大納言
- 中院前大納言
- 東園前大納言
- 藤谷中納言

ふるさとへ
みやこにて
むねハふし
ありあけの
つゝめとも
あつま路の
うくひすの
大井河
いかにして
いかはかり
今はたゞ
秋霧の
さしのほる
よそにては
わかそての
あをたに
いそのかみ
なけきつゝ
うらみしな
おもひねの
しほかせの
わひぬれハ
咲ぞめし
すかはらや
おほみ川
ことの音に
わするなよ
としへたる
かすかやま
大江山
身のうきを

五條中納言
平松中納言
綾小路中納言
阿野中納言
葉室中納言
野宮中納言
千種中納言
中園宰相
甘露寺宰相
花園宰相
岩倉宰相
廣橋宰相
日野宰相
伯二位
愛宕三位
七條三位

正文在書院方

あさ緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か
やまたかミ霞を分てちる花を雪とやよその人は見るら

ん

わかやとの八重山吹ハ一重たにちりのこらなむ春の
かたみに

とゝまらぬ心そ見えむ歸雁花のさかりを人にかたるな
散はなも哀と見すやいその上ふりはつるまておしむ心
を

いつしかと明行空のかすめるは天の戸よりやはるはた
つらん

春の夜は軒はの梅をもる月のひかりもかほる心ちこそ
すれ

難波かたかすまぬなミも霞けりうつるもくもる臘月夜
に

面かけにはなのすかたをさきたてゝいくへこえきぬ峯
のしら雲

久方のあまのかく山てらす日のけしきもけふそ春めき
にける

をとほ山けさ越くれはほとときすこすゑはるかに今そ
鳴なる

時わかすふれるゆきかとミるまてにかきねもたハにさ
ける卯花

花散といとひしものをなつ衣たつや遅きと風をまつか

な

有明の月たにあれや時鳥たゝ一こゑの行かたもミむ

萬代にかはらぬ物は五月雨の雫にかほるあやめなりける

たなはたにかしつる糸のうちはへて年のをなかくこひやわたらむ

はつしくれふれはやまへそおもほゆるいつれのかたかまつもみつらむ

秋は來ぬたつたの山もみてしかなしくれぬさきに色やかはると

おのつから秋はきにけり山里のくすハひかゝるまきのふせやに

なけや鳴よもきか袖のきりくすすきゆく秋はけにそかなしき

水きよみやとれる月のかげさへや千代まできみとすまむとすらん

秋はきぬ年も半にすぎぬとや萩ふく風のおとろかすらむ

神なひのミむろの山のくすかつらうらふきかへす秋は

きにけり

木からしのさそひはてたる紅葉はをかハせのあきとたれなかわらむ

はしたかの初かりころもつゆ分て野原のはきのいそにはつろふ

夕されハ衣手さむしみよしのゝ吉野の山にミ雪ふるらし

かきくらしあられふりしけし玉をしけるにいとものみるへく

かきくらししくるゝそらをなかめつゝおもひこそやれ神なひのもり

龍田川紅葉(葉)ゝなかる神なひのみむろの山にしくれふるらし

紅葉ちる山はあき霧はれせねハ立田の河のなかれをそみる

つるかめもちとせのゝちはしらなくにあかぬこゝろにまかせはてゝむ

うちよする浪の花こそさきにけれちよ松かせやはるになるらむ

萬代もなぞこそあかね君かためおもふこゝろのかきり

なければ

幾とせも君にかたらむつもりてかもしろかりし花の

御幸を

古里へわれはかへりぬたけくよのまつとはたれにつけ

よとかおもふ

むねハふし袖は清見か關なれや烟も浪もたゝぬひそな

き

有明のつれなくみえし別よりあかつきはかりうき物ハ

なし

東路のさのゝ船橋かけてのみおもひわたるをしる人の

なき

大井河くたすいかたのミなれさほミなれぬ人もこひし

かりけり

いかはかりうれしからましおも影に見ゆるハかりのあ

ふ夜なりせは

秋きりの立わかれぬる君によりはれぬおもひにまとひ

ぬる哉

よそにては中くさてもありにしをうたて物おもふき

のふ今日かな

跡をたに草のはつかに見てしかなむすふはかりの程な

らすとも

なけきつゝかへすころもの露けきにいとゝそらさへし

くれけふらん

おもひねの夢よりほかにミちなきころをかよふま

ほろしもかな

わひぬれハ身をうき草のねを絶てさそう水あらハいな

むとそ思ふ

すかはらやふしみの里にみわたせハかすみにまかふを

はつせの山

琴のねに峯の松かせかよふらしいつれのおよりしくれ

そめけむ

としへたる松たになくハあさき原なにゝ昔のしるしな

らまし

大江山いく野の野邊の遠ければまたほシもミスあまの

橋立

遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥

哉

いその神ふるの山邊のさくら花うへけむ時をしる人そ

なき

春は猶われにてしりぬ花さかり心のとけき人はあらし

な

年をへて花にこゝろをくたくなおしむにとまる春ハ
なけれど

白雲とミゆるにしろしめ芳野ニよしのゝやまの花さか
りかも

よし野やま峯の櫻やさきぬらんふもとの里ににほふ春
風

かすミしく春のしほ路を見渡せはみとりをわくる沖つ
しらなミ

梅花たか袖ふれしにほひそと春やむかしの月にとハ、
や

むかし誰かゝるさくらの花をうへてよし野を春の山と
なしけむ

わけゆけはそれともみえず朝朗とをきそ春の霞なりけ
る

五月雨の空もとゝろに時鳥何をうしとかよたゝなくら
ん

こかくれてさ月まつともほとゝきすはねならハしに枝
うつりせよ

我宿のかきねや春をへたつらん夏きにけりとみゆる卯

花

みわたせは波のしからみかけてけり卯花さける玉川の
里

宿ことにはな橘そにほひける一木か末を風ハふけとも
秋きぬとめにはさやかにみえねとも風の音にそおとろ
かれぬる

誰きけとこゑたかさこにさをしかのなか／＼し夜をひ
とりなくらん

なつころもまたひとへなるうたゝねにこゝろしてふけ
秋のはつかせ

風ふけは枝やすからぬ木間よりほのめくあきのゆふ月
夜かな

いにしへの月かゝりせはかつらきの神はよるともちき
らさらまし

秋の夜の月にこゝろのひまそなきいつるを待と入をお
しむと

松風の音たに秋はさひしきに衣うつなり玉川のさと
散かゝるもみちの色はふかけれとわたれはにこる山河

の水
秋はけふくねなるくゝるたつた川ゆく瀬の浪も色かハ

るらむ

むかしたになをふるさとのあきの月しらすひかりのい
くめぐりをも

はなの色は雪にましりてみえずともかをたに匂へ人の
しるへく

ふるさとの雪ハはなとそふりつもるなかむるわれもお
もひきえつゝ

しくれゆへかつくたもとをよそ人は紅葉をはらふそて
かとや見む

なかくるもみち葉見れハからにしきたきのいともて
をれるなりけり

しくれつゝうつもる山の紅葉はをいかに吹よのあらし
なるらむ

かめのおの山のいはねをとめておつるたきのしら玉千
世のかすかも

大はらやをしほの山のご松はらはや木たつくれ千世の
かけミむ

さもこそはみやこのほかにやとりせめうたてつゆけき
草まくらかな

山吹もおなしかさしの花なれと雲井のさくらなをそ戀

しき

ミやこにてなかめし月のもるともにたひのそらにもい
てにけるかな

夕くれに物おもふ事ハまさるかとわれならさらむ人に
とはゝや

つゝめとも袖にたまらぬしら玉はひとをミぬめのなみ
たなりけり本マ、(りカ)

鶯の雲井にわひてなくこえをはるのさかとそ我はきゝ
つる

いかにしてしハし忘れん命たにあらはあふよのありも
こそすれ

いまはたゝおもひたえなむとはかりを人つてならてい
ふよしもかな

さしのほる朝日にきみをおもひいてむかたふく月に我
をわするな

我袖のなみたやにほの海ならむかりにも人をミるめな
ければ

いそのかミふるの神杉ふりぬれと色にハいてすつゆも
しくれも

うらミしな難波のみつにたつけふりこゝろからやくあ

まのもしほ火

しほかせのふきこぬあまのこひはし下におもひのく
ゆるころかな

さき初しときよりのちハうちはへて世はしるなれやい
ろのつねなる

大井川うかへるふねのかかり火におくらの山もなのミ
なりけり

忘るなよ程は雲井になりぬとも空ゆく月のめくりあふ
また

かすか山岩ねの松は君かためちとせのミかハ萬代そへ
む

身のうさをおけるしとけハふゆのよもとこほらぬは
なみたなりけり

761

正文在文庫

つかはされりよし、よくくこゝろえりて申せとの
御事にておはしましたり、めてたくかしく、

法皇様より此あんへうら諸家の筆の御しきし百枚御はい
りやうの御事にておはしましたり、あんへうらハ匂ひもい

かゝなから

勅方にて 仰付られりまゝ、かしく、

高松

松平大すみの守殿

おつほねさま

申給へ

762

吉貴公御譜中

正文在文庫

一御文 一通

一御手鏡御目錄 一通

右者從

法皇様

仰付、右御手鏡ニ御文御目錄寫相添、御書院方へ被渡

置り、右御本書者御記録所へ納置り様と被 仰出り、

以上、

朱力半 享保元年

申十月廿五日

比志嶋隼人

御記録所

763

正文在文庫

法皇様御點

一二十首和歌

右 陽和院様御歌

一 御卷物相附御書附 一通

右 陽和院様御自筆

一 御文 二通

右考

陽和院様御持被遊、御存生之内より御記録所江被納置
度爲被 思召由外付、右之通渡置外様と被 仰出外、
右御卷物御書附等大切成物ニ外條、慥可納置外、以
上、

朱力キ 享保元年 申十月廿五日 比志嶋隼人(龜男)
御記録所

764 吉貴公御譜中

同年十一月十一日松平飛騨守定英夫人離婚還芝第一、

765 正文在文庫

貴翰拜見仕外、

公方様益御機嫌能被成御座、奉恐悦外、然者今度 女御
入内之爲御祝儀、禁裏 御所方江以御使者御目錄之通被
獻外、依之御紙上之趣承知仕外、隨而如御目錄被懸御意、

忝次第奉存外、恐惶謹言、

朱力キ 享保元年 十一月十二日 水野和泉守 忠之判

松平薩摩守様

貴報

766 吉貴公御譜中

正文在華林寺

褐銅定香香爐有色、模様繪 一器

右旨趣者薩隅日三州之嗣君

繼豊公御實母依祈願所被寄進西霧嶋權現宮寶殿也、全可

備神前之狀如件、

享保元年丙申十一月十八日 嶋 備前 久達判

華林寺

767 全御譜中

同年十一月二十四日奉安

前大樹有章院殿御牌於薩府南泉院、

768 正文在文庫

爲 女御入(近衛尚子) 内賀儀、以使札目錄之通被贈之、懇篤之趣

令祝着^レ、嚴寒之節、弥勇健^レ、此方無^レ吳^レ、謹言、

^{朱力キ}享保元年 十一月廿五日 (花押 No.4)

薩摩中將殿

其邊弥安全^レ、此方無^レ吳^レ候也、

^{朱力キ}享保元年 十一月廿五日 (花押 No.4)

薩摩侍從とのへ

769 継豊公御譜中

正文在文庫

爲 女御入 内賀儀、以使札目錄之通被贈之、祝着之至^レ、弥平安^レ、此方無^レ吳^レ事^レ也、

^{朱力キ}享保元年 十一月廿五日 基熙

薩摩侍從とのへ

772 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲 女御入 内賀儀、以使札太刀・馬并目錄之通被贈之、令祝着^レ、其邊弥平安^レ、此方無^レ吳^レ事^レ、謹言、

^{朱力キ}享保元年 十一月廿五日 (花押 No.3)

薩摩中將殿

770 全上

爲 女御入 内賀儀、以使札太刀・馬并目錄之通被贈之、令祝着^レ、其邊弥安全^レ、此方無^レ吳^レ候也、

^{朱力キ}享保元年 十一月廿五日 (近衛家紋) (花押 No.3)

松平大隅守殿

773 全上

爲 女御入 内賀儀、以使札太刀・馬并目錄之通被贈之、悦入候、弥平安之由^レ、此邊無^レ吳^レ、謹言、

^{朱力キ}享保元年 十一月廿五日 基熙

薩摩中將殿

771 全上

爲 女御入 内賀儀、以使札目錄之通被贈之、令祝着^レ、

774 全御譜中

同年十一月二十六日吉貴獻^レ御馬二匹於

繼豊公御譜中
正文在琉球國國司

將軍家、是每述職一獻呈從三流例一也、

775 正文在文庫

今朝御馬二疋被獻之外、遂披露候處一段之御仕合外、恐
々謹言、

享保元年 十一月廿六日 正喬判

在口裏

松平薩摩守殿 阿部豊後守 正喬

776 吉貴公御譜中

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鱒一箱被獻之外、遂披露外處、一段之
御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 享保元年 十二月十一日 重之判

在口裏

松平薩摩守殿 久世大和守 重之

為年始之嘉儀、被差渡使簡、殊目錄之通贈給之、入念外
段令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

朱力キ 享保元年 十二月十五日 侍從 繼豊

謹上 中山王

778 全上

芳翰令披見外、當春元服被 仰付、御稱號御一字、且又
御腰物拜領、其上被任侍從名相改外、為恰以仲里按司、
太刀一腰・馬代黃金十兩并目錄之通贈給之、入念儀欣然
之至外、恐惶不宣、

朱力キ 享保元年 十二月十五日 侍從 繼豊

謹上 中山王

779 全上

芳墨令披見外、當春御目見首尾能相濟外為祝儀、以宮平
親方太刀・馬代并目錄之通被相贈之、入念儀令祝儀外、
恐惶不宣、

朱力キ 享保元年 十二月十五日 侍從 繼豊

謹上 中山王

780

全上
芳札令披見外、

公方様御代替御祝儀且又其元繼目之爲祝詞、被差上兩使
外之處、於江府段、結構被仰付、首尾能相仕廻歸國大悦
之由、而被差渡使翰、目錄之表贈給之、入念儀令怡悦外、
恐惶不宣、

朱力キ
享保元年

侍從
繼豐御判

十二月十五日
謹上 中山王

781

全上

芳翰令披見外、去冬

中將様被敍正四位外爲祝詞、被差渡小祿按司、太刀一腰・
馬代黄金十兩并目錄之表被相贈之、入念儀令祝着外、恐
惶不宣、

朱力キ
享保元年

侍從
繼豐御判

十二月十五日
謹上 中山王

782 全上

芳翰令披見外、其元無吳事之由珍重存外、於我等及相替
事無之外、然素從大清贈物之内織物品、給之、入念儀過
量之至外、恐惶不宣、

朱力キ
享保元年

侍從
繼豐御判

十二月十五日
中山王

783

吉貴公御譜中

吉宗公嗣位、故從先規、吉貴今茲十二月二十五日、
到執政松平紀伊守信庸之第、有可捧誓書之旨上、
然頃日依咳嗽、乃不果其事、

784

全上

正文在文庫

覺

一 明後廿五日之朝六半時、紀伊守宅に被相越 御代替之
誓詞可被致外、
一 誓詞前書ハ存念之通調可被申外、
一 罰文迄調可有持參外、

一判形八手前ニ有、血判ハ紀伊守宅ニ有可被致外、

一宛所老中六人座並之通可被調外、

以上

朱力キ
享保元年 十二月廿三日

朱力キ
松平紀伊守様より御渡被成外御書付

785 吉貴公御譜中

自同年年十二月二十六日三至同二十九日、霧島山頭火井

又大沸騰、日州高原・高崎・高城・都之城・小林・須木・

野尻・倉岡・綾・穆佐・高岡等之郷石灰大降、田畠甚埋

牛馬多死矣、

786 全上

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖五重到來欣覺外、委曲土屋相摸守可

述外也、

朱力キ
享保元年 十二月廿七日



薩摩

中將殿

787 吉貴公御譜中

自享保二年丁酉正月七日二至同十一日、霧島山頭火井

又大沸騰、降二火石劫灰一、日州高原郷内錫杖院及門前家

屋悉爲二灰燼一、高原・高崎郷民散二在諸方一、乃筆三記損失

之田畠燒亡之家屋等一、告二之於幕府一、

788 吉貴公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

享保二年正月十一日 吉貴御判

789 吉貴公御譜中

正文在文庫

追申、侍從へ不呈別書候間下向之事等宜預傳語外也、

新年之賀慶目出、其邊弥安全珍重、抑爲伸

大樹代始之賀儀、今春下向之事外、着府之節可得寬話外、

良久不能對顏之處、別の欣幸之至思給外、此方無吳事延（家）
久志
君追日成長外間、可令安心給外、謹言、

朱力年
享保二年 孟春十六鳥
(花押 No.4)

薩摩中將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

一今度 御判物并肝要之御書付等御國許に被差越外付、
中途之儀船路を被除、本坂越・美濃路・中國・小倉筋
被道、足輕を被相附外條、隨分入念道中休又ハ馬次、
其外少之間ゝる及御荷物に不離附添罷通、宿々ゝる者
寢間に差置、座敷之締方入念、宰領人并被相附外足輕
迄同宿に罷在、御荷物端近差置間鋪外、自然出火於有
之者早速宜場所に可持退外事、
一川之渡別ゝ可入念外、川水増外ハ、押ゝ不相越、心遣
無之樣可罷通外事、

一下之關より大里に渡り節者、猶以汐時をも致吟味、先
門司邊に罷渡、渚近乗行可申外、勿論少ゝる及心遣外
ハ、早速陸地に上り大里に可罷越外事、

右條々堅固可相勤外、肝要御用物外間、聊緩疎有間

鋪者也、

朱力年
享保二年 酉二月
(種子鳥久慈)
彈正

全御譜中

正文在文庫

追ゝ願王院僧正今度就下向、令傳語外間、着府之節
委細可申伸外也、

頃日漸及暖氣候、其邊弥可爲康健珍重思給外、此方各々
無恙候間、可令安心給候、延君追日成長、殊今年髮置色
直之節外故、來月下旬聊可催祝儀思給外、益平安佳期到
來之事、大悦不斜外、祝儀之日限等未相定候得共、先爲
通慶事如斯外、謹言、

朱力年
享保二年 仲春十六鳥
(花押 No.4)

薩摩中將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

肇歲之新禧、兩地同祝、弥平安珍重外、仍爲賀義目錄之
通贈之外、猶使者可申入外也、

松平薩摩守殿

久世大和守
阿部豐後守
井上河内守

一林七三郎様御右頬之御縁方御出、中段御右頬之敷居涯
御褥之方は御向着座、御條目御讀早る又本之通七三郎
様御退座、其時山城守様より御挨拶有之、何れも様御

吉貴公御譜中
正文在文庫

猶以熨斗目着用可被罷出外、以上、
御用之儀外間、明日五半時同氏大隅守同道可有登
城外、

朱カキ
享保二年 三月十日 戸田山城守

久世大和守

阿部豐後守

井上河内守

一御張臺より 出御、中段末之敷居涯は
御着座、其時戸田山城守様方御條目御弘メ之御取合有
之外時 上意早る 入御、
一右御刻限ニ御登 城、大廣間下段は御國持・御譜代御
大名、此外壹萬石以上之諸御大名一同ニ御張臺之方は
御向御列座、

吉貴公御譜中

同年二月二十五日獻建東武増上寺中
前大樹有章院殿牌殿前銅燈籠兩基、

朱カキ
享保二年 仲春廿一日 基熙

薩摩中將殿

全上
正文在文庫

寫

同年三月十一日、吉貴受ニ執政之奉書、俱ニ繼豐ニ
登レ營

吉宗公出ニ御大廣間、徵ニ侯伯、執政戸田山城守忠眞挨拶
撈之、示ニ關國政事之令條、詳ニ于後、

一明十一日御用之儀外間、大隅守同道朝五半時可致登

城旨、戸田山城守様より昨日御奉書御到來、御端書ニ

熨斗目着用と有之、御請例之通、

一右御刻限ニ御登 城、大廣間下段は御國持・御譜代御

大名、此外壹萬石以上之諸御大名一同ニ御張臺之方は

御向御列座、

一御張臺より 出御、中段末之敷居涯は

御着座、其時戸田山城守様方御條目御弘メ之御取合有

之外時 上意早る 入御、

一林七三郎様御右頬之御縁方御出、中段御右頬之敷居涯

御褥之方は御向着座、御條目御讀早る又本之通七三郎

様御退座、其時山城守様より御挨拶有之、何れも様御

正文在文庫

武家諸法度 寫

- 一文武忠孝を勵し、可正禮義事、
- 一參勤交替之儀每歲可守所定之時節、從者之員數不可及繁多事、

- 一人馬兵具等分限に應し可相嗜事、
- 一新規之城郭構營堅禁止之、居城之隄壘石壁等敗壞之時者、達奉行所可受差圖也、櫓屏門以下者如先規可修補事、

- 一企新規、結徒黨成誓約并私之關所新法之津留制禁事、
- 一江戸并何國にても不慮之儀有之といふとも、猥不可懸集、在國之輩者其所を守り、下知を可相待也、何所にて雖行刑罰、役者之外不可出向、可任檢使之左右事、
- 一喧嘩口論可加謹慎、私之諍論制禁之、若無據子細有之者、達奉行所可受其旨、不依何事令荷擔者、其咎本人よりおもかるへし、并本主之障有之もの不可相抱事、

附 頭有之輩之百姓訴論者、其支配に令談合可濟之、
有滯儀者評定所に差出之、可受捌事、

- 一國主、城主、壹萬石以上近習并諸奉行、諸物頭、私不

可結婚姻、總ふ公家と於結縁邊者、達奉行所可受差圖事、

- 一音信贈答嫁娶之規式、或饗應或家宅督作等、其外萬事可用儉約、總ふ無益之道具をこのミ、不可致私之奢事、
- 一衣裳之品不可混亂、白綾公卿以上、白小袖諸大夫以上免許之事、

附 徒若黨之衣類者、羽二重・絹・紬・布・木綿、弓鐵炮之者者紬・布・木綿、其下に至りてハ萬に布木綿可用事、

一乘輿者、一門之歷々國主城主壹萬石以上并國大名之息、城主及侍從以上之嫡子、或年五十以上許之、儒醫諸出家者制外事、

一養子ハ同姓相應之者を撰ひ、若無之におゐてハ由緒を正し、存生之内可致言上、五十以上十七歲以下之輩及末期雖致養子、吟味之上可立之、縱雖實子筋目違たる儀不可立事、

附 殉死之儀弥令制禁事、

一知行之所務清廉沙汰之、國郡不可令衰弊、道路・驛馬・橋舟等、無斷絶可令往還事、

附 荷船之外大船ハ如先規停止事、

(采) (挿入)
「雜抄」

一 諸國散在之寺社領、從古至于今、所附來者不可取放之、
勿論新地之寺社建立弥令停止之、若無據子細有之者遂
奉行所、可受差圖事、

一 萬事應江戸之法度、於國々所々可遵行事、
右條々堅可相守之、當家代々潤色之故無所改正、仍用
天和法制者也、

享保二年三月十一日

一 古切支丹宗類族之者者、手札之面并帳面共々古切支丹
類族ト不及致肩書、當時之宗旨ヲ可相記々、

一 一向宗之儀、寶永三年戊改以後、頭取、本尊・書物・
佛具持々相究々者本人并家内男女拾五才以上之者、手
札肩書被仰付、前一向宗と肩書被仰付々、

一 嶋津備中殿・嶋津周防殿・嶋津因幡殿・嶋津若狹殿・
同大學殿・同圖書殿・同筑後殿此七人其夫婦・嫡之夫
婦手札(御免脱カ)々事、

一 獨禮之面々夫婦手札御免、尤獨禮ニ有無之人ニ有表、
妻獨禮格之人ニ有ハ、縁與之内夫婦共手札御免々
事、

一家格又ハ御役ニ付、獨禮之人其家妾服ノ實母者(マツ)可爲手
札事、

一 嶋津備中殿・同周防殿・同因幡殿二男末子迄息女ニ
有表家内ニ被罷居々内者手札御免々事、

一 御城代・御家老・若御年寄・大御目附之御役ニ付有、
其身夫婦手札御免、御役御免以後者可爲手札事、

一 萬石以上之面々、其身夫婦、嫡子夫婦、隱居後室迄も
御免之事、

一 御一門方・御家老・一所持・一所持格・寄合・寄合並・
御側御用人・表御用人・御用人格・御近習役迄ハ、宗
門手札改帳内諸證文等迄役人可致印形、其外之面々ハ
可爲直印事、

一 右面々直子出生々ハ、近所之士不及證判、宗門改帳書
載役人印形ニ有可差出々、

一 嶋津備中殿・同周防殿・同因幡殿・加治木家跡家來、
川上・兩町田・別府・中村・肥後・近藤・栗川・矢野・
新納・曾木・日野拾二家、其身夫婦并嫡子夫婦迄ハ、
手札帳面共ニ年付御免々、右之者共娘縁與之儀、御城
下士同前被仰付、俗生付迄も被成御免々事、

一 右四家家來、伊集院八兵衛・安山三左衛門・梅元武右

衛門・町田七左衛門・緒方伊右衛門跡・中村鐵五郎・
樺山助太夫・詫摩勘兵衛・浦川左右衛門・川上慶左衛
門・比志嶋彦兵衛・本多源右衛門拾貳家、延享三子年
依願前條之拾二家差次之格被仰付、手札帳面并縁與之
儀可爲同斷事、

一 嶋津備中・同周防殿・同因幡殿・加治木家跡・嶋津若
狹殿・嶋津大學殿・同圖書殿・嶋津筑後殿家中土娘并
内女札之者、諸士・諸座付士・外城衆中ニ致縁與ヲシテ節
者、帳面迄致年付、手札之面々者年付相除、俗生付迄
之可相記事、

一 梶山邊路番人として嶋津筑後家來百拾三家内被召移置
(北諸縣郡)
外處、遠方山中之故傍輩中之娘縁與無之付、依願延
享五辰年ハ二拾ケ年、社家寺門前町濱在郷之者共之娘、
乍御法違、右年限縁與被成御免外事、

一 大崎之内(彌生郡)ひし田村ニ都之城持留地有之、嶋津筑後家中
十三拾壹家内罷居外、浦人同様ニ間々唱外儀有之、依
願都之城菱田與と手札被仰付外事、

一 達貴聞縁與被成御免外諸士ハ者、足輕・御小者・御中
間・御書院仕坊主又者家中土書下名字之者之娘、内女
札之者縁與御免無之外、乍然本妻離別又者死後罷成、

右躰之者之娘内々ニ召置妻ニ致置、嫡子且又二男以
下致出生外ハ、母札御免可被貳百石以上之面々も右
格式之娘縁與御免無之外事、

但 母札ニ召置年付親之名何方座付家中之譯、年可相
記外、親相果外ハ、兄弟又者家部之者之名可相記
外事、

一 奥女中首尾克方ニ御暇被下外女中之儀、御次以上相
勤外者ハ、人家來并町濱在郷寺門前之者たちとい得共、
士縁與御免之事外間、御暇被下外砌、於參先新札申請
外様、納殿役人ハ證文可出外事、

但 俗生付、年付不及外、御□所ニ相勤外者ハ、首尾
克御暇被下外も、士ニ縁與御免無之外事、

一 代々小番相勤外者之子共、幼稚ニ有之御番不相勤内者、
家來共下人等可書記外、御番相勤外節者御格之通家來
名字付ニ可相記外事、

一 志布志衆中新地并川原田毘沙ケ野大河内邊路番人共、
山中故致縁與者無之付、町人・百姓・社家・寺門前
者縁與被成外事、
(御免脱カ)

一 甕嶋之儀者、一嶋ニ召置地方ニ相替、入來外者及無之、衆
中相當之縁與難調外付、嶋中百姓・浦濱・社家類互之

縁與御免之事、

一高岡・倉岡・綾・穆佐四ヶ所之儀、女少場所ニあり、衆中共相當之縁與不相調、其上逼迫者共ニ内場外城方懸る之縁與尚以難成、諸事差支血筋目斷絶ニ付、日雇ニ召置り女共腹に出生之子、乍御法違、直子札之願申出、明々御免之事り得共、元文五申年御法違之儀り故、自今以後不被成御免段被仰渡置り、然共右之通女少場所之儀り故、町人百姓之娘縁與之願申出りハ、御吟味之上被成御免儀も可有之り旨被仰渡置り間、右御免之者者地頭證文之上、出生之子、直子札可爲取事、

一野尻之内紙屋村之儀、他領境目ニ欠落者之節、俄人數召寄り儀度々有之り故、衆中人數漸々相減り者、御用之支相成善り、然處山中之在所、殊極貧者共ニ傍輩中之縁與不相調、無妻ニ罷居り付、依願野尻并小林中百姓・野町人之娘縁與被成御免り事、

一小林衆中木浦木番人之儀者、麓方遠方故、縁與之儀前條同斷、

一土中に百姓・町浦濱人・社家・寺門前者之娘、支配頭證文を以年季抱置り内、何方之者に取合り共、出生之子ハ抱主人方に可相附事、

但夫婦者免證文ヲ以、年季抱置り内、子出生りハ、

抱主人に可相付り、夫婦者之内、夫を年季抱置、妻者本在所に差置、子共致出生りハ、其子母方に可相付り、妻を年季に抱置、夫者本在所に罷居、若右之妻ニ本夫之子共爲致出生り儀有之りハ、抱主人に可相付り、且又抱主人に被付下り子共、父百姓・町人・浦濱、社家・寺門前者ニありハ、其子下入札可申付り、又者諸士之家來札之者名字付之者ニありハ、出生之子及父同前名子ニ可相記り、乍然抱主人之下人名字付、御免無之格之人ニありハ、尤可爲生之子、右ニ可相準り、

一苗代川李欣連(伊)・仲守顯(伊)・朴春勝・仲主山事者、先年伊(伊)十院衆中之格ニ被仰付、右四人之者共嫡子(ウマ)を迄衆中之格ニ被召成、二男方此中之通ニ可差置り、

(補註、高麗人傍註ハ苗代川資料ニヨル)

一苗代川に百姓・浦濱町其外之女人縁與者御免被成り、苗代川之女脇方に縁與として出り儀者堅停止ニあり事、

但御奥ニ御次以上之御奉公相勤、首尾克御暇之女ハ、御差圖次第何方に縁與御免ニあり、其節者御納殿役人證文之上、手札可相渡り、

一 公儀流人始る札取外者、預主に取次、御用人の證文

見届、手札可相渡外、本國何方何某預手札可致片書、

御預替之節も御用人證文見届手札可相直外、

一流人御赦免、或死失、或欠落者等手札取揚外節及御用

人證文ヲ以可取揚事、

一 依御勘氣、士・外城衆中并足輕・御小者・御中間・御

書院仕坊主被召放外者、手札之儀親類之家内又者何

方ニ及其身望次第可爲取外事、手札之面帳面迄、名

字相除可致年付外、妻子又者其者之家内人數迄及可爲

同斷事、

一 諸士并外城衆中、遠流被仰付外者之跡家内之儀、親類

家内不及召入外條、跡之通ニ手札可申請外事、

但 座付者・人家來・社家寺門前・百姓・浦濱町人等

遠流被仰付外者、親族無御構由被仰渡外者、右ニ

準シ帳面相調、手札可申請外、

一 遠流人私遠流之者、手札取揚様可爲同斷事、

一 遠流被仰付外者共、於配所之嶋、手札申受事外間、古

札可取揚事、

但 士被召放遠流被仰付外者者、札面名字相除、年付

可相記外、士不召放者ハ、本之姿ニ名字可相記外、

一 遠流人私遠嶋人御赦免手札申請外儀、可爲同斷外、

但 遠流人島ニ申請外古札可差出外、

一 遠流御赦免、又者出牢被仰付外者、手札之面者其者共

成行之格ニ應シ可相記事、

一 牢込之者、何分に成行仰渡無之者者、親類方ニ手札

取置可申外、尤右妻子家内人數及親類手札可爲取事、

但 親類無之者者其者支配之方手札爲取様可致外、

一 士并外城衆中、依科ニ牢込被仰付置外者之娘、脇方に

縁與致居、初手札相直外者有之、片付方不被仰付内

ニ外ハ、手札取方之儀可得差圖事、

一 札之面、前一向宗と肩書有之外を削捨外者、科銀壹枚、

一 手札取後外者、一改ニ科錢壹貫文ツ、

一 右同失ヒ外者、證據於有之者、科錢貳百文、證據於無

之者、科錢五百文、盜ニ逢外者、男女違之手札取外者、

科錢五百文、

一 火災其外不意之災ニ手札捨外者、科錢五百文、

但 證據有之者、科錢申付間數外、若證據於無之者可

爲科物外、

一 養子ヲ直子札申請外者、科錢可爲貳貫文事、實父之科

錢五百文、

一 百姓・町浦濱人・寺門前之娘、借銀利分之方_レ内_ニ、

亦召仕置_レ儀御禁止之事_ニ、若右躰之儀_ニ亦出生之子於有之者、母方_ニ可相付_レ、右躰之儀_ニ御法樣違之事_レ條、兩親_ニ科錢壹貫文ツ、可申付_レ、

但 百姓・町浦濱人・寺門前之者_ニ内_ニ、亦日雇_ニ致

置、諸士之下女_ニ取合、子共出生致_レハ、出生

之子父方_ニ可相付、右式之儀_ニ御法樣違_レ間、兩

親_ニ科錢壹貫文ツ、可申付_レ、

一 百姓・野町浦濱人并寺門前者娘、免證文なし_ニ召仕置、

子出生_レハ、兩親_ニ科錢壹貫文ツ、

一 百姓之子御法違之者、内_ニ致養子_レ者、兩親共科錢貳

貫文、但右之子_ニ百姓_ニ可返_シ付_レ事、

一 百姓并野町之者手札質物遺置_レ者、科并杭七拾本、

一 慶賀并死苦之者_ニ百姓致縁與_レ者、雙方共科銀壹枚ツ

、

一 慶賀・死苦・行脚者手札横印_レ事、

但 直印取來_レ慶賀者、先規之通_ニ可爲取_レ、慶賀下人

之儀_ハ可爲横印_レ、

一 江戸・京・大坂居付之面_ニ者、手札_ニ不及、宗門人數

付帳迄差出、札改方格_ニ致置、後年改之節帳内引合

ノ様可有之事、

一 依科移者被仰付置_レ者之娘、本在所_ニ縁與爲致間敷事、

799

(挿入)

將軍吉宗公御代武家諸法度

一文武忠孝ヲ勵シ可正禮義事、

一 參勤交替之儀、每歲可守所定之時節、從者之員數不可

及繁多事、

一人馬兵具等分限_ニ應シ可相嗜事、

一 新規之城郭構營堅ク禁止之、居城之隄壘・石壁等敗壞

之時_ニ達奉行所可請差圖也、櫓屏門以下者、如先規可

修甬事、

一 企新規結徒黨成誓約并私之關所新法之津留製禁之事、

一 江戸并何國_ニ亦不慮之儀有之と雖、狠_ニ不可懸集、

在國之輩_ハ其所ヲ守、下知ヲ可相待也、何所_ニ亦雖

行刑罰、役者之外不可出向、可任檢使ノ左右事、

一 喧嘩口論可加謹慎、私之誣論制禁之、若シ無據子細有

之_ハ、達奉行可請其旨、不依何事令荷擔者_ニ其咎本人

ト重ル可シ并本主之障有之者_ニ不可抱事、

附 頭有之輩之百百姓_(町)訴訟者、其支配へ令談合、可濟

之、有滯儀者評定所へ差出之、可請捌事、

一國主城主壹萬斛以上近習并諸奉行、諸物頭私不可結婚
姻、摠テ公家ノ於結緣邊ハ、達奉行可請差圖事、
(所聽)

一音信贈答嫁娶ノ規式饗應、或家宅營作等、其外萬事可
用儉約、摠テ無益之道具ヲ好ミ不可致私之奢事、

一衣裳之品不可混亂、白綾公卿以上、白小袖諸大夫免許
之事、
(以上聽)

附 徒若黨之衣類者羽二重・絹・紬・布・木綿、弓鐵
炮之者、紬・布・木綿、其下ニ至リル者、萬々布・
木綿可用事、

一乘輿者一門之歷々、國主城主一萬石以上并嫡子或歲五
拾以上許之、儒醫諸出家者制外事、

一養子ハ同姓相應之者ヲ擇ヒ、若於無之者由緒ヲ正シ、
存生之内可致言上、五拾以上拾七歲以下之輩、及末期
雖致養子、吟味之上可立之、縱雖實子筋目違タル儀不
可立事、

附 殉死者弥令制禁事、

一知行之所務清廉沙汰之、國郡不可令衰弊、道路・驛馬・
橋船等無斷絶可令往還事、

附 荷船之外大船者如先規停止之事、

一諸國散在之寺社領、從古至于今、所付來者不可取放之、

勿論新地之寺社建立愈令停止之、若無據子細有之者、
達奉行可請差圖事、
(所聽)

一萬事應江戸之法度、於國々所々可遵行事、

右條々堅可相守之、當家代々潤色之故、無所改正、
仍用天和法制者也、

享保二年三月十一日

800

繼豊公御譜中

享保二年丁酉三月十一日、吉貴應ニ執政之奉書ニ同ニ伴繼
豊一、而登レ登、

吉宗公出ニ御大廣間一、徵ニ侯伯・譜代及萬石以上一、一同
列居、執政戸田山城守忠真挨拶而示論闔國政務之條目一
謂之武家諸法度令般、見用天和之法令云云、委見ニ于吉貴之譜中一、

801

吉貴公御譜中

同年三月十六日吉貴奉レ賀ニ

吉宗公將軍 宣下一、招ニ執政土屋相摸守政直・久世大和
守重之、若年寄森川出羽守重興、奏者牧野因幡守英成、

寺社奉行松平對馬守近治、御留主居松前伊豆守、大目附
内藤日向守、町奉行大岡越前守、勘定奉行大久保下野守、
(正考) (忠) (忠) (忠) (忠)

吉貴公御譜中
寫正文在文庫

寫

作事奉行久松豐前守(定持)、普請奉行朽木丹後守(定感)・渡邊下總守(卿)、佐渡奉行河野勘右衛門等於東武芝第一、備盛膳(通重)一奏二猿樂一、松平因幡守定達・酒井修理大夫忠音・牧野備後守成央・鳥居丹波守忠利・立花出雲守種甄及戲下故舊之士數十輩來而被待之、同十八日亦奉賀一宣下、招松平越前守信清・織田美濃守信就・同備後守信房・伊東修理亮祐永・龜井隱岐守茲親・秋月長門守種弘・織田播磨守秀俊・同紋次郎信庸及戲下之士數十輩於芝第一、又備盛膳一奏二猿樂一、酒井忠音・同飛驒守忠(忠海)・牧野成央・立花種甄及戲下故舊之士數十輩來而被扶三奔走一、同二十二日亦奉賀一宣下二招三細川越中守宣紀・松平右近將監清武・稻葉丹後守正知・松平遠江守忠喬・阿部伊勢守正縁・仙石越前守政明・小笠原遠江守忠遙・津輕右京亮信興・仙石信濃守政房及戲下之士數十輩於芝第一、又備盛膳一奏二猿樂一、本多若狹守利久・松平三郎助定儀・島津式部・山元縫殿其外戲下故舊之士數十輩來而待之被扶三奔走一、

今月十一日依御奉書

御兩殿様御登 城被遊外處、御條目御弘メ有之、其節御座配迄表別紙繪圖相記差越外、御弘メ之御條目老武家諸法度ニ由外、右之寫其後國持御大名様ニ老御順達有之外付、寫壹通差越外、右御條目之儀老末々迄讀聞せ外ニ老不及事外、專御仕置之事外得老、御城代・御家老・若御年寄・大御目付御役迄老、於御家老座御右筆ニ讀せ承知仕外様可申越旨 御意外、以上、

但 右相濟御記錄所ニ被相渡儀ニ外ハ、例之通被申渡ニ可可有之外、

享保二年 三月廿五日

比志島隼人(龍房)
種子嶋彈正(久甚)

嶋津大藏殿(久明)
嶋津内記殿(久貫)
嶋津將監殿(久当)

(表紙)

吉 貴 公 自享保二年四月
 繼 豐 公 至同 三年八月

追 舊 記 雜 錄 卷五十三

繼豐公御譜中

正文在文庫

一筆致啓上候、從舊冬筑前領・長門領之沖ニ唐船少々相見候處、當二月比方追々船數増りゐ、此節悉十三四艘參儉、私領之沖ニ漂流仕り、依之從此間番船等差出、切々追せ申事外、此段爲可得 御意如是御座外、盡可申達外得共、漂泊之場所も不定候故、旁不能其儀外、恐惶謹言、

朱力平
 享保二年 四月三日

小笠原右近將監
 忠雄判

松平大隅守様

人々御中

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆致啓上候、從舊冬筑前領・長門領之沖ニ唐船少々相見候處、當二月比方追々船數増りゐ、此節悉十三四艘參儉、私領之沖ニ漂流仕候、依之從此間番船等差出、切々追せ申事外、此段爲可得貴意如是御座外、盡可申達外得共、漂泊之場所も不定外故、旁不能其儀候、恐惶謹言、

朱力平
 享保二年 四月三日

小笠原右近將監
 忠雄判

松平薩摩守様

人々御中

全上

謹奉呈一翰候、當地之儀、京錢通用被 仰付被下度由、
 去年從豐見城王子・三司官以願書申上趣有之、被成下御免難有仕合奉存外、此等之御禮爲可申上、大城親雲上指上申外、依之目錄之表進上之仕候、誠惶誠恐敬白、

朱力平
 享保二年 卯月五日

中山王
 尚敬判

進上中將様

全上

謹奉捧愚札候、

(家様)

有章院様去年 薨御、寔以驚人奉存外、依之爲可奉伺御

機嫌差上川平親方、目錄之表進上之仕候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ

享保二年

卯月五日

中山王

尚敬判

進上中將様

807

繼豊公御譜中

正文在文庫

謹奉捧愚札候、

有章院様去年 薨御、誠以驚人奉存外、因茲爲可奉伺御

機嫌指上川平親方、目錄之表進上之仕候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ

享保二年

卯月五日

中山王

尚敬判

進上侍從様

808

吉貴公御譜中

正文在文庫

今朝長壽大官香一箱、壽帶香・龍涎香一箱、香餅一箱、

丸熨斗一箱被獻之外、遂披露候處一段之御仕合外、恐々

謹言、

朱力キ

享保二年

四月十三日

重之判

在口裏

松平薩摩守殿

在口裏

久世大和守

重之

809

全上

明十五日例月之御禮無之外條不及登 城外、以上、

朱力キ

享保二年

四月十四日

戸田山城守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平薩摩守殿

810

吉貴公御譜中

同年四月十八日、臣桂織部久祐之二男桂權九郎勝之受二

幕府之允容一、爲二戲下之士三枝丹波守之婿養子一、

吉貴公御譜中

正文在南泉院

屋敷目錄

寺地三拾七間半
五拾四間六反七睦拾五步

南泉院

大豆六表貳斗六升三合

高ニして貳石四斗六升壹合四夕六才

右寺地享保二年酉四月、郡奉行大迫彌兵衛・餅原十郎左衛門竿相究差出外帳面之通、同十八日御家老衆任御引付

令支配外、以上、

享保二年丁酉四月廿二日

堀甚左衛門(飛鳥)㊤

嶋津主計(久慈)㊤

新納左京(久慈)㊤

菱刈孫兵衛(久慈)㊤

雜目裏印同

正文在南泉院

屋敷目錄

寺地拾貳間半
拾八間七睦拾五步

觀樹院

大豆貳斗六升三合

寺地拾貳間
拾八間七睦六步
吉祥院

大豆貳斗五升貳合

寺地拾壹間
三拾間壹反壹睦

實相院

大豆壹表三升五合

合大豆貳表貳斗

高ニして九斗三升七合五夕

右若南泉院脇寺寺地、享保二年酉四月郡奉行大迫彌兵衛・餅原十郎左衛門竿相究、差出外帳面之通被下之旨、同十八日御家老衆任御引付令支配外條、向後勤行等無懈怠可被相勤外、以上、

享保二年丁酉四月廿二日

堀甚左衛門(飛鳥)㊤

嶋津主計(久慈)㊤

新納左京(久慈)㊤

菱刈孫兵衛(久慈)㊤

雜目裏印同

吉貴公御譜中

正文在文庫

今朝御檜重一組被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、

恐く謹言、

朱力キ
享保二年 四月廿五日

正岑判

在口裏
松平薩摩守殿

在口裏
井上河内守
正岑

814

繼豊公御譜中

同年四月二十九日見レ修ニ

有章院殿一回忌景之法會於増上寺、因侯伯四品以上束帶

而豫參、是故繼豊稟ニ執政井上河内守正岑一蒙ニ允容一、束

帶而勤ニ豫參ニ 当繼豊 家繼公御代之時屏ニ進官位一、故潛以ニ此事一乃至茲一也

815

吉貴公御譜中

正文正文庫

今朝鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐く

謹言、

朱力キ
享保二年 五月朔日

正岑判

在口裏
松平薩摩守殿

在口裏
井上河内守
正岑

816

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物數十到來欣覺候、委曲阿部豐後
守可述外也、

朱力キ
享保二年 五月四日



薩摩

中將殿

817

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆致啓上候、最前申達外唐船之儀、筑前領・長門領・
私領申合、常く差出外番船老不及申、關船など大船相交、
船政多出之、唐船を地方を取巻、不滯留様ニ可仕外、尤
取巻外共致出船候船路を取切り品ニ有老無之、右唐船警
固之様子見外有、早く出帆いたし外ハ、其通ニ有差置、
藍嶋・六連嶋邊唐船か、り外ハ、三領一同に申合、警
固之船差出之、若筑前領か長門領之内に片寄、二領も程
遠く外ハ、其領主計外船を出し、警固可申付外、右之
段近國にも申通、領分境ニ番船を出し、唐船相見へ外ハ
、早速警固之船を出し外之様用意仕、面く手寄之浦嶋に

繼豊公御譜中

正文在文庫

一筆致啓上候、最前申達外唐船之儀、筑前領・長門領・

吉貴公御譜中

寫正文在異國座

舊冬以來唐船數艘所々江漂流申外、面々領分江漂着之節
若番船其外追船等増之、唐人及目たて外程に稠敷追拂外
様に入念可被申付外、以上、

朱力キ

享保二年

五月

も船を出置、若立戻外ハ、早々追拂可申候、尤鐵炮大筒
及用意、萬一唐人も手むかひり節若船を打つふしりても
不苦外、逃散外若船を留りニハ不及外由、委細之御書付
先月廿一日御用番久世大和守殿に家來之者被召呼御渡外
付外、早速差越之、昨日相達致承知外、此段爲可得貴意
如斯御座候、恐惶謹言、

朱力キ

享保二年

五月五日

松平薩摩守様
(島津吉貴)

人々御中

(小城會主)
小笠原右近將監
忠雄判

吉貴公御譜中

私領申合、常々差出外番船若不及申、關船杯大船相交船
數多出之、唐船を地方も取巻、不滯留様可仕外、尤取巻
外共出船いたし外船路を取切り品ニ若無之、右唐船警
固之様子見外、早々致出帆外若其通ニ差置、藍嶋・
六連嶋邊唐船かゝり外ハ、三領一同申合警固之船差出
之、若筑前領敷長門領之内に片寄、二領も程遠く外者、
其領主計外船を出し警固可申付外、右之段近國に表申通、
領分境ニ番船を出し、唐船相見へ外者、早速警固之船出
し外之様用意仕、面々手寄之浦嶋に及船を出置、若立戻
外若早々追拂可申外、尤鐵炮大筒及用意、萬一唐人も手
むかひり節若船を打つふしりても不苦外、逃散外ハ、船
を留候ニ若不及外由、委細之御書付先月廿一日御用番久
世大和守殿に家來之者被召呼、御渡外付外早速差越之、
昨日相達致承知外、此段爲可得御意如是御座外、恐惶謹
言、

朱力キ

享保二年

五月五日

松平大隅守様
(島津維忠)

人々御中

小笠原右近將監

忠雄判

同年五月十日、執政井上河内守正岑招留主居之者、以筆記論曰、舊冬以來唐船數艘漂流所々、有漂我領土中、則可追之矣、是以嚴下令尋常不往還肥前長崎港、大清之商船若來漂國中、則出舟師示可追逐之事上、

821 正文在文庫

一筆致啓上候、最前申達此邊漂流之唐船爲追拂、筑前領・長門領・私領申合、去十三日警固之船數艘差出追拂候得共、打續天氣惡敷、西風烈々早速出船難成舩相見外處、度々追拂付付、段々船數減、相殘外舩三艘未遙遠洋中致漂流、此節若三領近所之海上不殘退散之事外、因茲領内之嶋々番船差置、其外之船共昨日引取申候、右之趣爲可得貴意如是御座候、恐惶謹言、

朱カキ
享保二年
五月廿五日

小笠原右近將監
忠雄判

松平薩摩守様
人々御中

822 吉貴公御譜中

同年六月十一日 上使戸田山城守忠眞、來櫻田第一賜告

於吉貴、如先賜時服百領・白銀千枚、吉貴即日登營奉謝謁
吉宗公、乃賜龍蹄一匹、而後賜雄刀米國光代式一腰、是將軍家新依嗣位也、今日芝第爲居守之家老島津内記久貫奉拜台顔、

823 吉貴公御譜中

正文在文庫
今朝琉球布十卷并砂糖漬天門冬一器・赤貝鹽辛一器・泡盛酒二壺被獻之、遂披露候之處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱カキ
享保二年
六月十八日

正岑判

松平薩摩守殿
在口裏
井上河内守
正岑

824 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御念いらせられ御事よろしく申あけまいらせり、めてかしく、

御ふミ下されり、まつくことの外あつさニ御座りへと
も、

公方様御機嫌よく御座被遊、御めてたくおほしめし被成
りよし、今日ハおくかたへ土用御たつねとして、御目錄
の通御拜領被成、誠ニ御懇の御事、御手まへさまかたし
けなく思しめし被成りよし、御禮と御座りて、文のやう
何もよろしく御さた申あけ参らせへくり、かしく、

朱ガキ
享保二年六月二十三日

お

ときわる

ミむろ

たか瀬

外山

田澤

松平

御返事
さつま守様
人、御中

825

全上

此よし何もよく心得りて申せとの御事ニ御座り、返

くめてたくかしく、

文被下り、まつく

一位様御機嫌よく成らせられ御事めて度思しめし被成り

よし、さきはとは

公方様より奥かたへ土用御尋、御目錄の通拜領仰付られ
りよしりて、かたしけなく覺しめしなされ、御禮おふせ
上られり文のやう披露いたしまいらせりへハ、御念入り

御事と御満足ニ思しめしり、めてたくかしく、

朱ガキ
享保二年六月二十三日

お

岩倉

松平
薩摩守様

御返事人、御中

梅園

826

全上

まいらせられり御事ニ御さり、なにもよく申せとの

御事ニ御さり、めてかしく、

御ふミ下されり、まつく

公方様

一位様御機けんよくならせられ、めてたく思しめし被成

りよし、さてハ御手まへ様ちかくニ御當地御立被成り

付、御もくろくのとをりまいらせられりへハ、御禮被仰

上よろしく申上まいらせりへハ、御念入まいらせられり

御事、御まんそくニ思しめしり、まことにいく萬々年も

とめてたさ御いわるあそハしり御事までり、かしく、

朱カキ
享保二年六月廿三日

まつ平

薩摩守様

人々御中

御返事

いわ倉

梅その

お

827

全上

返くことのほかのあつきに御座りまゝ、御道中之内すいふんく御障なきやうに、なにもよく申せとの御事ニ御さり、かしく、

一位様より申せとの御事に御座り、まつくことのほか御あつきに御座りへとも

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、めてたさ弥御手まへ様かわらせられ御事も御さなされりて、めてたくおほしめしり、さてハ近日御國元へ御たち被成りよし、めてたさ萬々年もと思しめしり、それニ付、此御もくろくのとをり御いわるあそはしりてまいらせられり、まことにちとせ萬代までも御入國被成り様にとと思しめしり御事までにおはしましり、めてたくかしく、

朱カキ
享保二年六月廿三日

お

828

まつ平

薩摩守様

人々御中

いわ倉

梅園

吉貴公御請中

同年六月二十五日吉貴發東武芝第一、次東海之驛、七月十二日到伏見、同十四日着大坂、同十六日發大坂、取陸同十九日到播州奈波津、直駕船同二十五日著豐州大里、經九州之驛、八月十五日還鹿城、乃遣謝使平田新左衛門正房於東武、

○去歲四月

大樹家繼公薨、故今茲七月、中山王尚敬之弔使川上親方齋、挽書來薩府、乃使伊地知孫右衛門獻之於東

武之 柳營上

○同年鎮西巡見之

上使妻木平四郎・大島采女・小倉忠(賴隆)(義敬)

右衛門七月十九日自肥後水俣來薩州出水宿焉、巡

見我國、家老肝付主殿兼柄受吉貴之旨、豫到于茲

迎之、用人相良權太夫長矩・谷山角太夫純房、留守居

森川利右衛門武宣・木脇賀左衛門祐盛等到水俣迎

之、兼柄者先上使二日經巡見之諸所、長矩・純

房・武宣・祐盛者從上使、經過國中、其外預

事者多焉、同二十日 上使留_二滯米之津_一、二十一日阿久根、二十二日水引郷内大小路、二十三日見_二芹箇野金山_一、還_レ駕而駕_二船向田_一、(川内)派_レ流宿_二宮之城_一、二十四日山箇野金山、二十五日帖佐郷内脇元、(崎長郡)二十六日到_二廳府_一、妻木氏者入_二客屋_一、大島氏者次_二市驛_一、家老島津將監久當・肝付兼柄到_二 三上使之邸_一、(鹿兒島)勞_レ之、二十七日 上使見_二谷山郷錫山_一、還_レ駕而宿_二松崎驛_一、(掛宿郡)二十八日喜入、二十九日到_二山川郷_一、船而欲_レ涉_二大隅國根占郷_一、(肝國郡)然風不順故留_二滯于茲_一、同二日 上使駕_二船山川灣_一、(曾於郡)著_二大根占鳥濱_一、直取_レ陸到_二大始良_一、三日日州志布志、四日宿_二寺柱_一、(北諸眞郡)於是兼柄又含_二吉貴之旨_一、到_二 三上使之邸_一、告_レ多日經_二過領國之勞_上、五日 上使發_二寺柱_一入_二伊東修理亮祐永之領_一、長矩・純房・武宣・祐盛等護_二送領國之境_一、 上使旅具僕從等、無_二礙滯_一入_二他邦_一、各告_レ別歸_レ府、

○先_レ是上_レ言_二遣於菟女_一於薩府_一、幕府_上、受_二允容_一、執政久世大和守重之被_レ傳_レ之、故今茲八月三日菟女發_二東武_一、同十月二十三日著_二廳府_一、在_二西田之第一_一、

御狀令披見_レ、殘暑強_レ得共、貴殿弥御無吳之旨珍重存_レ外、於我等_レ承道中無恙令旅行、一昨十四日大坂_レ致着_レ外、爲祝儀目錄之通饋給之、被入念儀存_レ、隨_レ其元何_レ表別條無之旨令大慶_レ外、猶期後喜之時_レ、恐_レ謹言、

朱力キ 享保二年 七月十六日 薩摩守 吉貴御判

松平大隅守殿 御報

吉貴公御譜中 正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻_レ之外、遂披露_レ處一段之御仕合_レ外、恐_レ謹言、

朱力キ 享保二年 八月三日 戸田山城守 忠眞判

久世大和守 重之判

阿部豐後守 正喬判

井上河内守 正岑判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御機嫌被相伺之外、益御勇健御儀外間、可御心易外、隨ゝ串匏一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御

仕合外、恐々謹言、

朱カキ

享保二年 八月十一日

久世大和守

重之判

松平薩摩守殿

先レ是

吉宗公嗣レ位故有下侯伯所レ領之國郡可レ改ニ賜 印章ニ之

命上、石川近江守總茂・朽木民部少輔植元爲ニ之奉行、

豫依レ命昔年

家康公

秀忠公

家光公

家綱公

綱吉公

家宣公所レ賜之 印章、及正徳二年四月之領知目錄、及

副ニ其摸寫七卷、郡村高辻簿四冊、高辻倉簿四冊、今茲正

月二十六日使下家老種子島彈正久基呈^レ之石川總茂之第上、

總茂・植元及林大學頭信篤等列居校ニ正之一、則返^レ眞留^ニ

寫於總茂一矣、同年九月十二日嗣適繼豐受^ニ執政之奉書、

而登^レ營

吉宗公出^ニ御黒書院一、徵^ニ松平若狹守吉治^{松平如賀}、松平大

膳大夫正甫^{松平肥後}・繼豐^{豐貴}・松平宮内少輔忠尚^{松平下總}・

松平中務大輔昌平^{松平伊豫}・松平左兵衛直常^{松平出羽}、各有^下

賜^ニ領知之命上、賜^ニ領國薩摩・大隅一圓、日向諸縣郡中

百六十四箇村、及琉球國吉貴領知之 印章一、執政阿部

豐後守正喬在^ニ御前^ニ被^レ授^レ之、繼豐敬戴而退、乃到^ニ

執政土屋相摸守政直・井上河内守正岑・阿部正喬・久世

大和守重之・戸田山城守忠眞之第ニ奉^レ謝^レ之、而後同九月

二十一日 印章令^レ發^ニ東武一、記錄奉行肥後藤之丞基備、

馬廻牧十郎右衛門胤貞等護^レ之、經^ニ東海・山陽・九州之

驛一、十一月九日到^ニ著魔城一、吉貴迎而謹受^レ之、即日遣謝

使島津筑後久龍於東武一、同十二月二十日久龍著^ニ東武一、

而到^ニ土屋政直・井上正岑・久世重之・戸田忠眞・水野忠

之、若年寄大久保長門守教重・同佐渡守常春・石川近江

守總茂及朽木民部少輔植元之第ニ勤^ニ吉貴之謝使一、同二十

六日久龍從_三執政之招_一登_レ營、井上正岑被_レ授_三奉書_一、賜_三時服四於久龍_一、而後久龍翌年二月十八日歸_三薩府_一復_レ命、

833

正文在文庫

薩摩大隅兩國并日向國諸縣郡之内百六拾四箇村、高六拾萬五千石餘、此外琉球國拾貳萬三千七百石_{別錄在事充行之}訖、依代々之例領知之狀如件、

享保二年八月十一日

(徳川喜悉)
(花押 No.6)

薩摩

中將殿

834

正文在文庫

目錄

薩摩國一圓

伊佐郡五拾貳箇村

高三萬八千四百壹石三斗六升貳合四夕七才

薩摩郡三拾三箇村

高四萬貳千七百拾九石壹斗三升四合七夕五才

鹿兒嶋郡貳拾七箇村

高三萬三百三拾九石六斗九升四合貳夕

日置郡四拾八箇村

高五萬千六百四拾八石四升三合九夕

阿多郡貳拾箇村

高貳萬三千五百七拾石四斗七升五夕

河邊郡三拾五箇村

高三萬五千四拾五石七斗壹升八合

甌嶋郡貳箇村

高貳千七百九拾壹石三斗八升五合

顯娃郡七箇村

高壹萬五千九百三拾九石三斗八升四合七夕

揖宿郡七箇村

高壹萬六千八百五拾七石五升六合七夕

給黎郡六箇村

高壹萬四百六拾四石貳斗七合

谿山郡六箇村

高壹萬五千四拾七石八斗九升五合五夕

出水郡七箇村

高貳萬三千七百三拾五石貳斗五升六合

高城郡八箇村

高八千四百四拾五石九斗九升壹合四夕

大隅國 一圓

菱刈郡拾三箇村

高九千九百八拾六石八斗五升六合

栞原郡三拾貳箇村

高貳萬千八百貳拾四石四升三合

始羅郡三拾九箇村

高貳萬六千六百四拾三石四斗六升貳合

噲啖郡六拾三箇村

高四萬三千八百八拾四石四斗八升

肝屬郡三拾八箇村

高四萬貳千拾五石九斗八升八合

大隅郡三拾貳箇村

高貳萬百九拾貳石三斗壹升三合

熊毛郡九箇村

高五千貳百五石七斗壹升九合

馭謨郡四箇村

高千八拾石五斗九升

日向國

諸縣郡之内百六拾四箇村

向名村

昌明寺村

鶴田村

上下田村

内堅馬場村

龜澤村

岡松村

岡本村

高牟禮村

裏村

嶋中村

東村

柳水流村

榎田村

栗下村

中福良村

吉村

同西村

長山村

湯田村

長江浦村

中福良村

灰塚村

大川平村

宮原村

原田村

前田村

坂本村

大明司村

正原村

池嶋村

今西村

杉水流村

北方村

東方村

細野村

十日町村

大豆別府村

小林村

温水村

西方村

眞方村

堤分村

水流迫村

須木村

奈佐木村

高原村

蒲牟田村

大牟田村

繩瀬村

江平村

入木村

朝倉村

前田村

笛水村

三箇山村

麓村

浦之名村

紙屋村

漆野村

右今度被差上郡村之帳面相改、及 上聞如 御代々之高、
所被成下 御判也、此儀兩人奉行依被仰付執達如件、

享保二年八月十八日

石川近江守

總茂判

朽木民部少

植元判

年字並

松平薩摩守殿

包紙

領知目錄

835 繼豊公御譜中

正文在文庫

一筆令啓外、貴殿弥可爲御無吳珎重存外、我等事海陸無
吳事今日令歸國外、依之差上使者外付外、此段申達外、
猶期後喜時外、恐々謹言、

朱カキ

享保二年

八月十五日

薩摩守

吉貴判

松平大隅守殿

御宿所

836 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、然者來朝厦門出唐船壹艘人數五拾人乘組、
(アモイ)

今月十二日御領内(薩摩郡)甌嶋に漂着御碇外付外、番船等附置外
而彼嶋在番之御家來中_レ被申上外付、如例警固被相添、
日和次第當湊に可被送越之由被仰付候、依之御紙上之趣
被爲入御念外御事奉存外、猶又御家來中_レ委細及返答外、
恐惶謹言、

朱カキ 享保二年 八月廿三日

(長崎奉行) 石河土佐守

政郷判

松 薩摩守様

貴報

837 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、先頃東埔寨出、占城出唐船入津仕外處、
信牌不持渡外付外、歸帆申付外間、御領内浦々被入御念
外様こと御家來中_レ申達外趣、御承知被成外、依之被爲
入御念外御紙上之趣、承知仕外、恐惶謹言、

朱カキ

享保二年

八月廿六日

石河土佐守

政郷判

松 薩摩守様

貴報

838 全上

正文在南泉院

一 御掛物後陽成院勅筆
天神之名号

一幅

一同 天台座主公弁親王御筆
弥陀之名号

一幅

右南泉院江

太守吉貴公所有御寄附也、宜被寶納之狀如件、

享保二年八月廿六日

比志嶋隼人

範房判

在八字通
南泉院僧正御房

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆令啓達ハ、其表弥御無爲ハ哉承度存ハ、隨テ領所之

鮭二尺令進覽ハ、猶期後音之時ハ、恐ク謹言、

朱力キ
享保二年

八月廿八日

水戸中納言

綱條判

松平薩摩守殿

人々御中

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、

貴公様益御機嫌能海陸御安全、去月十五日首尾能被遊御

着城旨承知仕、目出度御儀奉存ハ、御祝儀爲可申上如斯
御座ハ、隨テ目録之通進上之仕ハ、於爰許別條無御座ハ、
尊意安可被思召ハ、猶奉期後喜之時候、恐惶謹言、

朱力キ
享保二年 九月二日

松平大隅守

繼豐御判

進上中將様

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀小袖五到來欣覺ハ、委曲戸田山城守可述ハ
也、

朱力キ
享保二年 九月七日

吉宗公
墨印

薩摩

中將殿

全上

御札令披見ハ、

有章院様就薨御、從琉球中山王
(家繼)

公方様 (家實夫人) 天英院様 (家繼志守) 月光院様江御悔爲可申上、鹿兒嶋迄
(備前) 使翰相渡ハ、困茲從國元播州奈波湊迄差越ハ付テ、以使

者被越之、遂一覽外、則申上返札遣外間可被相達外、恐
々謹言、

朱カキ
享保二年 九月七日

戸田山城守
忠眞判

久世大和守
重之判

阿部豊後守
正喬判

井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

843

全上

御札令披見外、

有章院様就 蕨御、從琉球中山王鹿兒嶋迄使翰相渡候、

依之播州奈波湊に從國元差越外付外、以使者被越之、遂

一覽外、則及 上聞返札遣外間、可被相達外、恐々謹言、

朱カキ
享保二年 九月七日

戸田山城守
忠眞判

久世大和守
重之判

阿部豊後守
正喬判

844

全上

御札令披見外、

有章院様就 蕨御、從琉球中山王

公方様 天英院様 月光院様に御悔爲可申上、鹿兒嶋迄

使簡相渡外、依之播州奈波湊に從國元差越外付外、以

使者被越之、紙面之趣承届候、恐々謹言、

朱カキ
享保二年 九月七日

土屋相摸守
政直判

松平薩摩守殿

845

全上

御札令披見外、

有章院様就 蕨御、從琉球中山王鹿兒嶋迄使翰相渡候、

依之播州奈波湊に從國元差越外付外、以使者被越之、

紙面之趣承届外、恐々謹言、

朱カキ
享保二年 九月七日

土屋相摸守
政直御判

松平薩摩守殿

井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

846 繼豊公御譜中

正文在文庫

猶以熨斗目小袖半袴可有着用外、以上、

御用之儀外間、明十二日五半時、同氏薩摩守爲名代可有

登 城外、以上、

朱力キ
享保二年 九月十一日

戸田山城守

久世大和守

阿部豊後守

井上河内守

松平大隅守殿

847 繼豊公御譜中

同年九月十二日繼豊受_レ執政之奉書_二而登_レ營

大樹吉宗公出_二御黒書院_一、徵_二松平若狹守吉治_代治_子松平加_{賀守}繼_子肥_守。

松平大膳大夫正甫_代子松平肥_{後守}正_守。松平大隅守繼豊_代子吉貴_貴。松平宮

内少輔忠尚_代子松平下_{總守}忠_守雄_守一。松平中務太輔昌平_代子松平伊_{豫守}守_守邦_守一。松平左

兵衛督直常_代子松平出_{總守}直_守澄_守。各有_二賜_レ領知_二之_命上、賜_二領國薩

摩・大隅兩國、日向國諸懸郡中百六十四箇村、及琉球國

吉貴領知之_{印章}、自_二執政阿部豊後守正喬_一見_レ授_二附

之一、繼豊謹而拜_二戴_二之退去乃詣_レ執政土屋相摸守政直_一・井

上河内守正岑・阿部正喬・久世大和守重之・戸田忠眞之

第二奉_レ申_二謝_一之、厥后九月二十一日使_二記錄奉行肥後藤

之丞基備、馬廻牧十郎右衛門胤貞等_二衛_二護_一印章_一、而發_二

東都芝邸_二到_レ薩府_上、事詳_二于吉貴之譜中_一、

848 吉貴公御譜中

正文在文庫

芳簡披覽、先以今般歸國之處、海陸無難去月十五日被到

着之由、目出珍重思給外、此方各無恙外間、可令安心給

外、尚期後音不能委細外、謹言、

朱力キ
享保二年 季秋十三 (近衛家久) (花押 No.4)

薩摩中將殿

849 全上

正文在琉球國國司

芳翰令披見外、於其地京錢通用之儀、去年差免外處、爲

謝禮大城親雲上被差越、目錄之通被相贈之、入念儀令祝

着外、恐惶不宣、

朱力キ
享保二年 九月十五日 中將吉貴御判

謹上 中山王

850 吉貴公御譜中

正文在文庫

口上覺

來々亥年琉球に封王使渡來之筈、從前代封王使之節、
琉球王進物之内、刀・鏢・長刀・具足を學び、贈申儀御
座外、尤右之品用方ニ著不罷成、見分計道具之形相拵申
外、中山王一世一度爲差立舊式之進物ニ御座外間、先
例之通申付度外、此段申上外、委細者其御地ニ差置外家
來之者より可申上候、以上、

朱カキ
享保二年

九月廿一日

松平薩摩守

851 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、廣東出唐船一艘人數四拾貳人乗組、去三
日御領内上甕嶋浦内湊に致漂着外付、番船等被御附置候
由、彼嶋在番之衆中申遣外、日和次第如何此表に送可被
遣之旨被仰付外、猶又從御家來中被申聞之趣致承知外、
恐惶謹言、

朱カキ
享保二年 九月廿六日

(長崎奉行)
日下部丹波守 博貞判

(同)
石河土佐守 政郷判

松 薩摩守様

參貴報

852 繼豊公御譜中

正文在文庫

明廿八日例月之御禮無之外條不及登 城外、以上、

朱カキ
享保二年 九月廿七日

戸田山城守
久世大和守
井上河内守

松平大隅守殿

853 繼豊公御譜中

正文在文庫

なをく御しうき御申あげ御満足の通、何もよく申
せとの御事ニ御さ外、かしく、
文のやうまつく
一位様御機嫌よくならせられ、十五日ニハ西之御丸へ御

移徙あそはされ、御めてたくおほしめさせられりよし、御祝儀として御目録の通御あけ被成、幾久しくもと祝入参らせられり御事御さり、

一位様御所の御障もあらせられりハて、御機けんよく御座被遊り、御心易思しめし被成りへく事り、めてかしく、

朱カキ 享保二年

松平

御返事 大隅守さま

人々御中

岩くら

梅その

お

全上

返くかんきこ御さりへとも、いよく御きけんよくならせられりまゝ、めてたく思しめし被成りへく、御手まへ様かわらせられ御さなされりハすりや、きかせられ度思しめしり、かしく、

一位様より申せとの御事に御座り、まつく

一位様御機けんよくならせられ、このほと一の御所へ御わたし被遊、萬々年もと御まん足におほしめしり、此御目録之通右之御しうきまでに、御手まへ様へまいらせられり、誠にちとせ萬代までもめてたき御事のミと思しめしり御しなまでこおはしましり、このよしよく申せと

てり、めてたくかしく、

朱カキ 享保二年

まつ平

大すみの守様

人々御中

梅園 いわ倉

全上

返くいよいよ御機けんよくならせられりまゝ、めて度思しめし被成まいらせり、かしく、

御ふみ下され則ひろういたしまいらせり、まつくこのたひ御わたましの御しうき、御もくろくのをりまいらせられりへハ、御禮被仰上、御念入らせられり御事に思しめしり、まことに萬々年も

一位様御機けんよくならせられ、ちとせ萬代までも御はんしやう被遊、いく久しくとの御事までこ御座り、このよしよく申せとの事り、かしく、

朱カキ 享保二年

まつ平

大すみの守様

人々御中

梅園 いわ倉

御返事

正文在文庫

一筆啓上仕候、

貴公様益御勇健可被成御座、珍重奉存_レ、然者去月十二

日爲御名代登 城仕_レ處 御前_レ被召出、以

上意御領知之

御判物首尾好頂戴被 仰付、目出度御儀奉存_レ、此等之

御祝儀爲可申上、以使目錄之通進上仕_レ、右付_レ委細之

儀者從内記申上_レ、將又於御當地別條無御座_レ、可易尊

意_レ、猶奉期後喜之時候、恐惶謹言、

朱力_レ平 享保二年 十月朔日

進上中將様

松平大隅守

繼豐判

同年十月朔日、吉貴歸國之謝使平田新左衛門正房登_レ

營勤_二使職_一、奉_レ拜_二

吉宗公_二而後賜_二時服_三・羽織一於正房、

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又今度被下

御暇、其上御腰物・御馬并白銀・時服拜領之、難有由得

其意_レ、就國元到着、爲御禮以平田新左衛門琉球芭蕉布

百端・御樽肴被獻_レ、遂披露_レ處 御前_レ被召出、入

念_レ段御喜色之御事_レ、恐々謹言、

朱力_レ平 享保二年 十月三日

十月三日

戸田山城守

忠眞判

久世大和守

重之判

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

御札令披見_レ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又今度被下

御暇、其上御腰物、御馬并白銀・時服拜領之、重疊難有

由得其意_レ、就國許到着、爲御禮平田新左衛門如目錄被

獻_レ、紙面之趣承届_レ、恐々謹言、

朱力_レ平 享保二年 十月三日

十月三日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

全上

なをく萬く御しゆひよくおハしまし、數く御
めてたくそんしまいらせり、かしく、

文くたされかたしけなく存まいらせり、まつく
公方様

一位様御機嫌よく御座あそハされ、御同前ニ御めてたさ、
御てまへさまも御ふしの御事外、御着なされり由、御め
てたくそんしまいらせり、さてハ此たひ御しゆひよく御
いとまにて御國元へ御着被成、忝なく思しめし被成り由、
御使者にて御禮仰上られりとの御事にて、私共にも御祝
儀御目錄の通おくり下され、幾久しく萬く年相かハラ
すと祝欠入かたしけなく存まいらせり、かしく、

朱カキ
享保二年

松平

さつま守様

人、御中
御返事

ときハる

ミむろ

たか瀬

外山

田澤

全上

なをく御序ニよろしく、御さた申まいらせりへく
り、御道中御障なく御着りとの御事、數く御めて
たく存まいらせり、かしく、

文くたされり、まつく

公方様御機嫌よく御座あそハされ、御めてたくおほしめ
しなされりよし、さてハ御てまへさま御事、此たひ

上使を以御いとま

仰出され、白銀時服御頂戴被成、そのうへ 御前へめさ
せられ御懇の御詫、ことに御腰物・御馬御拜領被成、か
たしけなく思しめし被成り由、御國元へも御着なされり
よし、御使を以御禮仰上られりよし、なを御禮と御座り
て、御ふみのやう御念入参らせり御事ニ存り、かしく、

朱カキ
享保二年

松平

さつま守様

人、御中
御返事

ときハる

ミむろ

たか瀬

外山

田澤

誠ニ幾久しく萬々年も相かへらす御暇

仰出させられり、御國元へ御着被成りやうこと、一
入目出たく御悦ニおほしめしり、此よし何もよく心
得申せとの御事に御座り、なをめてたくかしく、

八月十五日之御日付にて御文被下り、まつく

一位様御機嫌よく成らせられり御事、日出度思召被成り
由、偕は此たひ

上使を以御暇

仰出されり、白銀時服御頂戴被成、其うへ 御前にて御
懇の 御錠、御腰物・御馬御拜領なされ、重豊かたしけ
なく思召被成、御れい(御)をふせ上られり文のやう披露申參
らせりへハ、めてたく御満足ニおほしめしり、めてたく
かしく、

朱カキ
享保二年

松平

薩摩守様

人々御中
御返事

梅園

岩倉

お

全御譜中

正文在文庫

去月廿五日之貴翰拜見仕り、來朝廣南出唐船壹艘人數四

拾貳人乗組、去月廿二日御領内串木野之内羽嶋浦漂着仕
り付、番船等被御附置り、日和次第如何當表に御送越り
様被仰付り由、委細御家來中より可被申聞之旨、御紙上之
趣承知仕り、恐惶謹言、

(長崎奉行)

朱カキ
享保二年 十月四日

日下部丹波守
博貞判

松 薩摩守様

貴報

全御譜中

同年十月四日、日州佐土原城主高津淡路守惟久訪ニ宗家ニ
來ニ薩府一、翌五日登り城、吉貴出見焉、而留滞數日、其
後詣ニ加世田郷日新寺一經ニ坊津・山川等ニ涉ニ根占一、經ニ
(川辺郡) (松尾郡) (舟付郡)
(喻於郡) 末吉等之郷ニ還ニ佐土原一、

全上

正文在文庫

今般首尾能御暇、海陸無異儀其地御着之旨玆重存り、依
之被入御念預御札過當之至り、恐々謹言、

朱カキ
享保二年 十月五日

水戸中納言
綱條判

吉貴公御譜中

松平薩摩守殿

朱力半
享保二年 十月六日

井上河内守
正岑判

870

吉貴公御譜中
正文在文庫

琉球江封王使渡來ニ付、中山王贈物之内、武具を學レ

866

全上

松平薩摩守殿

御報

貴簡拜見仕レ、先達レ被仰下レ御領内串木野之内羽嶋浦
漂着之廣南出唐船一艘、警固御差添送之被遣、依之委曲
御紙上之趣被入御念御事奉存レ、恐惶謹言、

朱力半
享保二年 十月六日

日下部丹波守
博貞判

松 薩摩守様

貴報

869

吉貴公御譜中
正文在文庫

正文在文庫
御札令披閱レ、今度首尾能御暇、路次無恙國元到到着之由
弥重レ、依之入御念レ段欣然之至存レ、恐レ謹言、
朱力半
享保二年 十月十五日
尾張中納言
繼友判
薩摩中將殿
御報
尊書拜見仕候、先以海陸御機嫌能八月十五日被遊 御着
城、目出度御儀奉存レ、爲御禮使平田（正）新左衛門就被差上
外、被仰下之段忝次第奉存レ、新左衛門事、御目見相濟
御奉書相渡レ間、今日御當地差立申レ、猶奉期後喜之時
候、恐惶謹言、
朱力半
享保二年 十月十六日
松平大隅守
繼豐判

進上中將様

867

全上

御札令披見レ、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃中川筋爲御鷹狩被爲
成レ段被承之、恐悦旨尤レ、紙面之趣各申談及言上候、
恐レ謹言、

朱力半
享保二年 十月六日

井上河内守
正岑判

ゐ、相用ハ先例之覺

一 刀四拾腰 但鋼鐵なし

一 長刀拾振 但右同

一 鎗拾本 但右同

右封王使ハ於琉球遣申ハ、

一 具足一領 但皮きたいなし整而
用方不具ニ相調申候

一 刀貳拾四腰 但鋼鐵なし

一 鎗拾本 但右同

一 長刀拾振 但右同

右封王使歸帆以後、琉球より謝恩使を以大清皇帝に

獻申ハ、

一 右何れ及武具を表ハ迄ニ、於日本禮式太刀を用申

ハ同前、何そ用方ニ者不罷成ハ、然共唐人共ニ者武

具を受用仕ハと存來、專舊記を以致沙汰由御座ハ、

一 吳國ハ武具を差渡ハ儀者、御禁止之旨堅固相守、武

具ニ似寄ハ物ニ及一切差渡不申事御座ハ、然共封

王使之節計者以前より蒙御免、天和三亥年封王使之

節及、前代之通引續右之品用來ハ、

一 於琉球右之品相調ハ儀者、一切不罷成ハ付、封王

使之節者、前々より於薩州屹檢使申付相調させ、餘

計之員數曾及差渡不申事御座ハ、

一 封王使ハ翰林學士武官を相添、惣人數五六百人、又

者七八百人程ニ御座ハ、尤冠并官服其外品及贈物

有之、屹規式執行、中山先王之廟所及敕使相越、

祭等勞慇懃之仕形ニ御座ハ、

一 右贈物之品々、武具と者難申ハ得共、唐人共ハ對ハ

及ハ武具之唱及有之、自餘之品ニ者相替ハ故、此節

及薩摩守より申上事御座ハ、弥先例之通被仰付被下

度奉願ハ、琉球王一世一度、適用意之上申請ハ封王

使ニ付ハ、爲差立官物之定法相欠ハ儀者、絶不

罷成由琉球人申出ハ、

一 封王使者來々、亥年差越善ハ得共、自然來年進貢使歸

帆之節、不圖差渡儀及可有之哉と其用意申付事ハ、

以前ニ及申越ハ時節より早渡來之儀御座ハ、依之右

之品々をも來春薩州より差渡ハ様ニ是又琉球より

申越ハ、

右之委細私より可申上旨國元より申越ハ、以上、

朱カキ
享保二年 十月廿六日 松平薩摩守家來(久尊)
鳴津内記

871

全御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、爲今度御獻上之御殘、熬海鼠一箱拜受仕、辱次第奉存_外、御禮爲可申上如斯御座_外、恐惶謹言、

朱力キ
享保二年 十月廿六日

松平大隅守

繼豐判

進上中將様

872

吉貴公御譜中

同年十月二十九日、朽木民部少輔植元招_三留主居之者_一、乃阿多六郎右衛門俊共往候焉、植元手自附_三吉貴領知之目錄於俊共_一、俊共退而捧_三之於繼豐_一、乃令_三種子田市兵衛秀信等護_三之送_三于薩州_一、秀信等經_三東海・山陽・九州之驛_一、十二月二十一日到_三着薩府_一、奉_三之於吉貴_一、

873

全御譜中

正文在福昌寺

蓋以天開法運弘曹洞一宗源地示祥符扨通幻十哲刹師祖之德澤深於海首創之成功高自山夫以 松原山南林禪寺宗育和尚洞開眼目妙得珠璣其威嚴恟慄也月炯霜寒其機用赫烜焉、電飛風厲爲法窟之巨孽爲禪門之棟梁、直去松原宜續

師正統早來玉阜應主大衆宗網上堂而踞獅貌之牀法華忽雨

對衆而演霹靂之舌眞如自明闔山惟興武運法運共盛舉國是泰王風祖風同扇廣垂慈心永挑佛日以疏、

享保二年丁酉十一月六日

中將吉貴

874

全御譜中

正文在文庫

御札令披見_外、

公方様御機嫌被相同之_外、益御安全之御事_外間可御心易_外、隨_三小熬海鼠一箱被獻之_外、各申談遂披露_外處、一段之御仕合_外、恐々謹言、

朱力キ
享保二年 十一月六日

久世大和守

重之判

松平薩摩守殿

875

繼豐公御譜中

正文在文庫

一筆令啓_外、

公方様益御機嫌能被成御座、奉恐悅_外、然者九月十二日我等爲名代貴殿被 召出、領知之

御判物被成下之、今日到來致頂戴之、難有次第外、右之

御禮以使者申上外付、如此外、恐々謹言、

朱カキ 享保二年 十一月九日 薩摩守 吉貴御判

松平大隅守殿

御宿所

876 繼豊公御譜中

正文在琉球國國司

(家總) 有章院様薨御付外、爲悔被差渡川平親方示給入念儀外、
恐惶不宣、

朱カキ 享保二年 十一月十八日 侍從繼豊御判

謹上 中山王

877 芳翰令披閱外、

有章院様薨御付外、爲見舞以川平親方目錄之通被相贈之、
入念儀過量之至外、恐惶不宣、

朱カキ 享保二年 十一月十八日 侍從繼豊御判

謹上 中山王

878 全上

(定置) 松平越中守殿奥方就卒去、芳札之趣入念儀外、恐惶不宣、

朱カキ 享保二年 十一月十八日 侍從繼豊御判

謹上 中山王

879 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、御領内薩摩國加世田之内、野間崎と申所

江南京出來朝唐船壹艘人數三拾六人乘組、去十六日漂着

付候付外、同所片浦と申湊江引入、如例番船等被御附置

候、日和次第警固之衆中御差添、此表江御送越可被成旨

被仰下、承知仕、被入御念外御事奉存外、恐惶謹言、

朱カキ 享保二年 十一月廿三日 日下部丹波守 博貞判

松 薩摩守様 貴報

880 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦之旨尤外、將又今度水野

和泉守連判之列被、仰付外段被承之、珍重之由得其意外、紙面之趣各申談及、上聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保二年 十二月六日

戸田山城守
忠眞判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、御領内薩摩國山川之内兒ケ水と申所之沖に、去月晦日唐船一艘漂來、卸碇候付、則御番船被御附置、如例質唐人可相渡旨被仰聞外得共、不致承引、剩夜入致出帆外付、留船等被差出外得共、彼浦老荒波こゝる小船之自由難成、殊更夜中之儀故、行衛被見失候由、御役人中方被申越外由、依之被仰下外趣被入御念御事奉存外、猶又委曲從御家來中被申越承知仕外、恐惶謹言、

朱力キ
享保二年 十二月九日

日下部丹波守
博貞判

松 薩摩守様

貴報

吉貴公御譜中

正文在文庫

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴簡拜見仕候、先達而被仰下外御領内野間崎に漂着、片浦湊に挽入御置被成外南京出來朝唐船壹艘、警固御差添、當表に被送遣着岸、今十四日請取之申外、委細御家來中方可被申聞旨御紙上之趣承知仕外、恐惶謹言、

朱力キ
享保二年 十二月十四日

日下部丹波守
博貞判

松 薩摩守様

貴報

一琉球王一世一度從大清封王使被申請外節、於琉球被相贈外進物之内、武具を學外、刀・長刀・鑓前代より被相用事外、且又謝恩使之節、被獻物之内ニ老武具を學外、具足・刀・長刀・鑓并馬道具皇帝に被獻外先例こゝる外、當尚敬代いまた封王使不被申請外、依之來々亥年封王使被申請答外付、先例之通右品々相贈度外間、被仰付被下度旨去年以來段々攝政・三司官より申出趣有之外、前代より武具を表し外迄こゝ、何そ用方ニ老不能成様相調、於日本禮式太刀を用外同前外得共、吳國に武具を差渡外儀老御法度之事外へハ、縦武具ニ

似寄り物にるを、猥差渡り様こそ難被仰付事、殊更右具足・刀・長刀・鎧ハ、對大清りる者武具之唱有之事りへハ、乍先例 御代表相替り付、御沙汰なしにも難被成、段々御賢慮之上、江戸へ及御伺り處、先例之通可被仰付旨御願書に御張紙を以被仰渡り、

一 右御願書并鳴津内記殿(久基)より之書付、十月廿六日御用番并上河内守様(親)に御留守居川上五後右衛門を以被差出、御用人音羽庄兵衛に取合差出り處、先月朔日河内守様より五後右衛門被召呼、庄兵衛を以右之通被仰渡り由、江戸より申來り、

一天和三亥年封王使之節表前代之通右之品被用來り段々無別條事り、尤以前被蒙御免、封王使之節計右品ハ被用、其外ニ者一切御免無之儀と相聞得り、右付る者書留等も爲有之筈り得共、先年御城回祿、江戸御屋敷火災付る、書留等及焼失、右之次第今更分明ニ者不相知り、然共慶長年中 權現様依御下知、和漢之貨物可致交易旨、中山王より大唐に書翰差越り儀者、南甫文集之内ニ表相見得、其上山口駿河守様御狀杯表有之、彼是見合り得ハ、琉球より日本之産物差渡り儀者、權現様御代猶被蒙御免、夫より引續懈怠難成段ハ無餘

儀事り、自然此節之御伺相滞りハ、右之譯を被仰立筈り得共、何之御尋表無之り故、委細を被仰上不及、先例之一筋を以輕被仰上、其分る相濟り、此上ハ自今以後封王使之節者、一通り之御届る可相濟と永々迄之御安堵ニり、此段者後年專御見合ニ表可罷成事り故、御願書に御張紙を以被仰渡り御書付一通并内記殿より被申上り書付一通相渡り候、右之趣御記録所に相記置り様可被申渡り、以上、

享保二年 西十二月

肝付主殿(兼 柄)

比志島隼人(範 厚)

種子嶋彈正(久基)

北郷作左衛門(久基)

鳴津將監(久基)

鳴津備前殿(久基)

884 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、隨る蜜柑二箱・突鱗一箱被獻之り、各申談遂披露り處、一段之御仕合り、

恐々謹言、

朱力キ
享保二年 十二月十六日

戸田山城守
忠眞判

松平薩摩守殿

885 繼豊公御譜中

正文在文庫

芳札令披見外、其許無別條由玆重存外、然者九月十二日我等爲名代登 城外處、御前被 召出、以上意、領知之

御判物被成下之、去月九日到來頂戴之、難有次第外、依之爲祝儀以使目錄之通饋給、欣然之至存外、恐々謹言、

朱力キ
享保二年 十二月十八日

薩摩守
吉貴御判

松平大隅守殿

御返事

886 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様御機嫌以使者被相伺之外、益御勇健之御事外間、可御心易外、隨而御羽織五并纏節一箱被獻之外、各申談

遂披露外處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保二年 十二月廿二日

戸田山城守
忠眞判

松平薩摩守殿

887 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御佛殿御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保二年 十二月廿六日

井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

888 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又九月十二日其方爲名代同氏大隅守儀、御前に被召出之、領知之御判物頂戴之、難有由得其意外、依之爲御禮嶋津筑後被差越之外、紙面之趣及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保二年 十二月廿六日

水野和泉守
忠之判

井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

大久保佐渡守
常春判
大久保長門守
教重判

889 全上

爲歲暮之祝儀小袖五重到來歡覺外、委曲井上河内守可述
外也、

朱力キ
享保二年 十二月廿七日



薩摩
中將殿

890 吉貴公御書中

正文在文庫

貴札致拜見外、

公方樣益御機嫌能被成御座、恐悅之旨尤之御事外、然者
九月十二日爲名代同氏大隅守被爲 召、以上意領知之
御判物被成下、於御國許頂戴之、難有被思召旨、依之以
御使者就被仰達外、御紙面之趣承知仕外、恐惶謹言、

朱力キ
享保二年 十二月廿八日

石川近江守
總茂判

松平薩摩守様
貴報

891 吉貴公御書中

正文在文庫

改年之御慶賀猶更不可有休期御座候、
公方樣益御機嫌能被成御座、奉恐悅外、貴公樣弥御勇
健可被成御超歲、目出度御儀奉存外、然者私儀今日登
城仕、首尾能御禮相濟着座被 仰付、御酒頂戴、其上時
服拜領仕、段々難有仕合御座外、將亦委許何れ表別條無
御座外間、尊意安可被思召外、年之御祝儀爲可申上差上
使、目錄通進上之仕外、猶奉期永日候、恐惶謹言、

朱力キ
享保三年 正月二日
道中 中將様

松平大隅守
繼豐御判

892 緒豊公御書中

正文在文庫

改年之慶賀重疊不可有際限_レ、貴殿弥御無吳可爲超歲珍重存_レ、我等委無恙令越年_レ、爲祝儀目錄之通令進入之_レ、猶期永日_レ、恐_レ謹言、

朱力平

享保三年 正月二日

薩摩守

吉貴御判

松平大隅守殿

御宿所

繼聖公御譜中

正文在文庫

如承意陽春之慶賀不可有際限_レ、其表無吳儀御超歲之旨珍重存_レ、御念入賀章之趣欣然之至_レ、恐_レ謹言、

朱力平

享保三年 正月八日

水戸中納言

綱條判

松平大隅守殿

御報

吉貴公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

享保三年正月十一日 吉貴御判

全上

正文在平等王院

御劔大和殿治作之長七寸一分每神來

壹振

右劔者薩州河邊郡坊津龍巖寺一乘院之靈寶也、當住苑周法印欲再興智惠光院之舊敗、開帳靈寶於鹿兒嶋大興寺于爰有淨土之沙門、晴山者奉

大守公之命陪開帳之法席說得靈寶之由、致沙門一夕得夢一僧來開帳之會場言曰、靈寶若干之中以一物獻之哉、答曰、呈何處乎、明朝必有其事言終夢夢既覺、沙門奇之告法印時、翌朝降命及寶劔之事、且以先夢之有其識達尊聽所謂夢中之一僧者智惠光院之本尊地藏菩薩之來迎、何爲疑之哉、點菩薩之御鬮靈劔五握之中、可獻一劔法印奉 命點御鬮、當神來之劔因此一劔奉獻之、因茲此節右神來之劔一振、所被寄進於滿家院花尾山權現也、全受納之、可被傳永久者也、依 仰副狀如件、

享保三年正月十一日

名越右膳

恒渡判

滿家院厚地村

平等王院

全上

正文在平等王院

覺

寶劍

大和物母神來
長七寸五分

一振

一鉏壹重金

一切羽赤銅

一緣柄頭貝口鞘先赤銅

唐草毛彫

一鐔赤銅右同彫

一目釘赤銅

一目貫七子赤銅金十文字御紋彫

一鞘銀梨子地塗

一柄右同

一袋大和錦

以上

戊正月十一日

全上

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露候之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ

享保三年

正月十一日

水野和泉守

忠之判

戸田山城守

忠眞判

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

年首之御吉祥珍重多幸、猶更不可有休期御座候、先以貴
國御靜謐、倍御機嫌能被成御重歲候之旨、恐悅奉存外、
此等之御祝儀爲可申上、(盛聽)識名親方指上申外、因茲目錄之
表進上之仕外、猶奉期來喜之時候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ

享保三年

正月十一日

中山王

尚敬判

進上侍從様

繼豊公御譜中

正文在文庫

如御札新春之御慶不可有盡期、其許御無爲御越年之由
珍重、我等無恙重歲之事、仍入御念、欣然之至
存、恐、謹言、

朱力キ
享保三年

正月十二日

松平大隅守殿

御報

尾張中納言

繼友判

902

松平大隅守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

新春之賀札且太刀・馬并目錄之通被贈之、令祝納候、其
邊弥勇健之由目出思給、此方無吳事、尚期後喜、
謹言、

朱力キ
享保三年

初春廿一日

薩摩中將殿

(花押
No.4)

上包

薩摩中將殿

家久

900

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲新春之賀儀華簡并目錄之通被贈之悦入候、弥勇健之由
目出思給、此方無吳、尚期後喜也、

初春十八日

(近衛家久)

(花押
No.4)

薩摩侍從殿

903

繼豊公御譜中

正文在文庫

御狀令披見、貴殿弥無吳珍重存、我等及無相替儀
、然者寒氣爲見舞、以使札目錄之通被相饋之、入念儀
存、恐、謹言、

朱力キ

享保三年

二月二日

松平大隅守殿

薩摩守

吉貴御判

御報

901

全上

新陽之賀章且目錄之通贈與之、情切之至幾久令祝納、
愈平安超歲之由珍重思給、此方同風候、尚期永日也、

朱力キ

享保三年

孟春十八

(近衛家照)

(花押
No.3)

御狀令披見外、其表無別條貴殿弥無吳玠重存外、我等無吳事外、然者爲歲暮之祝詞、以使札目錄之通被相饋之、欣然之至存外、恐々謹言、

朱力キ
享保三年 二月二日

薩摩守
吉貴御判
松平大隅守殿
御報

正文在文庫

御札令披見外、如承新春之慶賀玠重外、公方様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟と目出度被存由得其意外、猶以御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間、可御心安外、隨而御樽肴被獻之外、各申談遂披露外處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保三年 二月五日

水野和泉守
忠之判
松平薩摩守殿

正文在文庫

如御札陽春之御慶不可有休期外、其元御無爲玠重外、我等無恙越年之事外、仍入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力キ
享保三年 二月十六日

尾張中納言
繼友判
薩摩中將殿
御報

芳翰令披見外、舊臘就我等任官、爲祝儀目錄之通贈給之、入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力キ
享保三年 二月十九日

紀伊中納言
宗直判
松平薩摩守殿
御返報

正文在文庫

如芳翰青陽之嘉儀不可有盡期外、其許御無吳超歲之山玠重外、我等堅固令越年外、因茲入御念外段、欣然之至存外、恐々謹言、

朱力キ
享保三年 二月廿一日

紀伊中納言
宗直判

松平薩摩守殿

御返報

909

繼豊公御譜中

正文在文庫

年甫之吉兆玆重レ、如例營中へ以使者申入レ序、啓一簡
外、益可爲平安外、此表同前外、仍如目錄贈之外、尚屬
口上外也、

朱力キ
享保三年 仲春廿一

松平大隅守殿

(花押 No.3)

910

新年之賀儀雖事舊外日出弥可爲安全外、仍如目錄贈之外、
猶屬使者口上外也、

朱力キ
享保三年 二月廿一烏

薩摩侍從殿

(花押 No.4)

911

繼豊公御譜中

正文在文庫

年甫之新禧兩地同祝、弥無恙玆重レ、仍爲賀義目錄之通
贈之外、猶使者可申入外也、

朱力キ
享保三年 仲春廿一日

基熙

912

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲年甫之嘉事、御狀令披見外、
公方樣益御機嫌能被成御座、奉恐悦外、次貴殿弥御無異
超歲、去月二日登 城、諸事首尾好相濟外由玆重存外、
我等無恙令加年外、爲祝詞使札目錄之通饋給之、欣然之
至存外、猶期後喜之時外、恐々謹言、

朱力キ
享保三年 二月廿二日

薩摩守

吉貴御判

松平大隅守殿

御報

913

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、
公方樣益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又舊臘妻女
歲暮之御祝儀拜領、難有由得其意外、依之被差越使者外
紙面趣、各一覽之事外、恐々謹言、

朱力年
享保三年 三月九日

松平薩摩守殿

戸田山城守
忠眞判

松平薩摩守殿

914

吉貴公御譜中

正文在志布志大慈寺

大慈寺住持職事、任先例可令執務之狀如件、

享保三年三月廿一日

在日付之下

中將吉貴御判

劫前西堂

在包紙

劫前西堂に

916

吉貴公御譜中

扣寄在江戸家老座

覺

大隅國^〆

日向

薩摩

肥後

右三ヶ國之内見當ニ可成山有之^〆ハ、大隅國之内何と申所^〆、何國何と申山相見得^〆との事書付出し可被申^〆、大隅國と他國と境之山^〆無用^〆、但他領他領との境之山^〆、相兼見當ニ用可申事^〆、尤一ヶ所^〆他國二ヶ所も三ヶ所^〆見得^〆ハ、勿論之儀^〆、壹ヶ所宛より見^〆る^〆^〆不^〆苦、且又見渡シ之間少^〆る^〆^〆遠^〆キ所程能^〆得^〆共、無之候ハ、二三里程にても不^〆苦^〆、以上、

(米) 「享保三年」 四月

(患位) 〔四月三日大久保下野守様^〆御留守居御用之旨申來^〆付、川上

(親男) 五後右衛門罷出^〆處、北條新左衛門様御列座ニ而、下野守様

〆右之御書付御直ニ五後右衛門江御渡被成^〆〕

915

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見^〆、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御堂 御

參詣之儀被承^〆之、恐悦旨尤^〆、紙面趣各申談及 上聞^〆、

恐^〆謹言、

朱力年

享保三年

三月廿五日

久世大和守

重之判

正文在文庫

御札令披見外、

公方樣益御機嫌能被成御座、正月晦日増上寺 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

朱力年

享保三年 四月十三日

戸田山城守

忠眞判

松平薩摩守殿

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之外聞、不及登 城候、以上、

朱力年

享保三年 四月十四日

水野和泉守

戸田山城守

久世大和守

井上河内守

松平大隅守殿

謹奉呈愚翰候、

公方樣就 御代替、先例之通以使者御祝儀申上外儀、江

戸に御伺被仰渡、難有次第奉存外、依之今度御祝儀申上

外使者越來王子差上申外、此段爲可申上如斯御座候、誠

惶誠恐敬白、

朱力年

享保三年 卯月廿二日

中山王判

進上 中將樣

謹奉捧一翰候、從大清封王使之節、進物之内且又唐江謝

恩使差遣外砌、獻上物之内從前代武具相用外禮式有之、

其趣及 貴聞候處、段々以御賢慮江戸に被成御伺、先例

之通首尾克被 仰付、難有仕合安堵仕外、當家一代一度、

格別之折目故、從前々被成下御免許外、自今以後猶以其

通可相心得申旨承達仕、弥以幾久可奉仰

御高恩外、右之御禮申上度奉存、西平親方差上申候、誠

惶誠恐敬白、

朱力年

享保三年 卯月廿二日

中山王

尚敬判

進上 中將樣

吉貴公御譜中

正文在文庫

繼豊公御譜中

正文在文庫

謹奉呈愚翰候、貴國御平安倍御機嫌能成御座、恐悦奉存外、然者今度江戸に御祝儀申上候使者越來王子差上申候、依之御太刀一腰・御馬代白銀百兩并目錄之通進上之仕外、寔奉表御嘉儀計御座候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ

享保三年

卯月廿二日

中山王

尚敬判

進上 侍從様

(朱)
〔挿入〕
〔雑抄〕

一昨日南泉院邊にゐ、士之子共と相見得、前髪角入有之

外もの共、刀を後ニ指り者有之外、刀を後ニ指りる者、

急ニ抜外儀難成筈外得者不心掛ニ外、且亦大りはヲ取、

衣裳を短ク着りゐ致徘徊候、此節初め右躰之無行跡被

成御覽、見せ物などの様有之外、右行跡之儀ニ付る者、

前々段々被仰出趣有之外得共、今以右通無行跡有之、

不宜候、早竟者與頭大形故、今ニ不相直外と被 思召

候、右ニ付る者角入前髪有之者拾三方上之者、惣様相

集、御家老見分いたし、行跡不宜ものハ 御意無之内

者、前髪取角入外事差免ましく外、尤行跡宜ものハ致

見分 御意之通可差免外、

一與頭も東郷藤兵衛に可申聞り、藤兵衛者武藝之師を仕

外得者、稽古ニ参り者之内、若年之者共及可有之候、

後ニ刀ヲ差りる者、抜外事及不相成、せハき道ヲ歩行

候事及不相成筈外、刀指様及不存様ニ有之候者、士

之心掛大形ニ相見得外、ケ様之事を氣を付不申外段、

指南之いたし外様不宜と可申聞外、藤兵衛外ニ及武藝

指南いたし外ものハ、刀之指様行跡等之儀迄及若年者

に者可申聞外間、組頭も是亦可申聞外、

右之通被 仰出外事、

右總州様御代 享保三年戌四月

(古色)

繼豊公御譜中

正文在文庫

おはしまし外へとも、いよく御かわりも御さなく、

めてたくおほしめし外、なにもよく心得外て申せと

の御事ニ御さ外、返くくかしく、

一位様より申せとの御事に御座外、まつく

一位様御機けんよくならせられ外ま、めて度おほしめ

し被成外へく外、さてはこのたひ

924

継豊公御譜中

正文在文庫

めて度思しめしなされりよし、御尤ニ存まいらせり、
返くかしく、

御ふみ下され、則ひろういたしまいらせり、このたひ

あこ君様御婚禮萬々御しゆひよくすませられり、御しう
きまにて御目錄のとをりまいらせられりへハ、御禮被仰
上御念入らせられり御事におほしめしり、まことに幾久
しく萬々年もと御めてたさよく申せとの御事に御座り、

あこ君様御婚禮萬御首尾よくすませられ、大かたならす
御まん足こおほしめしり、それこ付、此御もくろくのと
をり御手まへ様へまいらせられ、まことに萬々年も御長
久被遊、いくちとせまでもといわる入らせられり御事こ
御さり、このほとは、早々御しうき御あけ被成、めて度
御満足におほしめしり、暑氣つよく、めてたくかしく、

朱カキ
享保三年

右

まつ平

大すみの守様

人々御中

梅その

いわ倉

925

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帽子單物數十到來歡覺り、委曲水野和泉
守可述り也、

朱カキ
享保三年

五月二日



薩摩

中將殿

いよくこの

御所様御きけんよくならせられり御事、めてかしく、

朱カキ
享保三年

右

まつ平

大すみの守様

人々御中

御返事

いわ倉

梅園

926

吉貴公御譜中

正文在文庫

今度

有章院様三回御忌御法事御執行付る、以使者御香奠被獻

之外、於増上寺奉納之事外、右之趣及言上外、恐々謹言、

朱力キ
享保三年 五月十三日

戸田山城守

忠眞判

松平薩摩守殿

全上

正文在南泉院

釋尊涅槃畫像 一幅

右老爲

光相院殿寶岳惠勝大姉御菩提被寄進畢、全受納之可被寺

傳者也、仍副狀如件、

享保三年戊戌五月十八日

種子嶋禪正

久基判

南泉院僧正智周御房

吉貴公御譜中

正文在文庫

御狩犬七疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々

謹言、

朱力キ
享保三年 六月廿六日

戸田山城守

忠眞判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、就暑氣之節

公方様御機嫌以使者被相伺外、益御安全御儀外間、可御

心易外、隨而琉球布十卷・砂糖漬天門冬一器・赤貝鹽辛

一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、各申談遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保三年 六月廿七日

水野和泉守

忠之判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在南泉院

東照宮奉再興、當院令修造薩摩國鹿兒島郡之内下伊敷村、

大隅國始羅郡之内平松村高寶永七年四月六日寄附之處、

平松村之高四百拾石、今度同郡増田村引替合五百石目録在別紙

如本可有領知之狀如件、

享保三年七月三日 吉貴御判

南泉院僧正智周御房

全上

正文在南泉院

目錄

薩摩國鹿兒嶋郡

下伊敷村之内

高三拾石

高三拾石

高三拾石

大隅國始羅郡

増田村一圓

高貳拾三石六斗六升三合五夕四才

高貳拾三石六斗七升三合九夕六才

高貳拾三石六斗貳升三合三夕三才

高貳拾三石七斗六升壹合八夕七才

高貳拾三石七斗三升七合九夕貳才

高貳拾三石八斗貳升五合

高貳拾三石七斗七升五合四夕貳才

高貳拾九石五斗五升貳合八才

高貳拾三石五斗八升三合壹夕三才

高貳拾三石六斗五升貳合八才

高貳拾九石四斗貳升八合五夕四才

高貳拾三石五斗三升三合九夕六才

高貳拾三石六斗八合三夕三才

水流門

高貳拾三石六斗壹升貳合九夕貳才

吉村門

高貳拾三石六斗貳升貳合七夕壹才

柳鶴門

高貳拾三石六斗四合五夕八才

恒見門

高拾九石七斗四升六夕三才

浮免

合高五百石

右就

東照宮御再興、南泉院御修造寶永七年四月六日以 御判

被寄附、御知行、其後雖被免許外、村役今度右御知行之

内下伊敷村之内者如本措之、平松村之地者依有故障、改

轉之被改、先年御寄附之 御判物増田村一圓被宛行之村

高也、當時雖無被寄附一圓地之例

東照宮御崇敬異于他之故如是、自今以後於南泉院領分者、

福昌寺領分同前村役所被免許也、比外委細之儀者勘定奉

行可相達、仍執達如件、

比志嶋隼人

享保三年七月三日

範房判

種子嶋彈正

久基判

北郷作左衛門

久嘉判

宮之脇門

高坊門

陽德門

水引門

南門

西蘭門

富屋門

東蘭門

大迫門

岸之上門

池之上門

田中門

米藏門

福地門

萩原門

鳴津將監
久當判

南泉院僧正智周御房

932 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御勇健被成御座、恐悦旨尤外、將亦

淨圓院様五月朔日當地被遊 御着外段被承之、目出度被

存由得其意外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ 享保三年 七月十一日

松平薩摩守殿

久世大和守
重之判

933 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺 御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

朱力キ 享保三年 七月十一日

松平薩摩守殿

久世大和守
重之判

934 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御堂 御

參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞

外、恐々謹言、

朱力キ 享保三年 七月廿一日

松平薩摩守殿

久世大和守
重之判

935 吉貴公御譜中

正文在文庫

知行目錄

高百石

一薩州大口之内

一隅州帖佐之内

一隅州山田之内

一薩州串木野内

一隅州始良之内

名寄帳別冊有

右先年就

東照宮御再興、南泉院御修造、觀樹院・實相院・吉祥院御
建立、雖每一院以麩米三拾石被宛行于年俸、今度依願繰

替地方高百石新被寄附之早、全可令寺納者也、仍如件、

享保三年戊七月廿六日

比 隼 人 範房判

種 彈 正 久基判

北 作左衛門 久嘉判

鳴 將 監 久當判

鳴 木 工 久武判

在百字通
吉祥院

936 全上

知行目錄

高百石

一 薩州大口之内 一 薩州市來之内

一 隅州帖佐之内 一 隅州始良之内

一 隅州山田之内

名寄帳別冊有

右先年就

東照宮御再興、南泉院御修造、觀樹院・實相院・吉祥院御

建立、雖每一院以廩米三十拾石被宛行于年俸、今度依願繰替地方高百石新被寄附之畢、全可令寺納者也、仍如件、

享保三年戊七月廿六日

比 隼 人 範房判

種 彈 正 久基判

北 作左衛門 久嘉判

鳴 將 監 久當判

鳴 木 工 久武判

在廿字通
實相院

937 全上

知行目錄

高百石 一 薩州大口之内 一 薩州串木野之内

一 隅州帖佐之内 一 隅州始良之内

一 隅州山田之内

名寄帳別冊有

右先年就

東照宮御再興、南泉院御修造、觀樹院・實相院・吉祥院御

東照宮御再興、南泉院御修造、觀樹院・實相院・吉祥院御

建立、雖每一院以麩米三拾石被宛行于年俸、今度依願線

替地方高百石新被寄附之畢、全可令寺納者也、仍如件、

享保三年戊七月廿六日

比 隼 人 範房判

種 彈 正 久基判

北 作左衛門 久嘉判

島 將 監 久當判

島 木 工 久武判

在廿字通
觀樹院

全上

正文在渋谷三四郎

加冠

宜爲

享保三戊七月廿八日

御印

渋谷松千代

三四郎重雄

939 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力字
享保三年 八月三日

水野和泉守 忠之判

戸田山城守 忠眞判

久世大和守 重之判

井上河内守 正岑判

松平薩摩守殿

940 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就

御代替、從琉球中山王以使者御祝儀申上外段被申聞外處、

先規之通被 仰付、中山王難有由其方迄御禮申達外旨得

其意外、依之被差越使者外紙面趣、各申談及言上外、且

又右使者・從者迄、去月十一日其地着外、如例支度有之

而仕廻次第召連可有發足由令承知外、恐々謹言、

享保三年 八月十三日

松平薩摩守殿

戸田山城守 忠眞判

全御譜中

正文在平等王院

華尾山權現

御幡貳流

右貳流之御幡、從薩隅日三州之

大守吉貴公被爲御寄附早、於神前御武運長久之御祈、兆

民快樂之禱益無緩疎可抽精誠外、依御下知一紙如件、

享保三年戊八月十三日

寺社奉行

市來次郎左衛門 政芳判

嶋津内藏 久致判

川上久馬 久東判

花尾山權現別當

平等王院

正文在平等王院

覺

一御幡貳流長九尺 横三尺五寸五部

但一表青地たびい

一裏八構(旗)

一縁紅

一金物めつき唐草模様

一鈴八ツ相付

一幡頭屋形之出端左右差渡三尺

一右入用白木箱壹ツ

但一長貳尺貳寸六部

一横三尺壹寸七部

一高サ三寸七部

一緒相附

右御幡此節被遊御寄附外ニ付、寺社奉行方添狀相附相渡置外、右御幡者御神事又者晴立外節計相掛ケ、平日者右箱ニ入付置、先キ不損様時々致虫干、隨分念を入可致格護置外、聊大形有之間敷外、以上、

享保三年

戊八月十三日

寺社奉行所^④

花尾權現別當

平等王院

正文在華林寺

霧嶋山權現

御幡貳流

右貳流之御幡、從薩隅日三州之

太守吉貴公被爲 御寄附早、於神前御武運長久之御祈、

兆民快樂之禱益無緩疎可抽精誠^レ、依御下知一紙如件、

享保三年戌八月十三日

寺社奉行

市來次郎左衛門

政芬判

嶋津内藏

久致判

川上久馬

久東判

霧嶋山權現別當

在十字通

華林寺

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之^レ間、不及登 城^レ、以上、

朱力^ナ

享保三年 八月十四日

水野和泉守

戸田山城守

久世大和守

井上河内守

松平大隅守殿

945 全上

正文在琉球國國司

爲年首之嘉儀、被差渡使簡、殊目錄通贈給之、入念^レ段

令祝着^レ、猶期後喜之時^レ、恐惶不宣、

朱力^ナ

享保三年 八月十六日 侍從繼豐御判

謹上 中山王

946 全上

芳墨令披見^レ、其許弥平安之由玆重存^レ、於我等及無恙

^レ、然者從大清賜物之龍紋緞子・縹子被相贈之、入念^レ

儀懇篤之至存^レ、恐惶不宣、

朱力^キ 享保三年 八月十六日 侍從 繼豐御判

中山王 回章

全上

來札令披見^ハ、其地京錢通用之願相達^ハ、爲謝禮被差渡
大城親雲上、殊目錄之表被相贈之、入念儀欣然之至^ハ、
恐惶不宣、

朱力^キ 享保三年 八月十六日 侍從繼豐御判

謹上 中山王

948 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見^ハ、

公方様御機嫌被相同之^ハ、益御安全御儀^ハ間可御心易^ハ、
隨^ハ申蛇一箱被獻之^ハ、各申談遂披露^ハ處、一段之御仕
合^ハ、恐々謹言、

朱力^キ 享保三年 八月十八日

戸田山城守

忠眞判

松平薩摩守殿

949 繼豐公御譜中

正文在文庫

御狀令披見^ハ、貴殿弥御無吳玠重存^ハ、然者土用中爲見
舞、以使目錄之通被相饋之、欣然之至^ハ、我等無吳事^ハ
條可易芳意^ハ、

朱力^キ 享保三年 八月廿三日

薩摩守

吉貴御判

松平大隅守殿

御返事